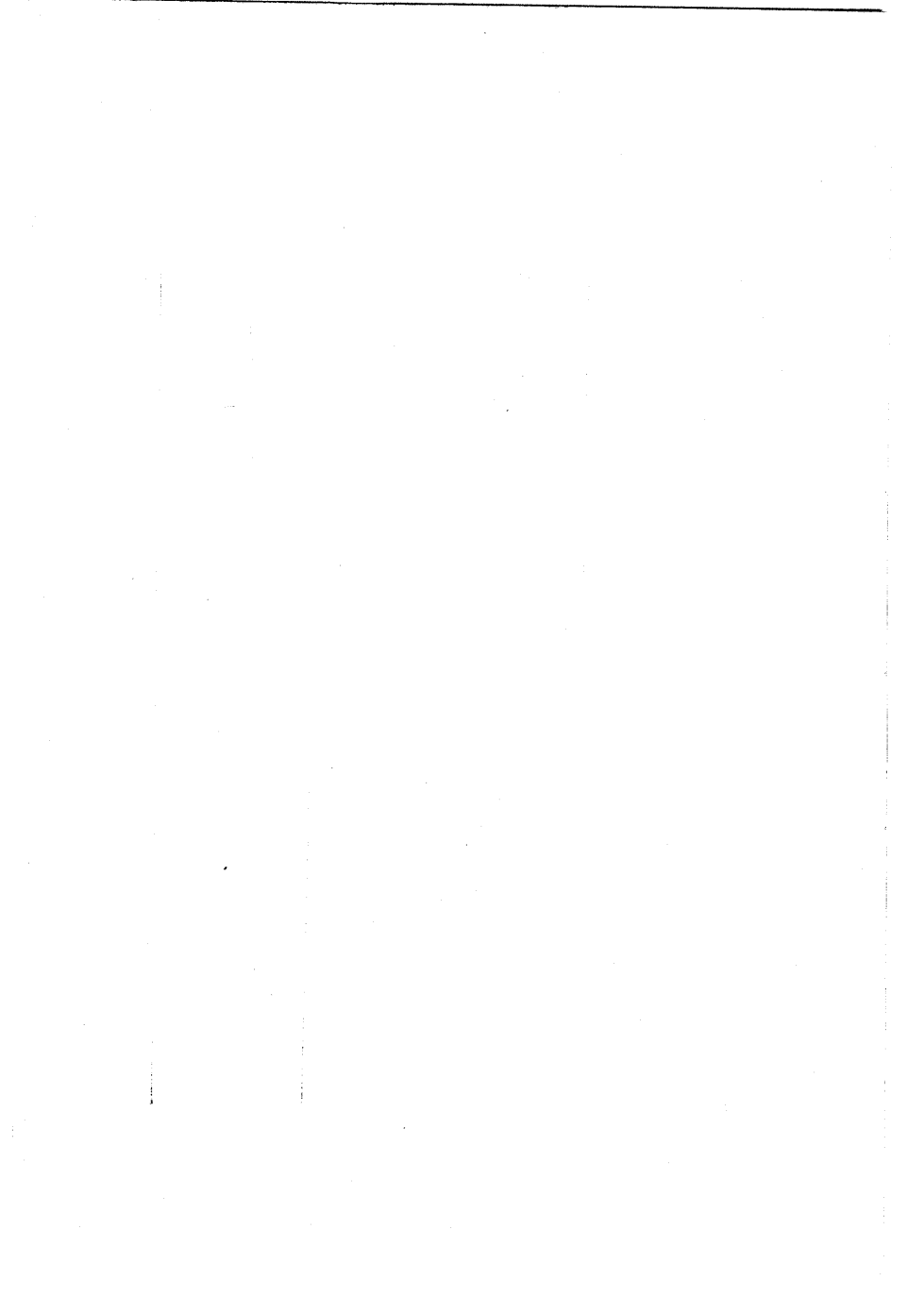


後井乙男著

謠の研究

更生園發行



はしがき

本書は明治三十九年五月俗諺論を題して富山房より出したものの改版である。久しく絶版になつてゐたのを、このたび富山房の諒解を得て更生閣が出版するに臨み、諺の研究を改題し、全部にわたりて修訂を加へ、且舊版附録の宗教に關する諺、男女夫婦婚嫁戀愛等に關する諺、西諺女性觀、親子兄弟叔姪に關する諺、及び酒に關する諺の五篇を除き、之に代へるに毛吹草、世話盡の諺、世話詞、渡世雀上下、娑婆彌次郎(笑謠)及び朝鮮の諺を以てした。是等は本篇の所説と相待つて、一層讀者の興味をひくものであらうと思ふ。

なほ本書研究の方法と泰西の事例とについては Trench の Proverbs and their Lessons に負ふところ多大なることを重ねて告白する。

表紙は蹴形蕙齋の諺をゑがいたものを採つた。

昭和四年五月

著

者

目次

第一章	緒論	一
第二章	諺の意義及び形式	一〇
第三章	諺の發生及び變遷	六四
第四章	諺の比較及び地方的特色	一二三
第五章	諺の機智、教訓及び詩趣	一七五
第六章	諺と道德	一九四
第七章	諺と宗教	三〇
附 錄		
北條氏直時代諺留		三九
毛吹草		三四一

世話盡	100
世話詞渡世雀	111
娑婆彌次郎	116
朝鮮の諺	120
諺と俳諧	120
十番諺合	127
世話盡病魔經	134
以上	

諺の研究

第一章 緒論

吾人が辯論を試み、談話を交ふるに方り、往々自ら諺を引き、或は屢、人の之を口にするを聞けども、その諺の含める機智、想像、詩趣、觀察、教訓等については、何人も等閑に附して、深く意を留めざるを以て、吾人が日常口にする一小俚諺が、いかに能く國民の性情、氣質を表顯し、道德信仰を發揮せるか、或は嘗て行はれて、今日亡びたる諺の量と質とはいかに、或は吾人の有するものと同種同意の諺は、いかばかり他國にも存在せるか、はた同一の根源より起りて、諸國に散布せしものゝ數は、いかほなるべき等の問題に關しては、殆ど關知する所なき

が如し。

人或は俗諺の蒐集研究の如きは、好事者流の閑事業なりといはむも、決して然らず、諺が昔より衆庶に愛好せられ、今もます／＼歓迎せらるゝは、争ふべからざる事實にして、處世上の主義方針として、顯著なる勢力を有し、幾多の歲月を経るも、依然として生氣を失はず、或は嘗に郷國の民衆に愛好せらるゝに止まらず、遠く外國にまで歓迎せられて根柢をすゑ、或は『時劫』の洪波蕩々として、あらゆる古代の遺物を一掃し去れるにも關せず、ひとり諺のみ安全にその波上に浮びて、數千年の昔より今日に傳はれるもの少からず。有名なる學者文士の好んで諺を引用し、或は多大の勞力を費して、之を蒐集せし例又乏しからず。是等の事實に徴して、俗諺の價值を認め、その輕視すべからざるを知るべき也。

偏僻にして浮華なる文化の行はれし時代には、諺は殆ど上流社會に容れら

れず、我が平安朝時代の如き、貴族社會にては諺を使用せざるを以て、源氏五十
四帖の大作にも、我が國固有の諺は、殆ど發見せられず、偶、これあるも漢土の故
事に過ぎず、今日吾人が諺を引きて所説を確むるが如き場合には、すべて人口
に膾炙する古歌を引用するを常とす、枕草紙には、藏人方弘が俗間の俚諺を用
ひしたため、あやしき詞づかひなりとて、女房たちの嘲笑を招きたる小話を傳ふ。
蓋し當時の搢紳者流は、民間の俗諺俚語を用ふるを屑しとせざりしに由るも
のにて、當時諺のなかりしにはあらず。されば今昔物語の如き、民間の風俗人
情に接觸すること多きものには、往々俚諺の散見するを認む。文學の權下移
して、布衣の手に落つるに隨ひ、俗諺との關係漸く深く、鎌倉時代よりその徴あ
らはれ、室町より江戸に至り、いよく著しく、巢林子、八文字舍等の書中には、應
接に遑なからむとす。

之を漢土の史に徴するに、戰國游説の士は論旨の平明易解を尙ぶより、俗諺

を引き譬喩を設けて、まづ君主の耳を之に傾けしめしは、史記、戰國策等を讀む者の、洽く知る所なり。孔孟の學漸く盛なるに及び、學者専ら是等の金言を引證して、俗諺を用ふるを快しとせず、諺の應用漸く衰ふるに至れり。聖賢の語と區別して鄙語俚言野語といふも、又諺を輕蔑したる一端を示すものなり。殊に知らず、孔孟は好んで民間の鄙語を採用し、之によりて立言したることを。世人が聖賢の格言なりとして尊奉するもの、なかばは俚諺の孔孟の口を借りて、再現せしものに過ぎざるを。

諺を鄙俗なりと輕蔑するは、ひとり和漢のみならず、泰西諸國にも此の傾向ありき。ロオド・チエスタア・ファイルトが其の子を戒むる書に、「搢紳者流は決して諺を用ひず」といひ、佛蘭西の、ゼシユイット、僧ブフウルが「諺は庶民の文語のみ」といへるが如き、共にその評價如何を窺ふに足る。沙翁戯曲中のコリオラヌスは、よくその驕慢なる性格を發揮し、平民に對する憎惡を顯すに、彼等が常

に用ふる俗諺を臚列して、平民を罵り、併せてその諺を罵ること、恰も其の室に入り、其の戈を操つて、其の人を伐つの概あり。

‘Hang’ em!

They said they were hungry, sighed forth proverbs:—

That, *hunger broke stone walls*: that *dogs must eat*;

That, *meat was made for mouths*; that, *the gods sent not*

Grain for the rich men only;—with these shreds

They vented their complainings!

Coriolanus, Act I.

殺してしまへ!

彼奴等は飢渴に及びしとて、様々の下世話をはなをる。

餓鬼は鐵壁をも破るの、犬も食はねばの。

くふための食物だの、貴人ばかりに神様は、
五穀を下さらぬのと、こま言の有條並べて、

愁訴なす土民めら。

之を要するに、上流社會の概して俗諺を賤視するは、古今東西その軌を一に
せり。されど聰明睿智の士は、決して世俗の好尚に左右せられず、アリストオ
トルは俚諺蒐集の率先者なりき。沙翁は深く之を愛して、無數の俚諺を曲中
に應用せしのみならず、Measure for measure, All's well that ends well の如き普通
の諺をとりて、外題に代へ、西班牙の大詩人カルデロンも、又諺を曲名に用ひた
り。わが巢林子の『天の網島』、馬琴の『稚枝鳩』の如き、又此の類なり。

沙翁に比肩すべき大家セルヴァンテスも又諺を愛し、その著『ドンキホオテ
物語』には、寡黙なる「スクワイア」が、一たび口を開けば、咳唾悉く諺の珠玉を走ら
すを見るべく、又屢、此の物語に對比せらるゝバットラアの『ヒュウデブラス』も、

又諺を用ふること夥しく、英國の下世話に通ぜざる者は、十分にその妙味を翫賞する能はず。この他佛のラベレイ、モンティヌ、英のチョウサア等、いづれも諺、又は之にちなめる引喩に富めり。基督も又屢、俗間の世話を引いて、談資とせり。ナザレの會堂に初めて現るゝや、醫者みづから「醫せ」といふ諺をひいて、聽衆がおのれに向つて發せむとする反問の機先を制し、ついで「豫言者その家郷にては敬はるゝ者にあらず」といふ諺を引用し（路加傳第四章）、又サマリヤのスカルといふ邑に至り、ヤコブの井の傍に休息せし時、秋穀の穰々たるを指して、弟子に語つて曰く、觀よ、はや田は色づきて、刈入れ時となれり、刈る者はその工錢をうけて、永生に至るべき實を積む、かくて播く者と穫る者と共に喜ばむ、「彼は播きこれに穫る」といへるは是に於て眞なりと（約翰傳第四章）。彼は此の如く諺の活用者たるとともに又其の製作者たり、その教訓はいづれも諺の形式をとり、金言として普く人口に膾炙せり。有名なるソロモンの箴言も、又蓋

し往時の俚諺を蒐集整頓せしものならむ。

論語の鳥之將死其鳴也哀。人之將死其言也善。(泰伯篇)知者樂水仁者樂山。(雍也篇)舉直錯諸枉。(顔淵篇)危邦不入亂邦不居。(泰伯篇)の如き、その辭氣より察するに、必ずその時諺たるべきを信ず。孟子の雖有智慧不如乘勢雖有鎡基不如待時曾子の人莫知其子之惡莫知其苗之碩の如き、共に明かに諺を引けるもの。之を要するに、古聖賢の諺を尊重し、且巧に之を運用したるは、東西符節を合はすが如し。我が國の古典記紀萬葉にも多少の諺を載録し、降つて寛弘四年(西曆一〇〇七)源爲憲經籍佛典より出づる常語六百三十一章を編録して世俗諺文三卷を成し、今はその上卷一冊を存するのみ。(續群書類從雜部)諺が學者の注意を惹きしは、漸く徳川時代にありて、松浦某の世話支那草(寛文四年刊)を先頭とし、元祿寶永の頃に蔀遯燕の漢語大和故事、貝原好古の諺草、貝原益軒の和漢古諺、井澤長秀の本朝俚諺等の編纂あり、室鳩巢が燈臺下暗しの

意義を駿臺雜話中に講述したる、心學者流の説教に屢、應用せられたる、貞徳派の俳人が、作句の資料に供せむとて蒐集したる等の事實あるのみにて、いまだ十分なる考察と識見とを以て、その眞價を定めしものあらず。たゞその蒐集の先鞭を著け且本邦固有の諺を多く集めたるは貞徳派の俳人にして、松江重頼の毛吹草(明暦元年刊)僧皆虛の世話盡(明暦二年刊)を推さざるを得ず。

之を要するに、諺はその辭平易明快にして、その意的確痛切なるを以て、古來明哲の士も、之に據りて教訓を垂れ、蚩々の民も、之を以て處世の法則とする一種輕便の寶典たり。或は節儉、忍耐の徳を教へ、或は不羈獨立の精神を鼓舞し、伶俐なる思慮分別を授け、圓滑なる善巧方便を説き、人世の情偽を暴露し、朋友の選擇、兒童の教育、酒色の警戒、榮辱苦樂に堪へて心を動かさず、非望の野心を檢束して、分に安んぜしむる等、その教訓や多種多樣にして、その效力や極めて顯著なり。さて是等の點について、諺の教ふる所は、果して正當なりや、否や。

これ吾人の研究考察を要する所以にして、即ち本論のこれより進んで説かむとする所也。

第二章 諺の意義及び形式

諺とは何ぞや、まづその語意を究めむ。本居宣長の説に曰く、コトは言、ワザは童謠ワザのタラハヒワザ、福俳フキハヒ優などのワザと同じくて、今の世にも、神又は死人の靈などの祟るを、物のワザといふ是なり。さてそは常にはただ祟りて凶き事にのみいふめれど、本は凶にも吉にもわたる言なり、何事にまれ、人の口を假りて、神の歌はせたまふを、ワザウタといひ、言はせ給ふを、コトワザといふなり。かゝればコトワザは、本は神の心にて、世の人に言はせて、吉き凶き事を喻し給ふをいひしが、轉りては只何となく世の中に偏く言ひならはしたる言をもいふなりと（古事記傳十三卷）。こは神道學者として至當の見解なれども、ワザの意を神意に歸

するは稍強辯たるを免れず。蓋しコトワザは爲業シワザに對する言葉コトワザにして、イヒグサといふ程の義と見ゆ。漢字の諺は、形聲字にして、俗言又は傳言なりと釋し、世に傳ふる常言なりと註せり。羅旬語の Proverbium は Pro (前に又は公に) Verbum (詞) の義にして、人前に公に話す詞の意なり。英語の Proverb、佛語の verbe 共に是にもとづく。獨逸語の Sprichwort は Sprechen (話す) Wort (詞) より來る。いづれも日常世人の口にする言語とするに於て相一致せり。

諺の語意は以上説く所の如く、東西ほど相似たるが、その語の用ひらるゝ意義の、廣狹區々にして、一定せざること、又東西相似たり。和漢の用例を検するに、某山に天狗棲み、某池に大蛇潛めりといふが如き、俗間の口碑をも俗諺といひ、節分に豆を撒くは、鬼を追ふためなり、といふ類の民間信仰をも世諺といひ、或は大海の一滴、九牛の一毛といふ如き比喩をも諺と唱へ、或はいろはのいの字も知らぬといふ如き、極めて普通なる形容語をも諺と稱することあり、こ

れ必ずしも和漢に於てのみ然るにあらず。是を以て俚諺蒐集者は、その採擇の範圍を限定するに苦み、一種の比喻詞フイギンフホモイ、同音異義韻律等を成し、普く用ひらるゝ短小なる文章、又は文句を以て諺とし、或は世に用ひ慣れたる特殊の形をなせる一切の言句を、目して諺となすに至れり。さらば如何なる定義を以て諺にあつべきか、これ極めて困難の業たり。他人の下したる定義の疵瑕を見するは容易なれども、自ら缺點なき定義を新に下すは頗る難し。故大西博士、その俚諺論中に、諺に廣狹の二義あるを説いて曰く、廣義にいへば如何なる言句も一定の形を取りて俗間に傳唱せらるれば、皆コトワザなり。故にたと一片の形容詞といへども、一定の形を具へて、常に或種類の事件を形容するものとして、人口に膾炙すれば、コトワザと名づけらる。されど狹義にいふ諺は、或種類の教訓、警戒、諷刺、又其他の諸種の觀察經驗に成れる智識を、いひ表はせるもの、約言すれば、吾人の生活に關する實際的眞理を發表せむことを目的と

せるものゝ謂なりと。一見極めて的確明瞭なるに似たれど、之を實例に徴するに當り、その辨別困難なる場合少からず。されば博士は例を擧げて説明するに、太子に守屋といひ、大海の一滴といひ、闇夜に鐵砲といふが如きは修辭學上にいふ比喩の句として用ひらるゝものに過ぎざれど、是等も通常コトワザと稱せらるゝ世のタトヘといふと、世のコトワザといふことは、殆ど同意義に用ひらるゝ故に、兒童に玩ばしむる「伊呂波タトヘ」の中には「糠に釘」といふ如きあれば、又「類を以て集まる」といふが如きもあり。かくタトヘとコトワザと同一視せらるゝは、畢竟狹義にいふ俚諺の中にも、譬喩を以ていへるものゝ多きのみならず、その句の言葉通りの意味に、既に一種の智慧、又は生活上の眞理を言ひ表はせるものも、尙これにた。へて更に廣き意味の眞理を教ふるものとして用ひらるればなり。例へば、案するより産むがやすい」といひ、負うた子よりも抱いた子といふが如きは、言葉通りの意味と、之にた。へたる廣き意味とを

併せ有せり。かくの如くタトへとして用ひ得るもの多數を占むれど、すべての俚諺皆然るにあらず、善はいそげ、小利大損、貧乏ひまなし、戀は思案の外といふが如く、タトへの意味なくして、唯一般の教訓、又は經驗上の事實を云ひ表はせるもあり、この故に狹義にて俚諺といへば、世に用ひ慣れたる一切の比喩、及びその他の言句悉くは俚諺にあらず、又すべての俚諺はタトへにあらず。されど委細に考ふれば、その差別の立て難き際なきにあらず。例へば、鬼に金棒といふが如きは、單に修辭上の比喩と見做し得ざるにあらず、然れども世間に屢遭遇する經驗上の事實を言ひ表はせるものとせば、これも狹義の俚諺の一種なるべし。膝がしらで江戸へ行くといへば、出來ざる事の比喩なると共に、又此の如き勞して功なき事を企つるを戒むる教訓の意味を含めり。「食はず嫌ひ」又は「商賣がたき」といふ如きも、能く教訓警戒の意味を通はすものとして用ひらる。「畠水練」「火燧兵法」「井の中の蛙」といへば、明かに教誨の心を含める俚

諺なるべし。かくの如く用ひ様により、解し方によりて、いづれとも見做し得べきものはあれど、兎に角たゞ世間に慣用する(修辭上の比喩に外ならぬ)言句と、經驗に基ける實際的智識を意味する俚諺とは、相分たざるべからずと。これ實に穩當周密なる見解といふべし。されど所謂修辭上の比喩に外ならぬ言句と、實際的智識を意味する俚諺とは、いかにして分つべきか。これも又用ひ様、解し方によりて、いづれにも見做さるべし、其人玉の如し、花雪の如しといふ如きは、何人も單純なる比喩とするに異議なからむも、玉に疵、雪と炭といはゞ、玉に疵ある如し、雪と炭との相異なる如しといふ比喩たると同時に、世には完全なるものなし、全く相反せるもの並び存すといふが如き、實際的智識をも意味するにあらずや。犬の年よりたる如し、狐を馬に乗せたる如しの類は、玉の如し、雪の如しと同様の比喩なるが如きも、老犬は無能なるもの、馬上の狐はそれほどくしきものなりといふ經驗上の事實をも傳ふるを以て、これはた狹義の

俚諺と認め得べきなり。此の如く考ふる時は、比喻と俚諺とを區別すべき標準を立てむこと、頗る困難なり。俚諺の範圍を限定し、その性質を解釋すること、それ此の如く困難なり。之を以て古來幾多の俚諺集は、諺的成句諺的比喻等の名目を假りて、その雜駁を庇護し、アリストオトル以後幾多の學者これが定義を試みたるも、いづれもその性質の一端を捕へて、巧妙の辭を弄するに過ぎず。要するに、いまだ完全なる學術的定義を下し得たる者なし、これ畢竟諺そのものゝ性質の然らしむる所にして、また如何ともすべからざる也。

ホウエル曰く、諺は簡短(Shortness)意義(Sense)鹹味(Salt)の三者をその要素とす。此の説も又頭韻を用ひて、機智を弄せし跡なきにあらねど、その旨意を忖度するに、諺は一口氣に發音せらるゝばかり簡短なるを要す、而して日常談話中の一言一句の如く、忽ち生じ、忽ち滅して何の影響もなき零碎無味の語句にあらずして、特殊の意義を有せざるべからず、且人の心を刺戟して、長くその記

憶に存せしめむために、一種の辣味あるを要すといふにあり。こは「短詩は猶蜂の如し、體小にして針と蜜とを具へざるべからず」といへるマアシャルの語と、その軌を一にするものなり。これ果して定義として満足すべきものなりや。まづその第一要素たる短簡について、當否を検せむ。俚諺の佳なるものは、大抵簡勁にして含蓄あり、簡潔は機智の魂ソウルなる格言は、諺にとりて極めて重要な條件にして、フルラアが定義に「多大の實を僅少の語に煎じつめたるもの」といへるも、又此の意に他ならず。されば諺は往々二三語より成る。我が「職がたき」毛嫌ひ「善は急げ」十人十色「住めば都」氣は心「歌とよみ」石臼藝「狼に法衣」壁に耳「親馬鹿」子寶といふが如き、支那の「紙、糠、及、米」禽、困、覆、車、英諺の Haste makes waste(せいでは事を仕損する)Extremes meet(兩端は出會ふ)Love is blind(戀の闇)Forewarned, forearmed(用心は鐵壁)の如き、皆極めて簡約なるものなり。獨逸の Voll, toll といふ諺は、僅に二個の單綴語より成りて、巧に豐滿と狂愚との關係を

説き、満の損を招き、過ぎたるの及ばざるを教ふるのみならず、聲調諧律の妙を極む。此の如く簡潔を尙ぶあまり、時に甚だしく省略の手段を弄することあり。たとへば「盲蛇におぢす」藪をつゝいて蛇を出すといふべきを「盲蛇」藪蛇といひ、「蛇」もとらず蜂もとらずといふべきを「蛇蜂とらず」と唱へ「我が田に水を引く」を「我田引水」と漢譯して、一氣に呼び易からしむるが如き類東西その例に乏しからず。

Sus Minervam. (A pig [teaching] Minerva)

Amanles amentes. (Lovers, lunatic)

語短く意長きは、諺に取る所なれども、短小は必ずしも諺の絶對的要件にあらず。たとへ出来得るかぎり語數を節約し、辭句を緊縮して、意味を充實するを要するのみ。されば俚諺中、往々その形體の短小ならざるものあり。是等は概ね性質情況の相似たる事物を、類聚對照せるの觀あり、和漢の俗諺中、比較的

長大なるものを列舉すれば

九重の塔高しと申せども、燕が飛べば下にあり、劍の刃はやきとて、岩の角を削らぬもの、竹の林高きとて、忉利天へはのぼらぬもの（十二段草子）

狸々は血を惜む、犀は角を惜む、日本の武士は名を惜む（義經記）

武士の子は轡の音に目をさます、商人の子は算盤の音に目をさます、乞食の子は茶碗の音に目をさます

落ちさうで落ちぬものは、二十坊主と牛の罌丸、落ちさうもなくて落ちるものは、五十坊主と鹿の角

日蓮宗は天台宗の蟲喰ひ、一向宗は淨土宗の蟲喰ひ、山伏は眞言宗の蟲喰ひ

金持金を使はず、槍持槍を使はず、辨當持さきに食はず

京の女郎に長崎の衣裳を著せ、江戸のはりをもたせ、大阪の揚屋で遊びた

い

常八月に常月夜、早稻の米に泥糞汁、女房十八われ二十

執斧不伐、賊人將來涓々不塞、將爲江河、熒々不救、炎々奈何、兩葉不去、將用斧柯、爲虺弗摧、行將爲蛇

高下在心、川澤含汚、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含垢、強弩之極矢不能穿魯縞、衝風之末力不能起鴻毛

城中好高髻、四方高一尺、城中好廣眉、四方且半額、城中好大袖、四方全半帛、
曉々者易缺、皦々者易汚、陽春之曲和者必寡、盛名之下其難副

狡兔死走狗烹、飛鳥盡良弓藏、敵國破謀臣亡

積羽沈舟、群輕折軸、衆口鑠金、積毀銷骨

屠者飮藿羹、造車者步行、梓匠處狹廬、陶者用缺罌、鸛扇翁手障暑、畜妓之夫恒

獨處

ひとり和漢のみならず、泰西諸國の諺も、その長きものは、大抵同類を集合列
舉したるに過ぎず。獨逸の古諺に曰く、

Man spricht, an vielerlei Leuten ist Mangel auf Erden : an Pfaffen, sonst dürfte einer
nit 6 bis 7 Pfunden ; an Adlichen, sonst wollte nit jeder Bauer ein Junker
sein ; an Huren, sonst würden die Handwerk Eheweiber und Nuppen nit trieben,
an Juden, sonst würden Christen nit wuchern.

世の中に不足な人間が四通りある、坊主に不足がなければ六七箇所の寺領
はもつまい。紳士に不足がなければ、百姓が皆田紳になりたがるまい。女
郎に不足がなければ、亭主のある女や比丘尼が商賣をすることはあるまい。
猶太人に不足がなければ、耶穌教徒が高利貸をやることはあるまい。

英諺にては、

To travel safely through the world, a man must have a falcon's eye, an ass's ears,
 an ape's face, a merchant's words, a camel's back, a hog's mouth, and a hart's legs.
 世間を無事に渡るには、鷹の目、驢馬の耳、猿の面に商人の口前、駱駝の背に
 豚の口、おまけに鹿の足

He that buys land, buys many stones;

He that buys flesh, buys many bones;

He that buys eggs, buys many shells;

But he buys good ales, buys nothing else.

土地を買へば石も買ふ、肉を買へば骨も買ふ、卵を買へば殻も買ふ、よい酒
 ばかりはすたりがない

フライタツハの蒐集せし亞刺比[・]亞の俗諺につきの如き者あり、

They said to the camel-bird, (i. e., the ostrich,) 'carry'; it answered, 'I cannot, for

I am a bird'. They said, 'Fly'; it answered, 'I cannot, for I am camel'.

駝鳥に荷物をかつげといへば、私は鳥だから出来ぬといふ。飛んで見ろといへば、私は駱駝だから出来ぬといふ。

こは鳳凰の壽に、百鳥朝賀せしに、ひとり蝙蝠至らざりしかば、鳳凰その無禮を責めたるに、蝙蝠答へて、われは獸に屬す、何ぞ君を賀するを用ひむといひ、その後麒麟の生誕に、蝙蝠また至らざりしかば、麒麟これを責めたるに、われは翼ありて禽に屬すと答へたると、同一笑話にして、殆ど諺の範籬を脱して、寓意譚の境に入らむとするものなり。

之を要するに、簡潔を尙び、冗漫を厭ふは、諺の願ふ所なれども、必ずしも短小なるを要せざること、以上の諸例これを證して餘あり。自餘の二條件セシス意義と鹹味セキとにおいても、又かくの如く、必ずしも絶對的必要條件といふべからず、多數の俚諺中には、乾燥無味にして、含蓄なく、辣氣なきもの、往々これあり。され

い一般俗諺の特徴として、此の三要素を指摘し得べきは、何人も異議なからむ。
上述の三要素以外に、今一つ必要缺くべからざる條件あり、即ち通俗ポピュラリテイといふ一特質にして、人口に膾炙し、世間に慣用せらるゝ普通性なきものは、假令寸鐵人を殺すの警句にして、諺たるべき價值十分なるも、尙諺として成立するを得ず、諺の特質を語りて、その最大要素たる普遍性を數へざるは、龍を畫いて睛を點ぜざるが如し。

俚諺蒐集に従事するの士、往々此の最大要件を等閑に附し、動もすれば自己の耳に入り目に觸れたる語句の簡潔奇抜なるものを、直に採録して、その語の俗間に普く行はれて、諺たるの資格を得たりや、否やを問はず、いまだ諺とならざるものを取つて、諺なりとす、早計も亦甚だし。畢竟是等は、早晚一般民衆の承認を得て、諺たるの時期あらむも、その普く行はれざる間は、いまだ目するに諺を以てすべからず。諺は猶貨幣の如し、國民一般にその價值を認められ、普

く授受通用せざるべからず。野水の「麥くひし雁と思へど別かな」¹、水草の「わが事と泥鰌のにげる根芹かな」²、半殘の「木兎は眠るところをさゝれけり」³の如き、或は「なくてぞ人は戀しかりける」⁴の和歌と同一の意を含む比喻とし、或は見當ちがひの杞憂に對する諷刺とし、或は油斷大敵の實例として、適切なるものにして、いづれも諺たるべき資格を、十分具備するが如く見ゆれども、汎く民衆の口に上らざるを以て、いまだ諺たる能はざるなり。

十七世紀の英國の著作家ゼムス・ハウエルは、俚諺の研究に熱中し、専ら俗間の俚語先哲の格言を集むるのみを以て満足せず、自ら格言五百語を新作して、後世の諺とならむことを期待したりき。その語中には *Pride is a flower that grows in the devil's garden* (高慢の花は惡魔の庭に咲く) *Burn not the fingers to snuff another man's candle* (人の蠟燭をあかるくせうとて、自分の手を焼くな) の如き稍見るに足るべきものありしも、ハウエルの希望は全く水泡に歸して、一句とし

て世に流傳せしものなく、折角苦心の警句も、空しく自家の庫中に朽腐して、世間通用の重寶たるを得ざりき。諺の人工を以て製出すべからざるや、此の如し。いかに意味深長なる金言名句も、多數の好尚に合し、衆人の口に誦せられずば諺たる能はず、これ諺に通俗の必要なる所以也。

されど多數の好尚に投じ、人口に膾炙するもの、必ずしも善良の諺なりといふにあらず、輿論は時に愚論たることあり、アリストオトルは政治上道德上、多數説の必ずしも信實ならざるを論ぜり、諺にも又此の理あり。廣く行はるゝもの、必ずしも一般人民の所信を、正確に代表せりといふべからず。この故に全く相反對せる諺の並び存すること尠からず、而してその一は光明界に屬し、他は暗黒界に屬す。たとへば人は、他人の缺點過失を聞くを喜び、その風説の眞なるを願ふ惡徳ありて、火のなき所に煙はたゞすとか、*Common fame is seldom to blame* (世の取沙汰は間違はぬ)などいふと共に、一方には人言の信するに足

らざるを認めて「語半分」They say so 'is half a liar(人がいうたと云ふは半分の嘘)といひ、忠恕の道を教へて「仇は恩でかへす」The noblest vengeance is to forgive(宥免は最上の復仇)の如き神々しきあれば「死ねがな目くじろ」敵の末は根を絶つて葉を枯らせ「He who cannot revenge himself is weak, he who will not is vile(復仇の出来ぬ奴は弱蟲せうとせぬ奴は意氣地なし)の如き残忍狠戾、鬼語に類するあり。さればホウエルが俚諺集の題詞に「語に曰く民の聲は神の聲なりと、公衆の選擇を経て、世に行はるゝ諺は、民の聲にあらずして何ぞや、されば諺に正理あるは論を待たず」といへるも、大體において不可なきも、多少の斟酌を要せざるべからず。

諺の資格は、主として一般公衆に天下の通貨たるべき承認を得るにあり。何人も新に諺に等しき價值ある貨幣を造り得れども、世間一般の重寶として用ひられざる以上は、從來既に行はるゝものとは、自らその價值を異にし、同一

の資格信用を得むには、尙今後多少の歳月を経て、天下一般に採用せらるゝ時期を待たざるべからず。諺は、長き経験より抽出せる短き文句なり。これを用ふるは、單に自己一人の所信を説くにあらすして、汎く天下の公論を語るなり。單に辯論文章の裝飾とするにあらすして、胡思亂想を一刀兩斷する利器として用ふるなり。されば新に作りたる格言よりも、古く行はるゝ諺を用ふるの有利なること、恰も新に溪流より掬ひよせたる沙金、鑛山より發掘したる金塊の、萬人の手垢に汚れたる通貨よりも、世間向よろしからぬと同一理なり。沙金も金塊もその實質は、通貨に劣れるにあらねど、一は現に貨幣として、年久しく通用するを以て、手より手に何人も快く授受すれども、他はその價格一目瞭然たらざるより、信用随つて薄からざるを得ず。かくして俗衆は古來の諺に信用を置き、日常進退動止の判定をこれに依頼す。蓋し自家一個のはかなき思慮分別よりも、多年衆人が經驗の結果にいづる諺に頼るの、安全なるを知ら

ればなり。

以上四要素の他に「Figurative expression」を以て諺の一要素に數ふる者あれども、こはさまで重要な特徴にあらず。諺の「Figure」に頼るもの多きは事實なるも、又何等修辭上の詞采を借らずして、佳諺たるを失はざるもの甚だ多し。「袖振り合ふも他生の縁」善は急げ、「福より證據」無い子では泣かれぬ、「思ひ立つ日が吉日」の如きは是なり。されば「Figure」を用ふといふよりは、寧ろ抽象的の言ひ方を避けて、具象的にするを以て、その顯著なる特色とこそいふべけれ。これは人の智力にのみ訴へずして、その感情想像に訴へて感動を強め、以てその弘通を助くる一大方便たるなり。

今二三の實例を舉げて、具象的敘述の效力多き所以を明かにせむ。秘密は顯れ易きものなりといへば、何等の妙味もなく、何程の印象をも與へざれど、之に代ふるに「壁に耳」といふを以てせば、全然その興趣を異にするにあらずや。

人はいつ死ぬるかも知れずといへば、平々凡々の眞理たるに過ぎざれども、無常の風は時を擇ばずといへば、自ら別様の趣を生ぜむ。 All men are mortal (人はすべて無常なり)に代ふるに、Every door may be shut but death's door (無常の門は鎖し難し)又は Death has no calendar (無常に暦日なし)を以てせば如何、人の腦裡に印する感銘の強弱、問はずして知るべきにあらずや。

抽象を避けて具象に就くと同一の理由により、物の度量を示すにも、單に輕重多少等の形容を以て満足せず、好んでその數量を明示す、その例枚舉に違あらず。

話半分、腹八合

あわて者半人足

預り物は半分の主

今まゐり二十日

一人娘に聲八人

一升の餅に五升の取粉

王は十善神は九善

十人十色

十人よれば十國のもの

百貫のかたに笠一蓋

明日の百より今五十

女房百日、馬二十日

百貫の鷹も放さねば知れぬ

百貫の馬にも驚おどろ

百日に百杯は盛るとも、一日には盛れぬ

百日の説法屁一つ

百日の旱には厭かねど、一日の雨には厭く

百になる姥もかうでは果てじ

百様を知るとも、一様を争ふこと勿れ

百里の道も一足から

千日に刈つた萱を、一日にほろぼす

朝起千兩、夜起百兩

千軒あれば共ぐらし

千石萬石も飯一杯、千疊萬疊も疊一枚

千日の勤學より一日の名匠

千里一跳ね

三寸の見なほし

三度の神正直

三人ばくちの一人乞食

鯨をくへば三年の古疵もおこる

三度目が定の目

乞食の子も三年たてば三つになる

三人よれば文殊の智慧

三人よれば人中

女三人よれば姦しい

朝起は三文の徳

福德の三年目

懺悔には三年の罪も減ぶ

石の上にも三年居れば温まる

人の痛さは三年でもこらえる

鴈は八百、矢は三本

亭主三杯、客一杯

いや／＼三杯にげ／＼五杯

馬鹿の三杯汁

二度あることは三度ある

禍も三年たてば役にたつ

粉糠三合もつたら養子に行くな

犬々三年人一年、人々三年犬一年

伊勢へ七度、熊野へ三度

三つ子の魂百まで

三日乞食すればやめられぬ

産三兩に、死に五兩

三十振袖、四十島田

棹は三年、櫓は三月

三歳の翁、百歳の童

里腹三日

さはり三百

桃栗三年、柿八年

唯識三年、俱舍八年

草花三年

岡惚も三年すれば、いろのうち

世は七さがり、七あがり

七人の子はなすとも、女に肌身ゆるすな

七度さがして人を疑へ

色の白いは七難かくす

親の光は七光

人の噂も七十五日

初物くへば七十五日生きのびる

猫を殺せば七代祟る

なくて七難あつて四十八難

百金之子不騎衛

一行有失百行俱傾

行百里者半九十里

百足之蟲三斷不蹶

中流失舫一壺千金

千金之子不_レ死_二于市_一

千金不_レ死_二，百金不_レ荆

千羊之皮不_レ如_二一狐之腋_一

千里不_レ販_レ樵，百里不_レ販_レ糴

千日晴不_レ厭，一日雨使_レ厭

千人所指無_レ病而死

千年田土八百主人

三人同行必有_二一智_一

三人行必有_二我師_一

莫_二三人而迷_一

作_レ舍道傍三年不成

字三寫魚成魯帝成虎

A pound of care will not pay an ounce of debt.

「ボンド」の心配も「オンス」の借金のたしにはならぬ

One bird in the hand is worth two in the bush.

森の二羽より手の一羽

Who buys, hath need of an hundred eyes; who sells, hath enough of one.

買手には眼も百あれ、賣手には眼一つで十分

It chanceth in an hour that come not in seven years.

七年のうちにも起らぬことが、一時のうちに起る

Seven may be company, but nine are confusion.

七人の客はてごろ九人はごたごた

Fresh fish, and new-come guests, smell by that they are three days old.

新しい魚と珍客は三日たつと鼻につく

Three things only are well done in haste: flying from the plague, escaping quarrels
and catching fleas.

急いでよいのは只三つ、疫病にげと喧嘩はづれに蚤をさへ

Es trinken tausend sich den Tod, ehe einer stirbt vor Durstes Noth.

渴して死ぬは一人飲んで死ぬは千人

Eine Katze hat neun Leben, wie die Zwiebel sieben Haute.

葱に七皮猫に九命

Tre lo sanno, tutti lo sanno.

三人知れば世界中

Tre fratelli, tre castelli.

兄弟三人は城廓三所

Tre donne e un papero fanno un mercato.

女三人鷺鳥一匹あれば市がたつ

Trois déménagements valent un incendie.

移轉^{ヒキコ}三度は火事に匹敵^{ムカ}ふ

ワンドルの大著獨逸諺語辭彙を檢するに三^{ドライ}の條下に六十九語七^{ゼイベン}の條に三十二語を網羅せり。之によりて觀れば三七百千の數は世界一般に使用せらるゝ傾向あり、但し七の數の殊に我國に多きは、佛教の影響少からざること、七難・七福・七寶・七佛・七菩提・七衆・七生・七夜等の語のもとづく所を見て知るべき也。

具象的の語を用ふると共に、また一見矛盾せるが如き文句即ち Paradox を使用して、人聽を聳かさむと力む。「食はうとて瘦せる」「急がば廻れ」「言はぬは言ふにまさる」「逢ふは別れの始」「合せものは離れもの」「譽むるは毀るの基」「兄弟は他人

の始、浅い川も深く渡れ、論語よみの論語知らず、遠くて近きは男女の中、人を使ふは使はるゝ、負けるが勝、損して得とれ、知つて知らざれ、多藝は無藝の類、これなり。

「海で死ぬるより不養生で死ぬる者多し」といへば、何の奇もなき平明の眞理たるに過ぎざれども、*Im Becher ersaufen mehr als im Meere*（海中より盃中に溺死多し）、又は *Im Wein und Bier ertrinken mehr denn im Wasser*（水よりも酒に溺れ易し）といへば、復然特異の光彩を發するにあらずや。吾人は海洋の廣大にして、酒盃の細小なるを熟知し、且古來無數の生靈が、海底の藻屑となりたるを知りて、いまだ一人の盃中に溺没せし者あるを聞かず、然るに今や却つてその細小なるものに、いまだ曾て耳にせしことなき溺死者の多しと聞きて、まづその意外なるに驚き、ついでその眞意を了得するに及び、一種の快味を感じずんばあらず。

此の如くあらゆる手段を用ひて、人の注意をひき、心耳を刺戟せむと計るより、時としては針小棒大の奇語を弄することあり、修辭學に所謂誇張法（ハイパーボラ）これなり。

船頭多くて船山へのぼる

惚れた目には痘痕（アザ）も醫

鰯の頭も信心から

蚤の息が天へとよく

塵積りて山となる

ゐざりに願蹴らる

○ 親の打つ拳より他人のさするが痛い

雀百まで踊忘れぬ

一匹狂へば千匹の馬も狂ふ

黒犬に嘔まれて、灰汁のにれかすに忍ぢる

落武者薄の穂におづ

三日乞食すれば一生忘れられぬ

家を賣れば釘の價

あるじの好きなら、盲猫でも七匹飼ふ

髪のゆひたては親でも惚れる

千丈之隄以蟻蟻之穴潰

坐喫山空

殺人可恕、無禮難容

人莫蹟于山、而蹟于垤

殺君馬者路傍兒

波斯の諺に友誼と仇怨とを對比して、*A needle's eye is wide enough for two friends; the whole world is too narrow for two foes* (管鮑の友は針孔尙廣く吳越の仇は天地尙狹し)といひ亞刺比亞の諺に極めて運の強き人を稱して、*Throw him into the Nile, and he will come up with a fish in his mouth* (ナイル河へぶち込んで魚を啜へて出て来る)といひ獨逸にては *Wurf er einen Groschen auf Dach, fiel ihm ein Thaler herunter* (屋根の上へ一文投げると一兩になつて落ちてくる) 又は *Wer Glück hat, dem kalbt ein Ochs* (運のよい者には牡牛が子を生む)といひその反對に極めて薄倖の人を英諺に *He would fall on his back, and break his nose* (うしろへ轉んで鼻を缺く)といふが如き、いづれも誇張の妙を得たりといふべし。

口調よくして傳唱し易きものは記憶に便なれば隨つて弘通すること速か

なり。諺に詩歌の體制をとるもの多きは、之がためのみ。邦諺には七五五七七七五五等の聲律に従ふもの多し。就中七五調の多きは、いふまでもなく律語變遷の歴史に伴へる自然の傾向にして、且歌謠の一節を割取して諺となせるものあるに因る。

七五調

心の鬼が身を責める

熊野松風に米の飯

目も口ほごに物をいふ

思ふ中には垣をせよ

花は櫻木、人は武士

旅は道づれ、世はなさけ

月に叢雲、花に風

夜道川だち馬鹿がする

龜の甲より年の劫

さはらぬ神に祟なし

爪で拾うて、箕でこぼす

噂をすれば影がさす

笑ふ門には福來る

苦は色かはる松の風

渡る世間に鬼はない

詩を作るより田を作れ

聞いて極樂、見て地獄

親はなくとも子は育つ

切ない時の神だのみ

藪をつゝいて蛇をだす

細工貧乏人寶

所かはれば品かはる

算用合うて錢足らす

跡は野となれ山となれ

五七調

網なくて淵な臨みそ

安物と化物はない

陰陽師身の上知らず

瓜の蔓に茄子はならぬ

死んだ子の年を數へる

七七調

鶴は千年、龜は萬年

人と屏風はすぐでは立てぬ

思ふ念力、岩をも通す

身を棄てゝこそ浮む瀬もあれ

義理と犢鼻褌かゝねばならぬ

帶にや短し、襷にや長し

人は一代、名は末代

水の流と人の行末

鳥はたてども跡を濁さず

なるはいやなり、思ふは成らず

人の噂も七十五日

借るは八合、濟すは一升

五五調

麥飯で鯉を釣る

背に腹はかへられぬ

川心に繩を張れ

犬の齒にも蚤あたり

賣物に花飾る

古川に水絶えず

營に結律あるのみならず、同語又は類音を反覆し、同韻を疊みて諧調の耳に
快きもの少からず、同語又は類音を繰返せる例は、

色氣より食氣

花の下より鼻の下

家持より金持

貧うた子より抱いた子

金の切れ目が縁の切れ目

借著より洗著

いやしは悔し

そつと申しやがつと申す

短氣は損氣

日光を見ぬうちは結構といふな

貧すりや鈍する

弱り目に祟り目

多勢に無勢

餅は餅屋

合縁奇縁

番町に居て番町知らず

昔は昔、今は今

明日は又明日の風が吹く

伊豫に吹く風は讃岐にも吹く

中るも八卦、中らぬも八卦

味噌も尿も一所

同音を疊み、又は頭韻、尾韻をなせるものは、

寐耳に水

親のこゝろ子知らず

蒔かぬ種は生えぬ

藥九層倍

なくて七癖

なすやうにならないで、なるやうになる
にら、んにく、にぎり屁

こはし見たし

長し短し

學者むしやくしや

聞いて極樂、見て地獄

やすからう惡からう、高からうよからう

これを外邦の諺に徴するに、類例の豊富なること、我に勝るものあり。支那の

諺も又頗る韻律に富めり、まづ同語を反覆して、姿致をなせるものには、

貴○其○所○以○貴○者○貴○

作○者○不○居○居○者○不○作○

花○無○百○日○紅○人○無○千○日○奸○

種○瓜○得○瓜○種○豆○得○豆○

尾韻には、

千○金○之○子○不○死○于○市○

惑○者○知○反○迷○道○不○遠○

當○斷○不○斷○反○受○其○亂○

終○身○讓○車○不○枉○一○舍○

腐○木○不○可○以○爲○柱○卑○人○不○可○以○爲○主○

躡○馬○破○車○惡○婦○破○家○

奔車之上無仲尼。覆車之下無伯夷。
從善如登。從惡如崩。

泰西諸國の諺にて押韻せるものは、

Good mind, good find

Wide will wear, but tight will tear

Little strokes fell great oaks

Women's jars breed men's wars

East, west, home is best

Slow help is no help

Measure is treasure

Who goes a-borrowing, goes a-sorrowing

Borgen, sorgen

Ehstand, wehstand

Wie gewonnen, so zerronnen

Uniti muniti (United, fortified)

Nocumenta, documenta (Forewarned, forearmed)

Qualis vita, finis ita (As a man's life has been, so will be his end)

頭韻の例は、

Frost and fraud both end in foul

Like lips, like lettuce

No cross, no crown

Out of debt, out of danger

押韻は簡潔を相待つて効果いよく大なり。簡潔に加ふるに頭韻尾韻兼

ね備はりて、意義また凡ならず、衆妙を一句に集めたるは、羅句諺の Traduttori,

tradition なり。こは翻譯者が屢、原作者の精神を誤るを痛罵せる語にて「翻譯者は反逆者」と譯せば、稍、その意義聲調を傳ふるに近からむか。諺の精華はその國語特有の聲調と簡潔とに由るもの多きを以て、容易にこれを他國の語に移す能はず、殊にその押韻如きは、到底翻譯の限にあらず。獨逸の

Stulus und Stolz

Wachset aus einem Holz

を翻して「馬鹿と高慢は同根より生ず」とし、*Die Hausfrau soll nit sein eine Ausfrau* を「内君は外君たるべからず」などいはむには、興味索然として蠟を嚼むにも劣らむ。江南の橘は江北の枳、我國の櫻花、歐洲の薔薇、地を易ふれば色なく香なし。もし是等の障礙を排し得て、原文の意義聲調二つながら移し得たらむには、外國の諺も又自國のものと同様に愛誦せられて、茲に第二の故郷を作るに

至る。然れども此の如きは文法語脈の相近似せる歐洲諸國にも極めて稀なり。トレンチはその稀有の一例として英國に移植せし獨佛根ばえの諺を掲げたり。

Mother's truth

Keeps constant youth

Mutter-treu

Wird täglich neu.

Tendresse maternelle

Toujours se renouvelle.

これとても英諺は押韻のために、稍、窮したる色なき能はず、況んや語脈文法全く異なる邦語を以て、泰西の諺を譯して、「反逆者の嘲を招かざらむことをや。」俚諺は又對偶を喜ぶ傾向あり。而して之に正反の二種ありて、一は互に相類似せる事物を聯結し、他は相反せる性質のものを對比す。

馬には乗つて見よ、人には添うて見よ

都は目はづかし、田舎は口はづかし

上戸は毒を知らず、下戸は藥を知らず

刀は武士の魂、鏡は女の魂

女やもめに花が咲く、男やもめに蛆がわく

あるやうで無いものは金、なさうで有るものは借金

川中には立てども、人中には立てぬ

二十後家は立てども、三十後家は立たぬ

藥人を殺さず藥師人を殺す

慈悲は上から禍は下から

問ふは一旦の恥問はぬは一生の恥

菩薩(米實)が入ればうつむく、人間みが入ればあほむく

門徒物知らず、法華骨なし、禪宗錢なし、淨土情なし

すきは身を通す芥子は鼻を通す

大海は塵を擇ばず、名人は人を毀らず

同じく對偶法に據れるものうちに、前者と少しく形を異にするは、性質關係の一部分を等しくするものを並べ舉げて、一説明語の下に結合するにあり。而してその對偶せらるゝ二物の一般性質相距ること遠ければ遠き程、人の意表に出づること多く、愈益、その妙を覺ゆるは Paradox におけると同一の心的作

用に基く。

當事と越中禪は、向うからはづれる

噓と坊主の髪はいはぬ

縁と月日は待つがよい

親の五十年忌と、竹のまはし切りは、あはぬもの

男の心と川の瀬は、夜の間に変る

親の悪いのと、味噌の悪いのは、直しやうがない

金持と灰吹は、溜まる程きたない

瘡と虱は、隠す程ふえる

義理と禪かゝねばならぬ

客と白鷺は、立つたが見事

下衆の子と糠團子は三つまで

傾城の誠と琴箱のそらぬは無いもの

女房と疊は新しいがよい

馬鹿と鉄は使ひやうで切れる

馬鹿と相場には勝てぬ

泣く子と地頭には勝てぬ

煽動イダテと春モツコには乗りたくない

佛法と薬屋の雨は出て聴け

時としては、全く説明語を省略して、名詞のみを疊み重ねること、地震雷火事親父「誰にんにく握り尻」石部金吉金兜「牛渡馬勃敗鼓の皮といふ如きあり。大
小輕重強弱等の次第によりて配列すること、「富士二鷹三茄子」「平二抱き三
負ひ」「一程二金三器量」「押二金三男」「一聲二節」下衆の一寸のろまの三寸、馬鹿の

明け放し、二に瓜核、二に丸顔、三平顔に、四長面、五痘痕、六目つり、七頬焼け、八かんち、九禿、十いぐちの如きあり。この二種は外國に多く例を見ず。

『當事と越中禪』の類と粗、その性質を等しくして、しかも對比の形式をとらざるより興味乏しく、謎語駄洒落の境に陥り、諺として價值多からざるは、

江戸兒は五月の鯉で口ばかり

お庭の櫻で、見たばかり

金槌の川流れで、頭があがらぬ

川流れの芥で、杭(食)にかゝつて頭があがらぬ

傘屋の小僧で、骨折つて吐られる

麴町の井戸で、底が知れぬ

鐵砲玉の使で、いつたきり

日和見の鳥で、高くとまつてる

羽織の紐で胸にある

北國の雷で、きたなり

是等はいづれも、蛇の貝の片思、藻にすむ蟲のわれから」といふ類にして、就中「北國の雷」の如き、單に言語の遊戲に過ぎざるものあり。嚴格なる意義にては、諺と稱すべからざるものなり。されど「五月の鯉」の如き、僅にその形を變へて「江戸兒と五月の鯉は口ばかり」とすれば、當事と越中式の諺たるに至る。「糠に釘」立板に水の如きを諺と見做す時は、麴町の井戸、日和見の鳥も亦諺とせざるべからず、何となれば、糠に釘は、利目がないの説明語を略したるに過ぎざればなり。

以上述ぶる所は、我國の諺に於て較著なる形式にして、この他、商賣は牛の涎、みすぎは草の種、待手に帆をあぐるの如く、巧に暗喩を用ひたる、目糞鼻糞を晒

ふ、無理が通れば道理が引込む、無常の風は時を擇ばず、雪隠蟲も所びいき、ごまめの齒ざしり、雁が飛べば石龜もちだんだ、夜寒^{ヨサムラフ}郎^{なな}麥^{マク}好^{ヨシ}、早春の夜寒は麥の生育に好し、團栗の背くらべの如く、擬人法に據りたる等、千種萬様にして、一々その形式を分類するは、到底その煩に堪へず。之を要するに、聲調諧律によりて人耳に快からしめ、誇張矛盾の奇語を弄して、人心を刺戟する等、孰れも之に由りて一般公衆の注意をひき、記憶に存し易からしめて、長く諺の生命を保ち、汎く天下に通用せしむる用意に他ならず。

第三章 諺の發生及び變遷

古代の修辭家に諺を釋して作者なき格言なり(Proverb without an author)とする者あり。諺の作者を知る能はざるは事實なれども、作者なくして立言あるべきにあらず、草木蟲魚皆種子あり。諺豈にひとり天より降り地より湧く

べけむや。

必ずやこれを唱道せし第一人あるべし。されどそれは當時唱道者その人の周圍に遍滿浮遊したりし思想感情を捕捉し、凝結せしめ、又は衆人の早く心に感じ、口に唱へし所を飾るに、適當なる衣服を以てせしに止まる。即ち偶然一人の口を假りて、衆人の智を發表せしに過ぎず。是を以て之を觀れば、諺を成立せしむる勢力は、一人の發言者の側にあらずして、寧ろ承認せし多數公衆の側にあり。一個の立言をして始めて諺たるの威望を具へしむるものは、即ち一般公衆の裁可允許にあり。されば諺をして成立せしむるには、人々皆その製作に與りし權利を有す。この意味に於て、諺には特殊の作者なしといひ得べし。かくて諺はその成立の始めに於て、或一人の製作發表せしものならずして、人々自己の製作なるが如く感ずるより、得々として之を愛護使用し、他人の之を口にするを聽いて益、得意を感じ、愈、同情を表するに至る。諺すでに衆

庶の聲にして、その作者を知るべからずとすれば、隨うて、その發生の時期を精確に定めむことの困難は、言を待たざれども、多數の俗諺中には、間々その發生の時期、前後新古の關係變遷等を、推測し得べきものなきにしもあらず。

吾人が座談演說等に平常使用する多數の諺は、吾人の祖先より知識的道德的遺産の一部分として、繼承せるものにて、吾人が新規に製作したるにあらず、有史以來子々孫々相承け、内外諸種の天然人事に遭遇し、物に觸れ、事に感じ、或は觀察し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々雜多の經驗を積み、人生に普通なる智識を感得して、後世子孫に遺せるもの、即ち今日行はるゝ多數の俗諺なり。「手輕にして、受用し易きために、滅亡の非運を免れし古智識の斷片なり」とは、二千年の昔アリストオトル既にこれをいへり。

トレンチの俗諺論に、「今日文明諸國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺産にして、或は口々に語りつぎ、或は前代の記者によりて、後世に

書き傳へられて、希臘羅甸の古きより、中世の諺に至るまで、依然として今日に存し、諸國に行はる。されば近き頃に起りたる諺ならむと、一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠久なるを發見すること少なからず。人の贈遺を無遠慮に批評するを戒めて、進物の馬は口を見な (One must not look a gift horse in the mouth) といふが如き、何人も英國生粹サスの諺なりと思ふめれど、決して然らず、四世紀の學僧セント・ゼロウムが、自著の書冊を人に贈りしに、その人がこれが誤謬を指摘非難せしかば、ゼロウムこの諺を引きて答へしことあり。

「嘘ウソつきは記憶力を要す」(Liars should have good memories)といふも、近世のもの如く思はるれど、これはたゼロウムが好んで引用せるものにて、尙これより早く既にクインテリアンの書中に散見せり。「旅の道づれは馬車に當る」(Good company on a journey is worth a coach)といふも、又遠く羅甸より來れるなり」とて、この類の例證を多く舉げたり。

現今行はるゝ我國の諺にも、その發生時代の頗る遠きものあり。「切創に鹽」「重荷に小づけ」の如きは、既に萬葉集に見え、「一升瓶に二升は入らぬ」といふは、枕草紙に出で「死ぬる子みめよし」「飯粒で鯛釣る」といふは、共に土佐日記に見ゆ。是等いづれも千年内外の歴史を有するものならむとは、この諺を口にする人の、なべて豫想せざる所なるべく、今日にては既に載籍の徴すべきものなしといへども、その淵源の遠きこと、前數者に相譲らざるもの、尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同一なる諺の數、次第に多くなりゆくは、固より言ふまでもなきことにて、平家物語・盛衰記・狂言記・舞の本等を一讀せし者の、容易に認め得る所なり。

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては彼我相交換して、總方同時に行はるゝより、いづれが借主にして、いづれが貸主なるか、容易に判別し難く、精勵なる俚諺研究者が、これぞ醇粹まじり氣なき自國特有の諺

なるとて誇りしものゝ、意外にも他邦の書中になほ古く用ひられたるを發見して失望し、さてはその所有權の歸著を定めかねて、空しく頭を悩ますが如き、古來その例少からず。蘇格蘭の諺を専ら蒐集せしケレエも、又この困難に逢著して、落膽せしよしを自ら説けり。貝原好古の諺草、井澤長秀の本朝俚諺、松井壺峰の野語述説の如きは、寧ろ漢土に類似の典故あるものを主として蒐集したりとおぼしき形迹あり。

四面海を環らし、海東に屹峙する我國は、歐洲諸國の如く、他國の交通自由ならず、人種言語の關係も、又彼の如くならざるより、他國と諺を貸借融通して、その本主の誰なるかを判するに苦むが如き患少しといへども、支那朝鮮との交通風に開け、儒佛の教深く民俗に浸染せしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべきものゝ他に、衣服外貌は純然たる國風ながら、なほその正體は儒佛にあらずや、と疑はるゝもの、往々これあり。殊に僧徒

は布教の必要上、經文中の金言を俗譯して、眼に一丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、汎く諺として世上に流布するに至る。「合はせものは離れもの」(會者定離)、「仰向いて唾はく」(四十二章經惡人欲害賢者、仰而唾)、「蛙の面に水」(鹿の角を蜂が刺す)〔普灯錄、蛙面水、鹿角蜂〕の如き、巧に日本化せられたり。「渴しても盜泉の水を飲まず」〔陸機詩、渴不飲盜泉水、熱不息惡木陰〕、「麒麟も老いては驚馬に劣る」〔戰國策、麒麟之衰也、驚馬先之〕の類は、何人も一見して國産にあらざるを辨すべけれど、麻につるゝ蓬〔荀子、蓬生麻中、不扶而直〕、網なうして淵な臨みそ〔漢書、臨淵而羨魚、不如退而結網〕、針の穴から天のぞく〔史記、如從管中、關天〕、「井の中の蛙」〔莊子、井蛙不可以語於海〕、情に刃向ふ刃なし〔孟子、仁者無敵〕の如き、極めて通俗にして平易、佶屈拗率なる儒佛の語に、胚胎せしものとは、誰か思ふべき。「壁に耳」といふは古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言、耳屬於垣」の語あり、羅甸にも同一の諺ありて、歐洲諸國に分布せり。蓋し是等はたやす

くその本主を定め難きものに屬す。

此の如く國民は互に各自の諺を、交換融通するものなるを以て、一國の俚諺は、時に隨ひ増減生滅なき能はざるは、猶一國の國語が、一方において外國語を適用して新國語を作ると共に、他方に於て自己の國語を忘却して、廢滅に歸せしむることあると同一一般なり。維新以後西洋諸國との交通盛にして、翻譯書を讀み、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、時は金、習慣は第二の天性、二兎を追ふ者は一兎をも獲ず、大山鳴動して一鼠いづ、天は自ら助くる者を助く、健全なる精神は健全なる身體に宿る、などいふ外國の諺輸入せられて、多少諺の數を増加したるが如き觀あるも、徳川時代に行はれたる諺にして、既に國民の記憶を去りたるもの又多し。毛吹草(寛永十五年成)所載の世話、すべて七百有餘、而して今日世人の口頭に存するもの、その三の二をいえず。今や俚諺の研究に志ある者すら、尙解し難きものあるにあらずや。一國俚諺の増減常ならざること此

の如く、舊を忘ると共に新を迎へ、生々蕃殖して窮期あるなし。人の世にあるや、生活上絶えず新經驗に遭遇し、知識上に道德上に、新たなる自家の確信を生ずると共に、その經驗的所見を發表するに、一種の語句を以てす。而してその語句にして、幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般國民の贊同を博し、遂に諺として成立する權利を享有するに至る。彼の明治以後に生じたる「貧乏少尉遣繰中尉どうぞかうぞ大尉」の如き、その初めは一部青年士官の歎聲に過ぎざりしが、これと密接の關係ある下宿の主婦出入の商人等、まづその眞理なるを認め、ひいて世間一般に及び、こゝに一本立の俚諺たる榮譽を得たるにあらずや。明治十年前後官吏の倨傲尊大を極めて意氣揚々たりし際、商人社會はこれを最上の顧客として利を貪りしより、「洋服一割髭二割」の諺あるに至りしが、今や洋服蓄髭の珍しからぬと共に、官吏の生計裕かならず、随つて此の諺も漸く聞えざるに至れり。

俚諺發生の時代極めて新しきものは、只人々の口頭に存するのみにて、書冊に登記せられず、これその通用の範圍なほ狭く、且發生の日近きに過ぎて、人の注意を惹かざるに因る。新聞紙の警句、落語家の秀句の如き、その讀者、聽衆の間には殆ど諺同様に通用せらるれども、見聞狭き田舎漢には、猶馬耳東風、唐人の寐言たるを免れず。彼の「馬車馬的」「汽車の後押（先曳）」の類は、就中稍、汎く行はる。是等世人の口にのみある俗諺も、フロバート・デ・サユア世話文學として價值あるものは、宜しくこれが保存を務むべきなり。The man on the dyke always huris well（岡目八目の意）とは、恰く愛蘭に行はるゝ諺なれども、いまだ何人の俗諺集にも記載せられずといふ。

俚諺の蒐集に従事する者は口頭にのみ存する諺をも、漏らさざらむ用意を要するのみならず、悉く古今の群籍を涉獵して、小心翼翼、文學の恒河沙中より、俚諺の遺珠を拾はざるべからず。されど、こは元より云ふべくして行ひ難け

れは、まづ俗諺に富める小説戯曲の類を、主として探求するを要す。小説戯曲は古來の諺をその中に採録蓄藏するのみならず、書中の佳句妙語は、往々世人に裁斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむるあまり、一見その出所を辨知し難きまで、相貌を變ずるに至る。

かくて是等の警句は終に諺てふ刻印うちたる新貨幣として通用せらる。

「惡しき交は善き行を害ふ」哥林多前書第十五章といふは、希臘の喜劇にその源を發す、セント・パウロがこの戯曲を讀みしや否や、知るべからずと雖も、當時希臘語を用ふる人々の間に、普く行はれたる套語なりしかば、彼が一箇の諺として採り用ひしや、疑を容れず。沙翁の『ハムレット』を讀む者は、英國今日の諺が、この曲中の文句よりいづること、多きに驚くべし。我國の王朝文學は、極めて諺に縁遠く、源氏物語の鉅篇すら、僅に「玉の疵」花のかたはらの深山木、夢に王す

る等の二三比喻を存するのみにて、殆ど完全の諺と目すべきものを見ず、又その佳句の諺となりて世に行はるゝものも無きが如し。こはその作者が、九重の雲居まぢかく仕へし女性なるからに、自ら蟹の嘲なす下世話に通ぜざると、書中の世界が宮壺の中に限られたるに因る。而してその警句が後世の諺となるを得ざりしは、優艶靡曼なる中古文の性質かゝる方面に適應せざればなり。枕草紙の「遠くて近きは男女の中」すさまじきもの、老女の化粧冬の月の二句を贏ち得たるは、簡淨勁拔の徳に由らずばあらず。王朝文學を繙く者は、何人も引歌てふものゝ多きに惱殺せらるべし、古歌の記誦を、無上の學問と心得たる當時の上流社會は、その一二句を聞いて、直に一首の意義を了せしより、引歌は恰も後世の諺と同一の效力を有したりき。之を以て諺を採用すべき必要隨うて乏しく、狭衣は只一個答しは君なし、大鏡は僅に五個山階道理。瓜を乞はば器物を設けよ。内劣りの外めでた。都ほとり。思ふこといはぬは

腹ふくるを、吾人に傳ふるに過ぎず。

文筆の權輳紳の手を離れしより、文學と俗諺との關係漸く厚く、海内文章布衣に落ちし徳川時代に至りて、最もその盛を極む。平家物語・盛衰記に、多數の諺を含むはいふまでもなく、徒然草の文句にして諺となりしもの少からず、女の髪の毛には大象もつながる、罪なくて配所の月を見る、高名の木のぼり、花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかはの如きこれなり。「思ふこといはぬは腹ふくる」の如きも、汎く世に行はるゝに至りしは、大鏡よりは寧ろ徒然草の功といふべし。巢林子は許多の俗諺を巧に運用せしのみならず、その警句の諺の如く用ひらるゝもの、例へば男女の關係を説破して、縁のあるのが誠ぞや、(遊君三世相)といひ、物の少量なるを形容して、鉢坊主の手のうち程(戀八卦柱曆)といふが如きあり。忠臣藏の嘘からでた誠、官原傳授手習鑑の「人形かく子は頭かく、伽羅先代萩の」腹はへつてもひもじうないの類、又この例なり。

和歌俳句川柳俗歌の類は、その形體短小にして、引用にも、記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用せらるゝもの多し。こは固より本來の諺とは別種のものなれども、歳月を経るに従ひ、その作者を忘れ、その和歌たり、俳諧たるを忘れて、諺と同一視せらるゝに至る。是等は皆世相を觀じ、訓戒の意を含み、或は含むが如く解釋し得るより、世俗に歡迎せられしまでにて、文學としての價值は、必ずしもその俗受到に伴はざること、猶書生社會に愛誦せらるゝ劍舞詩の俗惡なる、さては天地を動かして雨を降らし、鬼神を感じしめて奇特を現したり、と傳ふる和歌俳句の、悉く地口めき、口合じみたと、同一一般なり。

和歌に基くものは、

○世の中は何か常なる飛鳥川、昨○日○の○淵○ぞ○今○日○の○瀬○にな○る○ 古今集

か○た○み○こ○そ○今○は○仇○な○れ○これなくば忘るゝ時○も○あ○ら○まし○もの○を 古今集

さ○び○し○さ○に○宿○を○立○出○で○な○が○む○れ○ば○い○づ○く○も○同○じ○秋○の○夕○暮 良 暹

心には下ゆく水の湧きかへり、いはで思ふぞいふにまされる。○古今六帖
 ある時はありのすきびにくかりきなくて、ぞ人は戀しかりける。失
 深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり。頼
 君ならで誰にか見せむ梅の花、色をも香をも知る人ぞ知る。○友
 長らへば又此頃や忍ばれむ憂しと見し世ぞ今は戀しき。清
 逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり。敦
 末の露本の雫や世の中の後れさきだつ例なるらむ。遍
 山川の末に流るゝ椽がらもみをすてこそ浮む瀬もあれ。空
 世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし。失
 明日ありと思ふ心の仇櫻よはに嵐の吹かぬものは。親
 門松は冥途の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし。一
 わけのぼる麓の路は多けれど、同じ高嶺の月をこそ見れ。失
 名 休(?) 體 名 也 昭 忠 輔 則 政 名

末終に海となるべき山川も、しばし木の葉の下くぐるなり。	吉野川その源をたづねれば、葎の雪萩の下露	何事も皆偽の世の中に死ぬるばかりぞ眞なりける	來て見れば聞くより低し富士の山、釋迦も孔子もかくやありけむ	なき名ぞと人にはいひてありなまし、心の問はばいかか答へむ	樂みは夕顔棚の下涼み、男はててら女はふたのして	心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らむ。	思ふこと一つ叶へば又二つ三つ四ついつもむつかしの世や	雨霰雪や雲とへだつれど、おつれば同じ谷川の水	底ひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて	梅が香を櫻の花に匂はせて、柳の枝にさかせてしかな
蘆	失	失	失	後	失	失	失	失	素	中原致時
庵	名	名	名	撰	名	名	名	名	性	

和歌俗歌は俳句川柳に比して、語數稍多きより、或は上の句を省き、或は下の句を略する場合多し。彼の道歌と稱する一體は、僧侶心學者等の説教に、屢、引用せらるゝより、その傳播頗る廣し。

俗歌より來るものには、

勢州桑名に過ぎたるものは、金の烏居に二朱女郎

伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ

土佐上下外記袴、半太羽織に義太股引、豊後かわいや丸裸

いやな男の親切よりも好いた男の無理がよい

花は折りたし、梢は高し、離れがたな木の下や

千兩箱山ほど積んでもいらぬ、冥途のみやげになりはせぬ

十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人

權兵衛が種まきや烏がほじくる、三度に一度は追はずばなるまい

お醫者様でも有馬(草津)の湯でも戀の病は直りやせぬ
誰に見せよとて紅鐵漿つける、みんなおぬしに心中立
わが物と思へば輕しかさの雪……………

思うて通へば千里が一里逢はず戻れば又千里

頭禿げても浮氣はやまぬ……………

……………手鍋さげてもいとやせぬ

俳諧の附句、及び俳句・川柳よりいづるものは、

草の名も所によりて變るなり

浪○花○の○蘆○は○伊○勢○の○濱○萩○

切りたくもあり、切りたくもなし

盗○人○を○捕○へ○て○見○れ○ば○わ○が○子○な○り○

救
濟

犬
筑
波

藝は身を助くる程の不仕合

蛇くふと聞けばおそろし雉子の聲
河豚汁や鯛もあるのに無分別
物いへば唇寒し秋の風
道のべの木槿は馬にくはれけり
あの聲で蜥蜴くらふか時鳥
骸骨の上をよそて花見かな
浮草やけふはあちらの岸に咲く
初雪や彼も人の子樽ひらひ
元日やきのふの鬼が禮にくる
口あけば五臓の見ゆる蛙かな

隆志

芭蕉

同

同

同

其角

鬼貫

乙由

冠里

失名

失名

けふになり菊作らうと思ひけり
 酒なくて何のおのれが櫻かな
 夏瘦と答へてあとは涙かな
 來年はくゝとて暮れにけり
 いふまいと思へど今日の寒さかな
 精だせば氷るまもなし水車
 百なりや蔓一すぢの心より
 化物の正體見たり枯尾花
 手にとるなやはり野におけ蓮華草
 世の中は三日みぬまの櫻かな
 氣に入らぬ風もあらうに柳かな

主
 人
 佐
 ふ

二 失 季 露 失 珪 千 也 瓢 蓼 失
 水 名 吟(?) 川 名 琳 代 有 水 太 名

色男金と力はなかりけり
大男總身に智慧がまはりかね
賣据と唐様で書く三代目
傾城に可愛がられて運のつき
人は武士なぜ傾城に嫌はるゝ
孝行をしたい時には親がなし
講釋師見て來たやうな噓をつき
吉原があかるくなれば内は闇
傾城にふられて歸る果報者
辻番は生きた親父の棄所
先生といはれる程の馬鹿でなし
女房のやく程亭主もてもせず

よくゆうて悪くいはれる後家の髪
町内で知らぬは亭主ばかりなり
孝行で賣られ、不孝に請出され
居候三杯目にはそつと出し
居候置いてあはず、居てあはず
屁をひつて可笑しくもなし一人者
惚れ藥佐渡から出るがいつも利き

以上列舉する和歌俳句の多くは、俗意俗情にして、詩としての價值乏しきものなるは、具眼者の首肯すべき所なれども、(卑近なる世相を穿つを以て、その生命とする川柳は、性質最も諺に近きものなれば、おのづから別論なり)是等の歌句が、世話哲學の一片として、永く國民の腦裡に存する所以は、何人も久しく思

惟し、感得して、云はむと欲して、いまだ云ひ得ざりし所のものを、巧に云ひ顯したるより、忽ち一般國民の同情を博し得たるものにて、たとひ高雅なる文學的作品たるを得ざるも、通俗なる眞理の一面を道破したる功は、没すべからざる也。

訓戒の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌俳句が、諺として用ひらるゝのみならず、偉人名士の語は直に當時の人口に膾炙して、永く後昆に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔孟釋迦基督希臘七賢人の金言の如きいふも更なり、王彥章が「豹死留皮、人死留名」といひ、曹孟德が「若無足、既得隴望蜀」といひ、歴山大王が波斯の大軍來り襲はむとするを聞き、自若として「一屠兒、千羊を恐れず」(One butcher does not fear many sheep)といひ、塞撒が西班牙の大守に擧げられて赴任の途次、アルプス山下の一寒村を過ぐるや、従者問うて曰く、此の如き貧邑にも、又邑長の職を爭ふ者ありやと。塞撒慨然として曰く、羅

馬にありて人の下に立たむよりも、西班牙に於て人の上に立たむ、大都の胥吏
たらむより、むしろ此の寒邑の長たらむのみと。乃ち *Rather first here than the*
second in Rome の諺を生ぜり。家康が五字七字の戒「上を見な、身の程を知れ」
の如き、一たび是等偉人傑士の口をいづれば、忽ち千萬人の間に傳唱適用せら
れ、永く世の諺となりて滅びず。定家が和歌に師匠なしと教へ、芭蕉が之に倣
ひて、「俳諧に古人なし」と唱へたるが如き、前數者に比して、通用の範圍稍狭しと
いへども、名人の一語世上の諺となるに至りては、その揆一のみ。諺は通俗を
むねとすれども、必ずしも凡庸俗流の口にのみ出づと斷すべからず、寧ろ世故
に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地なる者にして、始めて痛切警拔
なる人生の批評諷刺をほしいまゝにし得べきを記憶せざるべからず。「武士
は食はねど高楊枝」「花は櫻に人は武士」と高く標置し、「馬方船頭お乳の人」「商人の
空誓文」と罵倒したるが如き、その立言者の地位如何を察するに難からざるな

り。

詩歌・格言等より來れる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれども、かくの如きは無數の俚諺中、極めて少部分にして、その大多數は、いつ如何にして生ぜしか、生誕の時日も、出自の父母も、漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街路に、置き去りにせられたる棄兒の如し。幸にこの兒愛敬ありて、人なつくく、機轉利きたるより、衆人の愛顧をうけ、餓ゑず、凍えず、無事に成長して、世間に重寶がらるれども、人もわれもその來歴如何を知る能はざるは、依然として少しもありし昔に異ならざるなり。されば諺の起源として、世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの至つて少く、諺の起源といはむよりは、寧ろ諺を解釋せむために、後日想像附會せしにあらずや、と疑はるゝもの多きに居る。彼の古事記・日本紀に、諺の緣起を説けるものも、記紀編纂時代に行はれたる諺を取りて、古神話に托したる形迹あり。然るに強ひてこれが起源を求めむとするは、

猶棄子の系圖を作るが如く、所謂骨折損のくたびれ儲けたらすんばあらず。

「元の木阿彌」の起源について、諺草(元祿十四年刊)の説く所は、大和郡山の城主
筒井順昭、二十八歳にて病死す、時にその子伊賀守定次(順慶僅に一歳なり。順
昭遺言して、三年の間喪を秘すべしとありしかば、木阿彌といふ盲人、その貌順
昭に似たるより、他國の使來る時は彼の盲人をほの暗き所におき、順昭は病中
の體にもてなし、相見せしむ。かくて定次三歳の時、初めて喪を發す、こゝに至
つて木阿彌なりしことを諸人知れり。これ此の諺の出づる所以なりと。こ
の説小説的にして面白けれど、これより以前の書に、木阿彌といはずして、木庵、
木椀などいへるあれば、信を措き難し。『七人比丘尼』(寛永十二年刊)のいふ所に
據れば、その頃京師にて何不足なく暮らし、人の一朝道心發起して、最愛の妻
を棄て、五穀を絶ち、木食のみて行ひすましゝかば、世人木食の御坊、又は木阿彌
陀佛と稱して、尊信斜ならざりき。然るにこの僧年老い心弱りて、浮世戀しく、

終に戒行を破りて、密かにもとの妻に通ぜしこと顯れて折角の苦行も、今は只元の木阿彌ととりはやされにけるなりと。

寛永十五年刊行の『清水物語』には、今時の人の學文するは、生れつきの直る程磨きたるものなき故に、本のもんあんにてこそ候へとあり。中江藤樹の『翁問答』に、四書五經をよむと雖も、訓詁を記誦して、口耳の飾となすばかりにて、心はもとの木椀の自滿の垢のしみつきたるものなれば、益はなくて却つてあしくなり候とあり。こゝにも、どの木椀といへるぞ、恐らくこの諺の本義なるべきか。因つて思ふに、元の木阿彌と喩ふるも、又其の意はこれと同じく、金色燦然たる阿彌陀如來の尊げなりしも、一旦箔剝げ粉落ちては、元の木佛、何のありがたさもなしと云へるにや。とにもかくにも、諺草、七人比丘尼の説は、諺によりて後に附會せし臆説とおぼしく、共に信するに足らず。

『久保之取蛇尾』後篇（入江昌喜著）に曰く、牛にひかれて善光寺まゐりといふは、一

書にいふ、善光寺舊記云、むかし此の國に齡七十に餘る姥ありけり、後世に志す事をも知らず、年月をくらしける。或時織りあげたる布を晒すとて川邊にいでけるに、大なる牛離れ來りけるが、彼の布を角にかけて走りければ、姥大いに驚き、あとを追うて行きければ、當寺の内へ入りけり。姥こゝに至りて、始めてこの御寺を見て、こはいかに、われ此の年に及ぶまで、かゝるいかめしき御寺ありけるを知らざりけるよと思ひて、僧徒にあひて、事のやうを尋ねれば、難有きこと限なし。姥それより後世にもとづきけると云々。世の諺に、牛にひかれて善光寺まゐるとはいふめるといへり。今案するに、今昔物語震旦部第七にいふ、今は昔、震旦の豫州に、一人の老母あり、若きより邪見深くして、神道に仕へて三寶を信ぜず、世の人こそつて之を神母といふ。三寶を嫌ふが故に、寺塔の邊に近づかず、もし道を行く時、僧に値ひぬれば、目を塞いで過ぎぬ。然る間、一つの黄牛あつて、神母が門の外に立てり、三日を経るに、更に牛の主といふ者な

し。然れば神母これ神の給へるなりと思ひて、自ら出て牛を家に引き入れむとするに、牛の力強うして引き得ず、神母自ら衣の帶を解いて、牛の鼻に繋ぐ程に、牛引いて逃げぬ。神母追うて行くに、牛、寺に行きぬ。神母この牛及び帶を惜むが故に、目を塞いで寺に入つて、面を背けて立てり。その時、寺の衆僧驚き出て、神母が邪見なるを哀む故に、各、南無大般若波羅密多經と稱す、神母これを聞いて、捨てゝ走りいでて逃げぬ。水邊に臨んで耳を洗うていふ、われ今日不淨のことを聞きつ、所謂南無般若波羅密多經なりと、嗔つて三度此の事を稱して家に還りぬ。その後神母の身に病を受けて死す。下略その後神母嫡女の夢に告げて曰く、嫌ふといへども般若の名を耳に觸れたる功德によつて、忉利天に生ぜむとす、云々。彼の善光寺の舊記といふもの、之を摸せるかと。今昔物語は佛經中の寓言比喻を、我國に輸入せる功虧からず。今その一章を摘出せむ。

今は昔、天竺に世間旱魃して、天下に水絶えて、青き草葉もなき時ありけり。
その時に一つの池あり、その池に一つの龜住す、池の水旱り失せて、その龜死ぬ
べし。その時に一つの鶴のこの池に來て喰ふ、龜いでて鶴にあうて相語つて
曰く、汝と我と前世の契ありて、鶴龜一變に名を得たり、と佛説きたまへり、經教
にもよろづの物の譬には、鶴龜を以て譬へたり、然るに天下旱魃して、この池の
水失せて、わが命絶えぬべし、汝われを助けよと。鶴答へて曰く、汝がいふ所二
つなし、われ理を存ぜり、實に汝が命明日に過ぐべからず、極めて哀れに思ふ、わ
れは天下を高くも低くも飛び蟠ること、心に任せたり、春は天下の草木の花葉
色々にして、めでたきを見る、夏は農業くさぐさに生ひ榮えて、様々なるを見る、
秋は山々の荒野に、紅葉の妙なるを見る、冬は霜雪の寒水、山川、江河に水凍りて、
鏡の如くなるを見る。かくの如く四季に隨うて、何物か妙にめでたからざる
物はある、乃至極樂界の七寶の池の自然の莊嚴をも、われ皆見る。汝は只この

小池の萬内だに知り難し、汝を見るに實にいとをし、されば汝がいはざる前に、水のほとりに將て行かむと思ふ。但しわれ汝を背にも能はず、抱かむにも力なし、口にくはへむもたよりなし、只すべき様は、一つの本を汝にくはへしめて、我等二つして、本の本末をくはへて、將て行かむと思ふに、汝はもとより極めて物痛くいふものなり、汝われに問ふことあり、又われも誤りていふことあらば、互に口開きなば、落ちて汝が身命は損はれなむ、いかがといへば、龜答へて曰く、將て行かむと宣はゞ、われ口を縫うて、更にいふことあらじ、世にあるものゝ身思はぬやはある。鶴の曰く、つきぬる病は失せぬものなり、汝猶信ぜじと。龜の曰く、猶更にいはじ、猶將て行けといへば、龜に本をくはへしめて、鶴二つして本の本末をくはへて、高く飛びゆく時に、龜池の萬内を習うて、いまだ見も習はぬ所の山川谷峯の色々にめでたきを見て、極めて感に堪へずして、こゝはいづこぞと云ふ。鶴もまた忘れて、こゝかと云ふ程に、口あきければ、龜落ちて身命

を失ひてけり。これに依つて、物痛く云ひ習ひぬるものは身命をも願みざるなり。佛の守口攝意慎莫犯等の文は、これを説き給ふなるべし。また世の人不信の龜は甲わるといふは、此の事をいふとぞ。こは舊雜譬喻經の文を敷演せしものなり。

『爲愚痴物語』卷五(寛文二年刊)に曰く、むかし丹波の國篠村といふ所に、誠に他事なき正直第一なる一人の尼ありけり。彼の尼公、ちひさき木作りの阿彌陀一體もちけるが、之を他事なく、まことの佛と深く信じ、朝夕の勤さらに怠ることなく、六萬遍の念佛を回向し、深く信すること、年月幾久し。その功力つもりければ、彼の佛より光明赫奕たる光を放して、彼の尼公を照らし給ふ。これを見る人、不思議の思ひをなして、感涙を流さずといふ人なし。さりければ、あるいたづら者、彼の尼公留守の折節を伺ひ、彼の佛を盗みとりて、鯛の頭を一つ厨子の中に投げ入れおきけるに、尼これを夢にも知らず、いつもの如く彼の佛に

向つて念佛申し、勤をなしければ、いつもの如く光を放し給ふこと幾久し。ある時、彼の尼公莊嚴のために、御戸を開き見れば、頼み奉る佛はましまさずして、鰯の頭一つぞありける。尼、こはいかなる事やらむ、と五體を地に投げ、足すりをして、泣き悲むこと限なし。見る人も不思議の思ひをなしぬ。或人のいひけるは、あまりに強く信じ給ふ故に、佛腹たてゝ、鰯の頭とやなり給ふと、笑ふ人も多かりけり。彼の尼正直のあまりに、さもありなむと思はれけむ、棄つることもえずして、變らず信仰しけれども、その後よりは、光も更にさゝざりけり。それよりして、鰯の頭も信じからと、云ひ傳へけるなりと。蓋し鰯の頭は青光を放つより、神佛の靈光の目を射るに喩へたるまでに、必ずしも丹波の老尼が小話を、要すべくもあらず。

足利義教將軍の時、松浦肥前守數寄者にて、赤塗の烏帽子をつけて参りしかば、將軍その姿を自ら圖して賜はりしを、肥前守殖染後、かの像を南禪寺にをさ

めしとかや。當時の諺に、數寄に赤烏帽子といひけるは、此の故事なりと。『鹽尻』されどこは肥前守が諺によりたる戯なるべし。此の諺は主人の爲す所は、異様の物好も亦如何ともしがたしの意にして、あるじの好きなら旨猫でも七匹飼ふなどいふと、類似の諺たるなり。

『毛吹草』に「御免あれ兵庫の月に秋の雲」の句あり。こは「兵庫の者は御免あれ」といふ古諺に基けり。攝津名所圖會、矢田部郡築島の條に曰く、「平相國遷都の下心ありけるにや、應保元年二月上旬、阿波民部重能奉行として、畿内の課役五萬人を促して、鹽打山を崩して、海面三十餘町を築出すこと兩度なるに、築き畢れば土砂ゆり流れて、もとの海となる。その時陰陽博士阿倍泰氏に命じて考へさせ給ふに、泰氏トウて曰く、龍神この海底に住んで、陸地となることを惜むなり、之を宥めむとならば、三十人の人柱を沈めて、その上に大小の石に一切經を書寫し、海底に納めて、此の島を築かしめ給はば、速に成就すべき由を申す。

故に生田の森に新關をすゑて、老若を論ぜず、往還の旅人を擒とす。近隣の村民これを歎きて訴ふれば、兵庫の者はこの難を免る。今に諺に、兵庫の者なり御免あれとは、この由縁なり」と。人柱の事既に信すべからず、これも又好事者流の假托のみ。

同書また、雉子も鳴かずば打たれもすまいの因縁を説いて曰く、昔、長柄川に橋を造るには、人柱なくては成り難しとて、その人を選みけるに、つぎしたる袴をきる者を捕へて、人柱に沈むべしと、官家より仰せあれば、新關をたて之を改む。茲に岩^{イハ}氏長者といふ者あり、これを知らず、袴のつぎしたるをきて通るに、關守捕へて許さず、遂に水底に沈む。之によつて橋成りにけり。かの岩氏に一人の女あり、容顔世にすぐれて麗しく、紅粉を施さずして色いつくしく、朝日に輝く國色なり、この故に世の人光^{タル}照前とぞ稱しける。然るに人となるまでも、物いはずして啞の如し、母悲歎限りなく、深く隠したり。こゝに河内禁野とい

ふ里の男、この女を戀ひて、垂水よりこれを迎ふ辭し難くやありけむ、禁野の家
にゆく、猶も物いはざること久し。夫怪んで女をつれて母の許へ送りぬ。此
の嘸豐島郡雉子嘸を通るに、雉子啼きければ、夫ねらひより之を射る。是に於
て女初めて物いうて歌をよむ、物いはじ父は長柄の橋柱、鳴かずば雉子も射ら
れざらまし、とくりかへし之を諷ふ。夫驚き、母の許にもゆかで禁野につれ歸
り、悦びあへり。時の人雉子繩手と名づく」と。この小話、左傳(昭公二十八年)賈
大夫の妻の事に基くが如し。

『南嶺子』に「やぶにここの物といふことは庸醫にも功者ありといふ諺と思
ひしに、予尾張に在りし時、名古屋より津島へゆくとて、海東郡を通りしに、阿波
手の森といふ處に、藪の中に壺をふせて、往來の瓜茄鹽の賈人、そのわが賣る物
を納れおき、自然と香の物となれる瓜茄に、夢の穗を少しく加へて、毎年極月二
十五日、熱田神社の煤拂と、二月初午の日この神供に獻ず、この香の物よりいひ

弘めたる事にぞといひ、『兎園小説』『簑笠雨談』等にしるす所も大同小異なり。たゞ馬琴はその記事の末に三國志諸葛亮衆軍を渭南に率ゐて戰を挑むに司馬懿出です。よつて懿に巾幗婦人の服を贈る、懿怒りて表をもて戰を決せんと請ふ條下に懿がいふ豈知野夫有功者也云々。やぶにこのものゝ俗語、これより出でたりといへども、尾張人はこれを否みて、この香の物より始まるといふ、いづれが是なるや、と記して疑を存せり。『十訓抄』第二に「月はなじかは樓には上るべき、月にはのぼるとぞ、故三位殿は詠じ給ひし、おのれは御物はりにて、おのづから承りしなり」といひければ、恥ぢて皆立ちにけり……藪にはかうの物といへる兒女子がたとひむねを違へざりけり」とあり。藪かう(香)の文字をあてたれども、その譬は猶野夫功者ありの意と聞ゆ。蓋しその語の種々に解せらるゝより、諺の名所の出來しなるべし。毛吹草には「やぶにも剛のものどせり、これも又一説なり」。

以上の數例その多くは世に行はるゝこと久しくして、起源の曖昧なるものなり。之に反して、その發生の日極めて近く、その由來頗る明瞭なるものあり。維新以後、世祿に離れたる士人が、俄に不慣れの商業に従事して手を燒きしより「士族の商法」といふ諺起りしが如き、また同じ頃、東京芝柴井町の松林堂といふ書畫屋、甲州地方の農家にて、あまた反古類を買ひとりたるに、偶、後醍醐天皇の宸筆一葉を、その中に發見せしかば、宮内省に獻納したるに、多額の下賜金をたまはりて、俄に産を興したるより、商人仲間に格外に利得ある商法をさして、「松林堂の短冊」といふ諺行はれたるが如き、吾人の親しく耳聞する所なり。

更に進んで泰西諸國の事例に徵せむか。サウロが耶蘇教徒に暴虐を加へむとて、ダマスコに赴くの途次、ゆくりなく基督の靈光に浴して、心機一轉、豁然として悔悟し、ダマスコの會堂に上り、熱心に基督の徳を稱へ、こは神の子なりといふや、聽く者皆その豹變の甚だしきに驚いて、サウロも又豫言者中にある

か (Is Saul also among the prophets?)、茫然自失したりき。(使徒行傳第九章)爾來この語は、人物、性行の急劇なる變化を驚異するイスラエルの諺となれり。

イビクスの鶴 (The crane of Ibycus) といふも、又面白き由來あり。イビクスは有名なる希臘の抒情詩人にして、コリンスに遊ばんとする途中、強賊の襲ふ所となり、毒刃の下に斃れむとするに方り、せめて我が最期をだに見届けくるゝ人も來すやと、四方を見回したるに、人らしきものゝ影もなく只頭上高く鶴の飛ぶあるのみ。イビクス絶望のあまり、鶴を呼びて、我がためにこの怨を報ぜよ、と叫びつゝ、敢なく命絶えたり。賊徒金を懐にして、コリンスの市中に入りしが、偶、一群の鶴空を掠めて過ぎければ、一人の賊その同類を顧みて、イビクスの復讐者來れりと戯れたりしが、この一語、端なく詩人の來著遲きを氣遣へる市民の耳朶に觸れて、衆人の疑を喚起し、詮議を重ねたる末、盜賊は刑に服したりき。かくてこの語は、天の冥鑒昭々として欺き難きを表する常言となれり。

昔羅馬の「コンザル」殘毒なる詐謀を逞しうして、ツウルウズ市を略奪し、許多の財寶をおのれの有とせしが、その後「コンザル」の一家、あらゆる不幸災害を蒙りしかば、不義の富貴の身に禍するを、ツウルウズの財寶(Gold of Toulouse)といふに至れり。蓋し惡錢身につかすの實例なり。

蘇格蘭の諺に、「首斬臺を始めた者は、一番に首が落ちる」(He that invented the maiden first hanged himself)といへり。「メエデン」の發明者モルトンが、この刑を受けし先登第一たりしに濫觴す。所謂「人を誣へば穴二つ」と語相似て、意は寧ろ「始作俑者其無後乎」に近し。

「盃から口までの間にも行違ひ」(There's many a slip 'twixt the cup and the lip)といふは、もと希臘より出づ。因業なる主人あり。葡萄酒の事に従ふ奴隷を虐使す。一日奴その苛虐に堪へずして、無情の老爺、彼れ遂にこの秋の葡萄酒を飲み得ざらむと罵りぬ。新釀成るに及び、主人は殊更にこの奴隷に命じて、酒

をつがしめ、盃を揚げて、その語の驗なきを嘲る。奴、盃の口までゆく間にも、様々の行違ひあるものなればと冷語する折しも、一僕蒼皇馳せ來りて、野猪後園に闖入したりと報す。主人、盃を几上に置き、手槍を執りて驅けいでしが、遂に野猪のために、命を殞せりといふ。

「失うたものは神様にあげよ」(Let that which is lost be for God)とは、西班牙の俚言なり。穿鑿家の説に據れば、一家翁、死に臨みて遺産を分配するに方り、久しく行方知れざる一頭の牡牛の處分法を説いて曰く、もしこの牛發見せられれば、兒等の有たるべし、もし發見せられずんば、神に捧ぐべし、といへりきとぞ。

「逃げたる魚を蛭子にまゐらす」といふ我國の古諺と、東西符節を合すが如く死に至るまで、己を欺き神を欺く、淺ましき人情を暴露して、あはれにも又をかからすや。

獨逸の「猫王を熟視す」(Sieht doch die Katz den Kaiser an)といふは、我が「盲蛇に

おちす」と同意の諺にして、獨帝マキシミリアン一世のニュルンベルヒ府にあるや、屢、木版彫刻を業とせるヒロニムス・レシュの家を訪ひしに、主人の愛猫、常に細工臺の上に蹲踞し、帝の來り給へるにも平氣にて、いづくの風來人ぞ、いはぬばかりの顔して、皇帝の面を注視せしかば、扈從の人々をかしがりて、この語を用ひしより、終に諺とはなれり。

是等の起源説も、又一概に信すべからず。野猪に斃れし主人、牡牛の遺言の如きは、諺に據りて作爲せし、本の木阿彌一流の話柄と見る方、寧ろ穩當なるべく、此の如き小話は、俚諺説明の用例として、容易に作爲し得べし。試みに「匹夫無罪懷璧有罪」殺君馬者路傍兒といふが如き、二三の古諺を拉し來れ。これが故事因縁を假作して、起源説を附會せむは、多少の才氣ある者、誰か能くせざらむ。俚諺起源説の疑似多きや、喋々を待たざれども、尙談資として數言を費さむ。彼の「メエデン」に關する諺の如きも、最初に刑せられしは、その發明者モル

トンにあらずして、渠の死に先だつ十五年、トウマス・スコットといふ者、此の刑をうけたりといふ考證説あり。路易十四世の語として、有名なる「朕即國家也」(Le Etat cest moi) は、通常帝が遊獵の歸途、野服のまゝ、議場に闖入し、鞭を以て議長席を叩きたてゝ、發せし語なりと信ぜらるれども、當時の記録、一も此の事を載するものなきを以て、史家は斥けて、後世好事家の捏造なりとせり。「一難去つて二難來る」の意を表す諺に、「カリブデスを避けてスキラに陥る」(Seeking to avoid Charybdis, falls into Scylla)といふあり。世俗カリブデス、スキラを以て、南伊太利のブリチウム海岸に突出せる二巨巖の名とし、地中海の一難所として、船客の恐怖する所となれり。されど希臘神話に據れば、カリブデスは海中の妖怪にして、水夫の最も怖るゝもの、スキラは危険なる海渦を人化せるものにて、ホオマアに依れば、十二手、十二足、六頭の變化にして、海邊の巖窟に潛み、好んで人を襲ふといへり。此の諺の起源はホオマアの史詩「オヂセイ」より出で、オヂ

セウスがトロイ役より凱旋の途次、十年間海上に漂泊せし際、カリブデスの難を免れむとして、岸近く船を進めしかば、スキラの襲撃をうけ、同行六人を失ひたりといふにあり。これ正に阿波手の森の香の物と、同臭の談にあらずや。

是等縁起説の眞偽如何は、一々探究論定すること難しと雖も、いづれも人生の經驗より胚胎し來れるは、言ふを要せず。かくて一旦成立したる諺は、絶えずその勢力を、吾人の社會的、道德的生活に及ぼし、屢々重要な實地問題の判斷解決に適用せられて、偉大なる効果を奏すること尠からず。一片の俚諺能く人心を動かし、事業を執行せしめしが如き、古今東西その例に乏しからず。基督が人力の神意に抗すべからざるを諭すに、「荊ある鞭を蹴ること難し」の諺を以てし、兇暴なる迫害者サウロをして、翻然前非を悔悟し、熱誠勇猛なる弟子と化せしめしが如き、佛國の太后カザリンド・メデシが、その故國より齎し來りたる、慈悲も時には仇なり、仇も時には慈悲なり」の一語を以て、逡巡躊躇決する能

はざるチャアレス九世を勵まし、終に慘澹たる「セント・バアソロミユウ」の虐殺を斷行せしめしが如き、千六百六十七年、路易十四世がネザアランドを攻めて、ドウエイに圍まるゝや、激烈なる砲撃に恐れて、おぼえず敵に後を見せむとしたりに、モツシユウド・シャアロウ進みいでて、酒はつがれたり、飲まざるべからずと耳語せしかば、王忽ち勇氣を恢復し、毅然として飛丸の中に立ち、王者の威嚴を顯し、進退また宜しきを得たりといふが如き、片々たる一小俚諺にして、能く重大事件の死命を制するを見るべきなり。

蘇秦は寧爲鶏口無爲牛後の鄙諺を以て、韓王を激勵し、容易に合従の約を定め、孔子は有文事者必有武備の常言を以て、定公を説得し、左右の司馬を具へて齊侯と夾谷に會し、大國の無禮を懲らし、使命を全うせり。この他戰國策士の好んで野語鄙言を用ひて、人主を動かしゝ例、數ふるに違あらず。わが徳川家康の如きも、又世話哲學の信徒たり。『駿河土産』に曰く、我等なぞ若き時分世上

いそがはしき頃ゆゑ、學問などに打ちかゝりて居る事もならざるにつき、一
文盲にて年をよらせたるなり。さりながら、老子の言葉の由にて、足ることを
知つて足る者は常に足るといふ古語と、仇をば恩を以て報ずるといふ世話と
この二句をば、年若き時分より、常に忘れずして受用せしなり」と。また彼の關
原大捷の時、左右を顧みて兜の緒をしめ、將士の懈怠を戒めたる佳話を傳ふ。

諺の發生、適用等に關しては、上文ほどその概要を悉したれば、之よりその轉
訛變遷の迹を示すべき二三の例を掲げて、この章を終へむとす。言語の意義、
聲音の時代に伴うて變化すると等しく、但諺も又年所を経るに従ひ、その意義、
形體を變化す。これに類音の轉訛より來るものと、意義の誤解より生ずるも
のとの二種あり。而して類音轉訛には、不知不識の間に轉訛し來りたる無意
識のものと、一時の戲謔、又は好事より出でたる有意識のものとを區別し得べ
し。

「後暗い観音の」尻喰観音となり、木片の火の、河童の尻となりたるが如き、轉訛の著しきものなり。寵愛高じて尼になす、頂禮高じて尼になる、法師の公事だくみ、法師の櫛だくばへ、男の光りは七光り、親の光りは七光り、孫を飼はむより犬を飼へ、繼子飼はむより犬を飼への類は、最初より獨立せる二箇の諺にあらずして、必ずその一は他より、いつとなく知らず識らず轉訛し來りたるや疑を容れず。「大取りより小取り」の轉じて「大鳥より小鳥」(味の優劣)、「夜目遠目」より「四目十目」(結婚年齢の拘忌)、「人事いはば目代置け」より「人事いはば薙敷け」の如きは、明かにその前後を判じ得べきものに屬す。

「亭主のすきな赤烏帽子」を變じて「亭主のすきな赤鰯」とし、瓢箪から駒をもぢりて「じやうだんから本眞」とせるが如きは、所謂戯より出でて眞となれるものなり。「唯識三年俱舍八年」桃栗三年後家一年、「疥癬七年瘡毒八年頭の腫物十三年」の類も又「桃栗三年柿八年梅はすいとて十三年」の本文に依據せる好事家の

口すさみなるべし。

意義の誤解に基くものは、支證の出しおくれ(支證は證文なり)を、師匠の出しおくれ(師の弟子に先んぜらるゝ意)と誤用し、毛を吹いて疵を、その形の酷似せるより、藪をつゝいて蛇と同義に使用するの類之なり。「毛を吹いて疵」とは、微細の陰事をも尋求して容さざる比喩にして、自ら進んで禍を求むる「蝮蛇」とはその間頗る逕庭あるを、世人往々混同して顧みざるが如し。中古陰陽道の盛にして、何事をなすにも、日の吉凶を擇びしより、下食時ゲトシとて、その日沐浴すれば鬼頭を舐めて髪落つとの迷信ありき。この信仰亡びて、人々下食時の何の意たるを解する能はず、終に「蝮蛇ガシに舐めらるれば頭禿グ」といふに至れり。その變化の甚だしき、山の芋の鰻となるにも過ぎたり。源平盛衰記に「墓の息天に上る」といふ諺あり。白樂天が蝦蟇の詩に、常恐飛上天、跳躍隨嬋娥、往往蝕明月などの語あるより考ふるに、漢土より輸入せし思想なるべし。然るに盛衰記

の暮の字に、ノミと傍訓せる書あるより、後には「蚤の息天に上る」といふ諺を生じ、終には「農民の息天に上る」として、『諺草』に採録せらるゝに至れり。暮より蚤、蚤より農民、眞に不可思議の因縁にあらずや。寶永正徳の頃は風俗なほ質素にして、卑賤の者は苧繩を以て頭髮を束ね、百姓は藁にて髪をゆひしより、藁でたばねても男一匹といふ諺ありき。然るに結髪（イ）の俗廢れし以來、この語の本義もおのづから忘られて「藁で作つても男一匹」といふを耳にす。エエマン氏編輯の日本諺語集に、「我永樂の釜盥」といふを擧げ、解して曰く、永樂製の釜を盥とするは、奢侈の甚だしきをいふと。思ふに邦人この諺を解する者少きより、かゝる誤謬を傳へしならむ。こは釜を盥に代用するばかり不足がちの生活にても、猶我が家は樂しきものなりとの意にして、即ち「我が家樂（イ）の釜盥なり。これも又久しからずして、意義誤用の好一例たるに至らむか。此の他、法論味噌の夕立（イ）が、母衣武者の夕立（イ）となり、鵲蚌相持（イ）が、疣相持（イ）と訛りたる類頗る多し。

第四章 諺の比較及び地方的特色

諺はよく國民の特質才智精神を現すを以て、その國民の歴史宗教迷信風俗制度人情等を察するに、無限の資料を供給す。元より諺は、古今に涉り、東西に通じて、相戾らざる人情道德の同一根柢上に成立せるものなれば、必ずしも個々各、特異の國民性を發揮して餘蘊なしとは言ひ難きも、その國民の道義心、即ち名譽とし、恥辱とする所、善とし惡とする所を察するに足るべき諺も、亦頗る多く、之によりてその國民性を觀察するに、不便を感ずることなし。

我が國の諺は、概して輕快樂易の氣ありて、深刻尖銳の趣乏しきは、その文學と等しく、善く我が國民の性情を表するものといふべし。今まづ櫻花とともに我が國民の誇負する武士道の、いかに諺に現れたるかを見よ。その然諾を重んじ、信義を尙ぶは、「武士に二言なし」「武士の一言金鐵の如し」といふにあらず。

や。節操を砥礪して、死生變ぜざるには、「武士は食はねど高楊枝」といひ、恥を知り名を重んじては、「唐土の虎は毛を惜む、大和の武士は名を惜む」といひ、「弓矢とる身は名こそ惜しけれ」といふにあらすや。而して死すべき時に死せざるを以て、死に勝る恥なりとす。大小を武士の魂とするは、勇氣を尊ぶなり。「情を知るを誠の武士」とし、「強いばかりを武士^{モリブ}ならず」といふは、仁義を重んずるなり。「武士は相みだがひ」とは、友誼に厚きをいふなり。信義を尙び、名節を磨き、勇武にして、同情に富む。これ所謂武士道の理想にして、又我が國風の精華なり。「斬取強盜は武士の習」といふが如きは、戰國亂離の間に發生せし一時の變態にして、皇國士道の風上にも置くべからざる諺なり。

「慈悲は上から、禍は下から」下として上をはからふこと勿れ等は、封建制度の利弊を暴露せるものにて、民は依らしむべし、知らしむべからず主義の得失如何を察すべく、泣く子と地頭には勝てぬ」といふを見ては、鎌倉以降の地頭の權

勢を知るべく、受領は倒るゝ所に土をつかむ」といふによりて、王朝における國守の貪婪收斂を見るべからずや。

「粉糠三合もつたら養子にゆくな」といひ、「腹は借りもの」といふが如き、我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、螟蛉子の勢力なく、男系の偏重せらるゝを見るべし。泰西諸國には、驕婦の苦痛を訴へ、妻帯の失費多きを歎する諺多きに反し、我には殆どその類なきは、婦人の從順なると、離婚の容易く行はれしとに因る。「媳は臺所から貰へ」といふも、その從順謙恭にして、御し易きを欲するなり。「三界に家なし」「五障三從」等、儒佛に基づく諺の、専ら婦人を教化して柔和ならしめ、「鼻尖思案」に「牛賣り損ふ」如き、出すぎを戒めしより、夫婦間の不平不満は、さすがに多く諺となりて現れざるも、親子同居の家族制度は、「老いては子に従へ」といふ教あるに關せず、媳と姑は常に相衝突し、相睥睨して、俗諺氏をして、「媳と姑は犬と猿」の冷評を下さしめ、「媳姑の中のよきはも。つけの不思議とするに

至らしむ。「嫁と名がつけば我子でも憎く、秋茄子は食はすな」コナ鯛の頭を食はせよ」といふ意地わるき姑を戴きて、その上に「鬼千匹にむかふ」小姑の二三人もある家に嫁したる婦人の境遇も、又多難なりといふべし。西洋諸國にも姑と媳と相惡む諺なきにあらざれども、我國の如く多數ならず。

支那の諺は、質實沈重の氣に富み、浮世の辛酸を嘗め盡くせる老人の、兒孫を訓戒するが如く、身を守り世に處して過なきに庶幾しと雖も、勇往進取の意氣缺如し、乾坤一擲の壯語なく、開口嚙笑の快味なし。古より政治上、社會上共に勞苦多く、愉樂少かりし人民は、物の長所美所を觀ずして、その短所弱點をのみ認むるより、その觀察おのづから銳利沈痛にして、白眼世上を見るの趣なき能はず。

「獸惡其網、民惡其上」といひ、只許州官放火、不許百姓點燈トイフが如き、其の惡政のいかに民を苦めしかを見るべく、賄賂公行の様は、好官不過多得錢トイフといふ

に現れ、司直の吏も又頼むべからざるは、千金不死、百金不刑といふに知る。「十年窓下無人問、一舉成名天下知」は、科擧、士を取るの制度と、榮辱顯晦、一朝に改まるの實情を語り、關東出相、關西出將は、古今の歴史上における地理的關係を説き、字三寫、魚成魯、帝成屈は、類似多き漢字の弱點を示す。是等は皆支那の如き、特殊の文物制度行はるゝ國にして、始めて在り得べき諺たり。埃及土耳其波斯の如き東洋諸國も、又支那と相類似せる虐政に苦しみしより、その諺は利己主義にして、公共心に乏しく、怯懦卑屈なる奴隸根性を以て、處世の要訣となすを恥ぢず、猿が王になつたら猿の前で踊れ」といふが如き、長いものには巻かれよ、流のもの多きは、自然の數なり。尙支那の諺に注意すべきは形式上好んで對句法を用ふることにして、十の七八は皆これなり。我が國の諺も對句に富めども、此の如く甚だしきに至らず、對句を好むこと支那人の如きは、天下の稀觀なり。

眼を轉じて、歐洲諸國の諺を觀察するに、自ら別様の色彩を呈して、東西文化の相違を識別すべし。希臘、羅甸の文學、思想の影響著しく、同根同種の諺の多きは、言ふを待たざれども、各、人種國風、歷史、宗教を異にするに隨ひ、また個々獨特の色味を存せり。希臘の諺について、最も人を驚歎せしむるは、一般民衆が、その國の神話、歷史、古詩に習熟して、神傳古史の神人に關する比喻詩、聖賢哲の金言を、尋常茶飯の談柄とするにあり。之を以てその諺は典雅清麗にして、詩味津津たり。唯神祇に對する畏敬の感情に於て、方今耶蘇教國の諺に劣るものあるは、その宗教觀の然らしむる所にして、史家が喋々の論議を待たずして、その國諺既に之を證せり。されど希臘國民が一般に高尚なる教育をうけ、智識に富み、感情の優雅なりしと、他の歐洲諸國の及ぶ所にあらざるは、その諺に徴すべきなり。羅馬の諺は、全然希臘とその趣を異にし、數に於ても太く劣れり。これその人民の機智、頓才の敏活ならざるに因る。神祇傳に本づく諺の

極めて乏しきは、羅馬神祇の希臘に比して少なきに因れり。詩的想像に富むもの、感情の優美閑雅なるもの、又極めて少し。愛に關しては羅馬のみならず希臘も又等しく、今日の歐洲諸國の有する所に劣れり。こは基督教の感化影響の、及ばざりしに因らざるばあらず。古代の文明國は、愛よりも友誼を高尙なる理想としたるを以て、友情に關しては優秀なる俚諺少からず。羅馬の諺は眞摯素朴にして、勤儉力行の國風に相愜ふ、節儉は諸徳の母 (Frugality is the mother of all virtues)、「不用のものは一文でも高し」 (What one does not need is dear even at a farthing) の如き、その一斑を窺ふべし。而して農業に關するもの多きは、我が國と等しく、國俗の農を尙びたるを見るに足れり。

西班牙は諺に富める國にて、その數三萬を上下す。その數量の多きのみならず、實質も又秀拔にして、滑稽諷刺に長ぜるは、『ドン・キホオテ』を読む者の洽く知る所なり。眞面目にして思慮深く、四角張り堅苦しき中に、丸くくだけた

る可笑みありて、木強なる武士氣質、尊大なる自負心の生動するを認む。「生白
い手では切れぬ」(White hands cannot hurt)の武士的な「驢馬も吠える人の顔は
心得て居る」(The ass knows well in whose face he brays)の眞面目に可笑しき「家が
焼けたら傍へよつて温まれ」(When thou seest thine house in flames, approach and
warm thyself)の冷靜傲岸なる「我が武士は食はねど高楊枝」に比して、數歩を進め
たりといふべし。「カステイルの俗人は皆國王になり、坊主は誰でも法王にな
れる」(Every layman in Castile might make a king, every clerk a pope)といふは「カステ
イル人の誇負心を示し、西班牙人から善い所を悉く引去れば、葡萄牙人が出來
る」(Take from a Spaniard all his good qualities, and there remains a Portuguese)といへ
るは、以て隣邦の人民に對する輕侮の甚だしきを見るべし。

國民は時として自己の弱點短所を自覺して、諺を以て自ら嘲ることあり。

「西班牙の加勢、後れるか、來ぬか」(Succours of Spain, either late or never)の如き是な

り。西班牙の救援の頼むべからずして、時期を失し、或は遂に實行せられざりしは、歴史の證する所伊太利の諺に「我が最期は西班牙より来る」(May my death come to me from Spain) といふも、死期の遠きに喩ふる語にして、その國人の猶豫逡巡を諷れるなり。國內に黨派の軋轢甚だしく、血を以て血を洗ひ、その底止する所を知らざりし一端は「殺して、殺されて、殺した者を又殺す」(Kill, and thou shall be killed, and they shall kill him who kills thee) といふに現る。

伊太利の諺は、政治上の才幹に長けたるを示し、且個人の利害を顧慮すること深く、その十分の一は、皮肉なる利己的格言にして、その多數は、世を疑ひ、人を信ぜず、石下には常に蛇蝎ありと戒心し、人世の複雑なる迷路を通過するに、安全なる方法として、狡猾老獪の手段を弄するを以て、自ら得たりとし、恰もマキヤベリイの主義精神を、金科玉條とするものゝ如し。復仇を名譽とする諺の多きも、又史蹟に徴して、國民の性情を表現して誤らざるに似たり。

復仇を正當なりと認むるのみならず、時としてはその快味を唱道すること、

Revenge is a morsel for God(復仇は神の供物)の如きあり。而してその復仇たるや、一時憤激の餘にいづる盲動にあらずして、冷頭靜慮の結果たるは、*Waite time and place to act thy revenge, for it is never well done in a hurry*(せいては事を破る場所と月日の来るを待て)といふを以て知るべし。怨恨、憎惡の情、歲月を互りて、少しも衰へざるを語りて「百年の舊怨も尙乳齒を有す」(*Revenge of a hundred years old hath still its sucking teeth*)といふに至りては、吾人をしてさうに「毒の蟲は頭を挫ぎ腦をとり、敵の末は心を割き肝をとれ」といへる源平時代を想起せしむ。

されど此の國の諺も、又殘忍酷薄のもののみにあらず、朋友相救ふに方り、財寶に爾我の差別を論ぜざるを説いて「友だちの財布は、蜘蛛の絲で括る」(*Friends tie their purses with a spider's threads*)といひ、俯仰天地に愧ぢず、公明正大の道を

行く者は、思を勞すること少く、謫詐姦佞の徒は、心を苦め、神を勞すること多く、且巧智も終に窮する時ありて、早晚馬脚を露して、破滅を招くべきを教へて「For an honest man half his wit is enough, the whole is too little for a knave (君子には一智も餘り、小人には十智も足らず)」といひ、The devil is subtle, yet weaves a coarse web (惡魔は巧智なれども、網の目は粗し)といふが如き、共に佳諺たるを失はず。佛蘭西の諺は、銳利にして光芒あること、七首の如くなれども、冷峭の氣、徒らに人を襲うて、溫潤の容乏しき憾なき能はず。獨逸に至りては、その特色を捕ふること困難なり。その數の多きこと世界に冠絶す。ワンドルの諺語辭彙集録する所、無慮三十萬、そのうち二十二萬五千は、完全なる諺にして、他は成句、熟語の類に屬す。今その豊富なる概念を與へむために、一例を舉ぐれば、^{ハッス}の條に六百八十六^{フラッ}女^の條に七百七十^{ジニツク}運命^の條に千二十五^{ゴット}神^の條に二千六百六十を網羅せり。その數の夥しきと共に、編者の精勵驚くに堪へたり。

英國もまた佳諺多きも、是ぞと取り出づべき特色なし、蘇格蘭の諺は、英蘭と
同じく、只方言の差異あるに過ぎじと考へらるれど、必ずしも然らず。全く獨
立して、その境域を守り、互に往來交換せざるもの少からず。而して是等は概
して深遠高尚なる著想に乏しきも、輕妙にして機智に富む。「愚者馳走して賢
者箸を執る」(Fools makes feasts, and wise men eat them. 犬骨折つて鷹の餌食)、「狐
に仕ふる間は、その尾を捧げざるべからず」(As long as ye serve the tod, ye maun
carry his tail)、「鳥は行水しても白くならぬ」(A crow is nae whiter for being washed. 木
藥子は三年磨いても白くならぬ)、「猫鳴き立てて鼠侮る」(A blate cat makes a pro-
ud mouse. 鼠捕る猫は爪かくす)の類、これなり。愛蘭固有のものは、多く世に知
られず。此の國に長く留りし詩人スペンサアは、その當時行はれし顯著なる
一俚諺 Spend me and defend me といふを記せり、以て國民と君長との關係如何
を観るべし。

この他いつれの國に於ても、諺は善く自己を語り、その秘密を暴露せざるな
きは、何人も容易に推測し得べき所なるが、茲に又人心の奥底より出でて、その
秘密を語るといふが如き類にあらで、寧ろ膚淺皮相の常言比喩にして、屢、地方
の特色の鮮明較著なるものあり。即ち自國特有の地理氣候・歴史等の被服を
纏ふものにて、他國にありては、到底同一の容貌風采あるべからざるものはな
り。我が「男心と秋の空」と、英の「女心と冬の空」(Winter-weather and woman's thoughts
often change) 獨の「女心と四月日和」(Weiber sind veränderlich wie Aprilwetter) とを比
較して、各國天候の相違を見るべく、「百年待河清」の語は、黄河の濁流滔々として
澄清の期なき國土において、始めて起るべき諺にして、水明沙白の我が國にあ
りては、殆ど無意義なり。頑固執拗にして、人言を用ひず、自ら破滅の禍を取る
者を戒めて「舵にかゝらねば岩にかゝる」(Who will not be ruled by the rudder, must
be ruled by the rock) といふコオンウォル(英蘭の南西岸)の諺は、人をして直ちに

海岸の岩礁多く、舟行險難なるを想はしむ。「秋の鰈魚と娘の缺點は見えぬ」「秋鯖は娘に食すな」とは、魚貝の利に富む安房の諺にして、「秋山へ媳をやるな」とは海を知らざる飛驒の諺なり。「貧乏な伯母の所へ行くより秋山へ往け」とは、信州の如き山地にして、始めて言ひ得べく、飛驒とその事情の相似たるを注目すべし。「跛者の前で跛者の眞似はむつかしい」(It is hard to halt before a cripple)といふ英諺は、西班牙においては「モア人の所で亞刺比亞語話すな」(Do not talk Arabic in the house of a Moor)となる。我が三備地方に「播州へいて淨瑠璃語るな」といふ語の行はると相類す。西班牙の説教と食物とに經驗あるものは、直ちにオウガステンのない説教は熏肉のないシチウ」(A sermon without Augustine is as a stew without bacon)のいづくの諺たるかを悟り得べし。

我が「獨活の太木」に對比すべき「ハイデルベルグの酒樽で大きいばかり」(Gross und leer, wie das Heidelberger Fass)は、獨逸に於てのみ起り得べき諺なり。こは

三十萬蠟を收むべき巨大なる酒樽にて、數百年前より空虛のまゝにてハイデルベルグに存せり。土佐の諺に「溜井スルキの道と女の道に迷はぬものはない」、土佐郡溜井の里道、岐路多し、播磨の諺に「太山寺參りの藤江寄り」、太山寺は明石の北三里弱の名刹、藤江は西一里程なる漁村といふが如き、いづれも地方的色彩著し。「ルウテルの靴にあふ田舎坊主は少し」(It's not every village parson whom Dr. Luther's shoes will fit)といふは、いづくに發生せしかを容易に認むべく「孔子も時に逢はず」釋迦に提婆、太子に守屋の類は、問はずして東洋の産たるを知るべし。「隗より始めよ」お鬚の塵を掃ふ、意馬心猿、獼猴が帝釋を笑ふといふが如き、明かに支那・印度の故事に基くものにして、古史・佛典の知識なき者は解する能はず。

豈嘗に世界の各國に、その地方的色彩あるのみならむや、我が島帝國の六十餘州中にも、又各特殊なる俚諺の存するあり。大小廣狹の差等こそあれ、その

發生の事情に於ては、以上説く所と、その揆を一にす。今これを類別して、二三の例を示さむに、

地方特有の事件傳説より起るものは、

東海の墓普請

『西遊記』卷五にいふ、長崎春徳寺の山上に、東海氏の墓あり、其の廣大美麗なること、日本第一といふべし。(中略)初めて造り立てたる時の費銀五十貫目いりしといふ。其の後猶心に飽きたらず、二三十年が程は、常々石工を雇ひ、墓普請せしとぞ。それよりして、長崎の諺に手間いりて埒の明かざる事を、東海の墓普請といふ。此の人は唐土より明の亂を避けて、日本に渡れる人なり、大福有の人なり、云々。

大熊人足

大熊村は信州松代領にて、城下より八里ばかり距れり、藩に役ある時は

村の壯丁、持辨當にて拂曉出發し、徒歩して城下に來れば、やがて晝飯時なるを以て、餉を喫して小憩したる後、漸く仕事にかゝり、間もなく遠路の故を以て、辭して歸る。これより人の家に手傳にゆきて、懶惰なる者の貶稱とはなれり。

蕎麥種三角、晝かきは五岳(角)

五岳は有名なる豊後の晝僧なり、よりてこの地方にて事の極めて分明なるに喩ふ。

春、兎の通つたあとが百貫目

野中兼山、土佐長濱の掘抜仕事をなせる時、一匹の兎ゆくりなくその前を走り去りぬ。兼山、工事の監督者に向ひ、汝は兎の出で來りしを知りつらむ、何故に一言をも出さざりしぞと問ひしに、その者答へて、工夫等の立ち騒ぎて、仕事の妨となるべし、と思ひてなりといふ。兼山之を聞

きて、汝の思慮百貫目に値せりと賞せしとかや。

井の口の礎で、立つたらひぞい

井の口は廣島より岩國へ行く途中、草津、二十日市驛の中間にある峠にて、昔時、覺の追剥いでて、行人を悩ましたりといふ。

庄町の婆風

加賀津幡驛の西端を庄町といふ。こゝに昔驛人に指彈せられし惡婆ありき。所の人、冬期の西風、吹雪を捲くを忌むより、由連ねて諺となせるなり。

地理氣候・物産・風俗の差異に基くものは、

大和豐年米取らず

大和は水利不足の地なるを以て、此の國に水の十分なる年は、他國の凶年なり。

木曾雷の百日かんく

伊吹の夕立十年仕事

越前こがれで馬流れ

地理・天文によりて晴雨を卜する語にて、三者共に美濃の諺なり。

上州名物、燗天下に乾風カラツカゼ

乞食袋と西の風は、晚ほど大きくなる(越後地方)

日傭取と西の風はその日ぎり(千葉地方)

東雷雨降らず(越後)

日田の紅烏賊

豊後の日田は、海を去ること十餘里なるより、紅爛せる烏賊を食ふ。

廣島の三かき(柿、牡蠣、花柳病)

尾張大根水臭い

上總木棉にじやう(丈情)がない

備前法華に安藝門徒

親は飼はずも犬は飼へ

土佐は闘犬戯の盛んなる國なればなり。

三人娘は一身代

養蠶の盛んなる信州地方の諺。他の「娘の子は強盜八人」女三人あれば

身代が潰れる(盜不過五女之門)と對照すべし。

淡路のにぢり虚言ウソ

交通乏しく、又聞きの風聞に虚言を混す。

尾道鳶に靱鳥三原雀に眼をぬかれな(備後)

笠井鳥に掛塚鳶(遠江)

其の地方の人氣の險惡なるを諺る。

角錢に社衾(仙臺通寶)の行はれし地方の諺

餅の中から家根石

極めて稀有なることに喩ふ。板屋根に石を置く北陸地方の諺たるを知るべし。

富山淨瑠璃、加賀謠

播州へ往て淨瑠璃語るな

作州へいて棒ふるな

因州へいて小唄歌ふな

方言の特徴を説くものは、

龍野訛りは猫でも訛る

美濃のヂヤ言葉

奥州ダンベイ、薩摩ドンガラ

長崎バツテン、江戸ペラボウ

備前のカラ、作州のケン

びる、どんば、かに、げへる(盛岡地方の方言)
普通の諺を、各地方に假借適用したるものは、

伊勢屋稻荷に犬の糞　より

佐藤齋藤犬の糞(磐城相馬地方)

東男に京女　より

奈良男に京女

越前男に加賀女

名古屋女に宮男

名古屋男に岐阜女郎

筑前女に筑後男

京の着倒れ、大阪の食ひ倒れ、堺の建て倒れ　より

桐生の着倒れ、足利の食ひ倒れ

備前の着倒れ、因幡の食ひ倒れ、作州の家倒れ

阿波の着倒れ、伊豫の食ひ倒れ

尾張の着倒れ、美濃の系圖倒れ

關東のつれ小便　より

播磨のつれ小便

安藝のつればり

土佐のつればり

上州のつれ小便

尾張のつれ小便

斯の如く狭小なる一地方に限られたるものと共に、汎く世界一般に行

はるゝものあり。希臘は古代の東洋より、之を受けて羅馬に傳へ、羅馬は再び之を今日の歐洲諸國に傳へ、到る處人々の贊同を博し、簡略なる形式を以て、その眞理を保存せむと欲するより、終に諺てふ世界的知識の共有財産となりて、いづれの國にも安住土着するに至る。例へば *Man proposes, God disposes* (*La gente pone, y Dios dispone*—*Der Mensch denkt, Gott lenkt*) の如き歐洲各國悉く此の諺のあらざる所なく、沙翁が『ハムレット』の名句となり、人間の斧斫、神靈の手摩に待つべきを説いて、深く人心を感動せしむ。

“There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will.”

されば世界各國の俗諺は、その數殆ど測るべからざるものあれども、一方より觀察すれば、各國共通のもの多く、同一思想の歴史、風俗の相違に従うて、その外形を異にするに過ぎざるを發見すること少なからず。全然特異の面貌服

装をなせる諺も、仔細に點檢する時は、その精神に於て、全く相一致するを認め得べし。こは頗る興味ある問題にて、是等の類似を追求するは、何人も愉快とする所ならむ。

他人の缺點罪過を責めて、自己の之と同等、又はそれより一層甚だしき短所、過失あるを、知らざる意を説ける諺の、外形は殆ど何等の類似なくして、しかもその精神の全く同一なるを見よ。

猿の面(尻)笑ひ

目屎、鼻屎を晒ふ

熟瓜ウリが熟柿カキを晒ふ

牡蠣が鼻垂を笑ふ(備中)

ダイロウのホウ笑ひ(筑前)

ダイロウは馬陸ウスガ、ホウは椿象クワガタの方言、共に惡臭烈しき小蟲なり。

以五十步笑百步

蝙蝠不自見笑他梁上燕

土偶誚木偶

The kiln calls the oven, 'Burnt house.'

The chimney-sweeper bids the collier wash his face

Thou art a bitter bird, said the raven to the starling

The pan says to the pot, 'Keep off, or you'll smutch me Ital.

The raven cried to the crow, 'Avant, blackamoor' Sp.

Death said to the man with his throat cut, 'How ugly you look' Catalan.

Ein Esel schimpft den andern, Langohr

Der Topf sagt zum Kessel: du Schwarzbauch

「空の二羽より掌中の一羽」といふ諺は、外形の差異稍乏しけれども、等類最

も多きものゝ一なるべし。

明日の百より今五十

るゑの雁より手前の雀

A Sparrow in the hand is better than a bustard on the wing Sp.

空の雁より手の雀

One bird in the hand is worth two in the bush Eng.

森の二羽より手の一羽

A sparrow in the hand is better than a crane on the wing Fr.

空の鶴より手の雀

One "hold-fast" is better than two "thou-shalt-have it" Fr.

取れるうな二つより握つた一つ

A sparrow in the hand is better than pigeon on the roof Gr.

家根の鳩より手の雀

Better a penny out of the land than a dollar out of the sea Gr.

海の一圓より陸の一錢

Better one's own penny than another's dollar Gr.

人の一圓より我が一錢

Better to-day a penny than to-morrow a dollar Gr.

明日の一圓より今日の一錢

A penny in the pocket is better than ducat in the chest Gr.

筆筒の一圓より懷の一錢

A bird in the cage is worth a hundred at large Ital.

空の百羽より籠の一羽

Better have an egg to-day than a hen to-morrow Ital.

明日の鶏より今日の卵

One bird in the hand is better than two flying Dutch.

空の二羽より手の一羽

One penny is better on the land than ten on the sea Danish.

海の十錢より陸の一錢

One bird in the net is better than a hundred flying Hebrew.

空の百羽より網の一羽

我國には「大鳥の尾より小鳥の頭」といひ、支那にて「雞口となるも牛後となる勿れ」といふ思想も、又到る處にこれあり。

馬の尾より驢馬の頭 英吉利

貴族の尾より郷士の頭 同

鮫の尾より梭魚カマスの頭 佛蘭西

獅子の尾より犬の頭

同

獅子の尾より猫の頭

伊太利

鯨の尾より鰯の頭

同

龍の尾より蜥蜴の頭

同

獅子の尾より鼠の頭

西班牙

極樂の下部より地獄の王

同

之と正反對の意を表せる我が古諺「鰯の頭をせむより、鰯の尾につけ」といふは、
貝希伯來に「^{ヘブリユウ}狐の頭たらむよりは、獅子の尾となれ」の一あるのみ。

「高みに土を盛り」屋下屋を架し、床上床を施すの愚をいへる諺も、又各國に涉
りて廣く行はる。

冬の雪賣

翰院門邊賣文章

林中不賣薪湖上不賣魚

Owls to Athens Greek.

雅典人

Enchantment to Egypt Rabbis.

埃及人魔法

Pepper to Hindostan Oriental.

印度士坦人胡椒

Deals to Norway Ger.

諾威人松

Indulgences to Rome Ger.

羅馬人赦免狀

Coals to Newcastle Eng.

ユウキヤッスルへ石炭

Water to the sea Dutch.

海へ水

優柔なれば増長し、負へば抱かれう、慈悲すれば尿垂るゝ人情を説き、消々不塞、將爲江河、熒々不救、炎々奈何、兩葉不去、將用斧柯に至るべきを戒むるものに次の如きあり。三者各、異彩ありて、遽に優劣を定め難し。

Who lets one sit on his shoulders, shall have him presently sit on his head Ger.

If thou suffer a calf to be laid on thee, within a little they'll clap on the cow Ital.

Give me where I may sit down; I will make where I may lie down Sp.

「一災起れば二災起り」弱り目に祟り目の伴ひ、禍不單行を説いては、

泣面に蜂

瘦兒に腫物
へスネ

切創に鹽

痛い上に針

轉べば糞の上

Misfortunes are close to one another Latin.

Blessed is that misfortune which come single Ital.

One misfortune is the vigil of another Eng.

A misfortune and a friar are seldom alone Eng.

我が「木乃伊取りが木乃伊になる」と、獨逸の「羊の毛を刈りに往て、坊主になつて歸る」(Mancher geht nach Wolle aus und kommt geschoren selbst nach Haus) とを比すれば如何、^{シヤツカ}「慾の雕股さける」は、羅馬の古諺「角を求むる駱駝は耳を失ふ」(The camel that desired horns lost even its ears)といづれか優れる、同一の思想も自ら深淺巧拙の別なき能はず。英諺の「焼け子火に恐る」(A burnt child fears the fire)は、

我が「黒犬に嘯まれて灰汁アタのたれかすに恐づる」蛇に咬まれて朽繩に驚く、支那の「傷弓之鳥驚曲木」といふに劣れり。彼は一度懲りたるものに對して、怯懦となるといふに過ぎず、之は恐怖の妄想を過大にして、恐るべからざるに恐るゝを示せり。蛇と繩、弓と曲木の如きは、猶相距ること遠からず、懲羹吹釐シといふに至りては、愈巧なり。佛蘭西の「湯をあびた猫は水を恐る」、伊太利の「蛇に咬まれた者は蜥蜴に驚く」共に英諺に比して、稍働きあるも、到底懲羹の味多きに及ぶ能はず。

諺の或物は、時として僅に一二語を變じたるのみにて、諸國に行はるゝことあり。而してこの些々たる變化も、又その國風の一端を示すに足らずとせず、「苦しき時の神頼み」も、一旦咽元過ぐれば、忽ちその恩を忘るゝ輕薄を戒めて、英國にては *The river past, and God forgotten* といひ、西班牙にては *The river past, the saint forgotten* といひ、伊太利にては忘恩の狀態、甚だしく *The peril past, the saint*

mocked とぞいふなる。昔希臘のサモス島にマンドラブルスといふ者あり、ジ
ユノウ神の加護を得て金坑を發見したるよろこびに、黄金の羊を奉らむと、神
に約誓したる後、これを銀に代へむと欲し、尋で銅を以てせむことを思ひ、遂に
何をも捧げざりしといへる小話と同じく、熱さ去りて陰を忘れ、病癒えて醫を
忘るゝ人心、いづくの神も、ヒを投げ給ふべし。

支那の諺の、我國に輸入せられしものゝ多きは、既に前章にも説きたれど、そ
の翻譯にあらずして、偶合なるもの、又極めて多し。和漢俚諺の比較對照は、『諺
草』『本朝俚諺』其他諸家の隨筆に見る所少からずと雖も、いまだ完全なりとい
ふべからず。

藪をつゝいて蛇を出す

打草驚蛇

南竹藪殿隣

非宅是卜、惟隣是卜

無い袖は振られぬ

長袖善舞、多錢善買

面々の楊貴妃

情人眼裏有西施

紺屋の白袴

屠者食藜藿、造車者多步行、梓匠處狹廬、陶者用缺甕

見ぬもの清し

眼不見爲淨

尾を掉る犬は打たれぬ

噴拳不打笑面

わが糞は臭くない

自尿不覺臭

燈臺下暗し

燈臺不日照

鼠とる猫は爪かくす

噬犬不露齒

犬の齒に蚤あたり

狗咬蛇蚤

ひだるい時のまづいものなし

飢不擇食

頭かくして尻かくさす

藏身露影

鹽で海を埋める

擔雪填井

人の頭の蠅より我が蜂拂へ

各人自掃門前雪、莫管他家瓦上霜

盜人を捕へて繩を縛ふ

臨渴掘井

子をもつて知る親の恩

養子方知父慈

京の從兄弟に隣かへず

遠親不如近鄰

葬禮すんでの醫者話

亡羊補牢

いつも柳の下に鱈は居らぬ

守_レ株待_レ兎

鳶が鷹生む

鴉巢生鳳

蝦で鯛釣る

將_レ蝦釣_レ鼈

臭いものには蠅たかる

臭肉來_レ蠅

岡目八目

旁觀者審當局者迷

落武者薄の穂におづ

草木皆兵

せいては事を仕損ず

急行無善歩

旅は道づれ

三人同行小的苦

貧すりや鈍する

人窮令志短

もつた病はなほらぬ

山河易改、本性難移

三人よれば文殊の智慧

三人同行、必有一智

歌人は居ながら名所を知る

秀才不出門、能知天下事

地獄の沙汰も金次第

有錢可使鬼

來年の事をいへば鬼が笑ふ

人作千年調、鬼見拍手笑

はまつた後で井戸の蓋する

賊去後關門

猫に小判

明珠暗投

噂をすれば、影がさす

白日無談人、談人則害生、昏夜無說鬼、說鬼則怪至

犬骨折つて、鷹の餌食

赤脚人趁兎、著韓人喫肉

雉の草がくれ

藏頭雜

坊主がにくければ袈裟までにくい

愛其人者兼及屋上鳥

鳥なき里の蝙蝠

村無大樹蓬蒿爲林

蔣かぬ種は生えぬ

種麥得麥種稷得稷

和漢東西の諺が、屢、その精神において、相一致するのみならず、一國內にても、異語同意のもの頗る多し。此の點より觀察すれば、諺の批評教訓する所は、千種萬様なりと雖も、その中自ら好んで主題とし、對象とするものゝ、那邊に存するかを窺ふに足れり。「油斷大敵」「用心に繩張れ」「用心は臆病にせよ」「浅い川も深く渡れ」「勝つて兎の緒をしめよ」「燒鳥にも綜緒の如き、その語各異なるも、いづ

れも怠慢を戒むるに過ぎず。「龍馬のつまづき」河童の河流れ「上手の手から水がもる」猿も木から落つる「弘法も筆の誤」釋迦にも經のよみちがひ「といふ、皆智者も千慮の一失あるを説くのみ。「太きには吞まれよ、長きには捲かれよ」餓鬼も人數、枯木も山の賑ひ」善は急げ、惡はのべよ」腐つても鯛、ちぎれても錦」はゆる山は口から尊い寺は門から」天人の五衰、人間の八苦」の如き、對句法に依りたる諺も、箇々分離して、獨立に用ひらるゝこと多きを以て、是等も又異語同意の一例と見做し得ざるにあらず。

鬼に金棒

虎に翼

比丘尼に櫛

比丘尼に簪

比丘尼に罩丸

比丘尼に筭

人形にも衣裳

馬子にも衣裳

切株にも著物

鳶もろすまひから鷹と見える

竹の子親まさり

鳶が孔雀をうむ

鳶か鷹うむ

生れぬ前の襦袢定め

捕らぬ狸の皮算用

穴の内の貉の直をする

もうけぬ前の胸算用

他人の飯は白い

隣の花は赤い

隣の糶味噌

うちの鯛より隣の鰯

可愛い子に旅をさせよ

可愛い子は棒で育てよ

七日の說法無になす

百日の說法屁一つ

千日に刈つた萱、一日にほろぼす

似たもの夫婦

類をもつて集る

類は友よぶ

破鍋に綴蓋

女夫は從兄弟ほど似る

鬼の女房に鬼神

牛は牛づれ、馬は馬づれ

須磨源氏（桐壺源氏ともいふ）

隠公左傳

公治長論語（雍也論語とも）

三月庭訓

大海の一滴

九牛の一毛

あなたを祝へばこなたの恨

入船によい風は出船にわるい

あちち立つればこちちが立たぬ

蠅腹立つれば、東よろこぶ

人の禪で相撲取る

人の提灯で明り取る

人の牛蒡で法事する

人の財布で鰐口鳴らす

舅の酒で相聲もてなす

生れたあとの早め薬

いさかひ果てゝの棒乳切木

葬禮すんでの醫者ばなし

屁をひつて尻すばめる

論語よみの論語しらす

禮法師の無禮

陰陽師身の上知らず

醫者の不養生、學者の不身持、坊主の不信心

箕賣笠にて簞る

髮結のみだれ髮

紺搔白袴

蛙の子は蛙

狐の子はつら白

親に似ぬ子は鬼子

親に似た龜の子

一匹狂へば千匹の馬も狂ふ
狂人走れば不狂人も走る

男心と秋の空

男の心と川の瀬は一夜がはり

長者富に飽かす

慾に頂なし

寢耳に水

足下から鳥

一升袋はいつも一升

一升徳利に二升は入らぬ

一升入る瓢は海へいても一升

見るに目欲

見るは目の毒

さはるに煩惱

鯊は飛んでも一代、鰻はのめつても一代

鱧も一期、蝦も一期

笑みの中の刃

綿に針つゝむ

馬を鹿

鷺を鴉

雪をすみ

十分はこぼるゝ

月満つれば缺く

紅は園生にかくれなし

櫻は花にあらはるゝ

鴈が飛べば石龜もちだんだ

鴈が飛べば糞蠅も羽づくろひ

鴈が飛べば瓢箪も羽たゞき

蛙がとべば石龜もちだんだ

鷹が飛べば糞蠅も飛ぶ

鴈がたてば鳩もたつ

馬の耳に風

馬の耳に念佛

雀に鞠

牛の前の琴

猫に小判

猫に經

善惡は友による

朱に交れば赤くなる

麻につるゝ蓬

水は方間の器に随ふ

門前の小僧習はぬ經をよむ

鄭家の奴は詩を歌ふ

勸學院の雀は蒙求を囀る

人事いはば目代^{メシロ}おけ

人事いはば筵しけ

呼ぶより誚れ

誚り者門に立つ

噂をすれば影がさす

一樹の陰一河の流

一村雨の雨宿り

躡く石も縁の端

袖振合ふも他生の縁

壁に耳

垣に目

障子に目

徳利に口

岩もものいふ

頼めば犬も尿くはぬ

頼めば鬼も人くはぬ

頼めば乞食も冷飯くはぬ

雇ふ法師は味噌を嫌ふ

病直りて醫師忘る

熱さ忘れて陰忘る

咽元すぎて熱さ忘る

一人の好士より三人の愚者

三人よれば文殊の智慧

膝とも談合

泥に灸ヤキ

豆腐に鏝

糠に釘

命をまたうもつ龜は蓬萊にあふ

海月も骨に逢ふ

待てば甘露の日和

昔の劔は今の榮刀

麒麟も老いては鴛馬に劣る

椽の下の舞

椽の下の力持

樂屋で聲うゑらす

空家そらやで聲うからす

町には事勿れ

村には事勿れ

乞食も世界よかれ

長居はおそれ

長居鷺は汁になる

長居する鷺、臺目に逢ふ

長居をすれば物を見る

重荷にこづけ

切創に鹽

餓鬼のものを蟲がせびる

いやしむ金木^{カナギ}で目をつく

ゐざりに顛蹴らる

あなづり葛に倒れすな

山の芋で足をつく

芋がらで踏みぬき

出る杭は打たるゝ

高木、風に妬まる

針の穴から天のぞく

管の穴から天のぞく

鑰の穴から天のぞく

蘆の髓から天のぞく

燈明の火で尻あぶる

月夜で背中あぶる

二階から尻あぶる

二階から目薬

石の上にも三年居れば温まる

茨の中にも三年の辛抱

泣く子も目を見る

泣く子も口に物食ふ

泣く子も鍋のはた見て泣け

難波の蘆は伊勢の濱荻

品川海苔は伊豆の磯餅

瓠簞で鯰

鰻に荷鞍

。

意匠句法の酷似して、しかも旨意精神を異にするものあり。是等は往々世人に混同誤用せらる。既に第三章に述べたる「藪をつゝいて蛇」毛を吹いて「薺」の類之なり。「石の中の蜘蛛」と「袋の中の鼠」花は折りたし梢は高し」と「河豚は食ひたし命は惜し」との如き、形を同じうして、意を異にするを見るべきなり。

第五章 諺の機智教訓及び詩趣

諺は機智に富み、詩趣豊かにして、教訓に資すべきものと共に、粗笨野卑にして、利己不正狡猾卑怯等の惡徳を鼓吹するもの少からず、玉石混淆、薰蕕同組なりといへども、概して多少の機智想像を有せざるはなし。

人は常に蕪雜煩瑣なる現實界の勞苦に倦みて、一層高尚優美にして、調和ある世界を憧憬し、空想の所産たる滋味に、枵腹を充たさむとするや切なり、是に於てか詩歌あり。諺は一種の詩歌なり。目に一丁字なき者も、能く其の意を解し、好んで之を口にし、自らこれが作者たるが如き思をなして、想像の自由、比喻の巧妙を誇りて得々たり。是等の無名詩人が手に成れる無數の詩歌に、趣味の津々たるものあるは、元よりその所なり。「花は櫻に人は武士」の語を聞けば、直に朝日に匂ふ一朵の香雲と、威儀儼然、勇あり仁ある武士とを聯想して、不

即不離の好對照に言ふべからざる快美を感じ。吾人はたとひ鈴屋翁が山櫻の歌を失ふとも、此の諺を失ふを欲せざるなり。「旅は道づれ、世はなさけ」の句を誦すれば、春風面を吹き、鳥語水聲、皆吾友たるの感あり。人世の樂むべく、人間の相愛すべきを感ずること、渡る世間に鬼はないの一語より切實なるものあらむや。「情に刃向ふ刃なし」といひ、鬼のたてたる石の戸も情にあくといふ。何等幽婉の妙言ぞや。人世の無常にして、老死の免れ難く、功名の頼むべからざるを説いては「夢の浮世」希臘の諺に *Man is a bubble* 「長い浮世に短い命」といひ、「人間萬事塞翁が馬」と觀じ、水の流と人の行末の測るべからざるを歎じ、「唐虞揖讓三杯酒、湯武交爭一局棋」と冷眼に附し、「功名紙半張」と一喝し去る。バイロンが名句と比して、軒輊なきに似たり。

“What is the end of fame? 'Tis but to fill

A certain portion of uncertain paper”

世を厭ひ、人を恨みて山林に入り、松風蘿月を友とするも、猶煩惱の苦を免れずして、「苦は色變る松の風の絶唱あり。借問す、『古今』以後幾萬の和歌、此の意を語つて、簡淨此の如きものありや、否や。

英諺の Gray hairs are death's blossms 獨逸の Grau' Haare sind Kirchhofsbäumen 土耳古の Death is a black camel which kneels at every man's gate 共に老と死とを語りて、詩味饒し。人慾の際限なきを説いて、Nothing but a handful of dust will fill the eye of man(亞刺比亞)といひ、怨に報ゆるに徳を以てするを語りて、「旃檀は之を切る斧を薫す」(印度)といふ又佳なり。

機智に富めるものに至つては、殆ど其の例の多きに堪へず。「圍栗の脊くらべ」「鯉の齒ざしり」「胡椒の丸呑」「雪隠蟲も所びいき」「耳をとつて鼻をかむ」といふが如き、簡單なる比喻より、鱧も一期、蝦も一期、親は泣き寄り、他人は食寄り」の如き、高尚なる人生觀に至るまで、悉く機智の横溢するを見る。

二人相對して語る。その側を去ること數尺、席上に一黑點を見る。一人曰く、豆なり。他曰く、蟲なり。互に相爭うて下らず。既にして黑點の蠢動するを見る。さきに蟲といひし者、得意満面、豆はいかで這ひいづべきといふ。一人尙聽かずして曰く、這つても黑豆なりと。執拗我慢の人情を嘲りて、覺えず絶倒せしむ。之と相匹敵して、兄たり難く、弟たり難きものに、榎の實は成らばなれ、木は棕の木といふあり。

乞丐相集まりて、各志を言へる際、一人進みいでて、われもし志を得ば、蜀錦袋を裁し、黄金、碗を鑄むといへりしとは、有名なる笑話なり。「蒔繪の天秤棒を擔ぐ」の諺と、左右に懸けて、一荷に擔はば棒を折りぬべし。「腹の皮が張れば目の皮がたるむ」は、生理上の眞理に過ぎざれど、一張一弛の交渉、意表に出でて、笑を禁する能はず。「提灯もちが堀へはまる」土佛の水遊び、張範のあて飲み、人の疝氣を頭痛に病むの類、輕雋頤を解くの妙は一々解釋を要せず。

英諺に曰く、*The devil is dead, he never lacks a chief mourner*と「鬼死して狐悲む」は猶同類のよしみなきにあらず、鬼の死にしにも泣く者はあり、仲尼盜跖共に一塵埃、嬉笑怒罵すべて一夜の夢に化し去れば、百年恩仇等しく忘れて、なくては人は戀しかりける。

冠履顛倒して、凶惡時を得れば百鬼跳梁す。When rogues go in procession, the devil holds the cross(伊太利)とは此の謂なり。「鸛棺者欲歲之瘞」人は我欲の動物なり、靴屋は牛の死ぬことを祈る(Cobblers go to mass, and pray that cows may die)といふ葡萄牙の諺と、東西相對すべし。言ふにも足らぬ瑣事を、善行として誇耀するを嘲りて、「卵を吸うて殻を施す」(He will swallow an egg, and give away the shells in alms)といふ獨諺は、「盜豚施骨」といづれかをかしかるべき。猶太の古典『タルマッド』に「諸木の黙々として燃ゆる中に、荆棘ひとり聲を放つて、我も木なるぞと叫喚す」(All kinds of wood burn silently, except thorns, which crackle and cry

out, We too are wood) といへるは、我が「鴈が飛べば糞蠅も羽づくろひ」又は「石龜もちだんだ」と、其の意稍、近きも、深刻遙かに之に過ぎ、不可言の妙味あり。

是等秀拔なる諺中には、單に機智に富むとのみ評し去るべからずして、深奥幽妙なる人心の機微に觸るゝもの多し。世人往々、自己の惡を見、非を聽くを欲せず、自ら欺いて良心の呵責を緩うせむとす。『呂氏春秋』に曰く「鐘を盜む者あり。鐘大にして負ふべからず、椎を以て之を毀つ、鐘況然として音あり。人の聞くを恐れ、之を奪ひて、遽に自ら其の耳を掩ふ」と。これを諺に「掩耳盜鐘」といふ。「掩目捕雀」といふも、又同一意なり。英諺の「乾酪を盜む猫は其の目を閉ぢ」(The cat shuts its eyes while it steals cream)と共に「善く頭隠して尻隠さざる」人間の弱點を描破せり。雉の頭を草中に入れ、駝鳥の首を沙中に埋めて、獵夫の目を逃れ得たりとするを嘲りて、其の無智を嗤笑する吾人は、自ら内に省みて、耳を掩うて鐘を盜み、目を掩ひて雀を捕ふるの愚を演ぜずと、公言し得るや否

や。愚人は俚諺の噱資なり。「馬鹿に附ける藥なく」はくらくらの藥はくらくらむ病みが買ふ、馬鹿はどこはいいものなく、馬鹿と相場には勝てず。されど馬鹿と缺は使ひやうで動くは、愚者の一得とやいはむ。英諺の *Fools grow without watering* 露諺の *Fools are not planted or sowed; they grow of themselves* 共に痴愚の培養灌溉を要せずして、生育すべきをいふ。丁抹の馬鹿に手形いらす、*(Fools have no need of a passport)* は、到る處自ら其の痴愚を現すべきを以て、證明狀の必要なきをいへるなり。此の如く「馬鹿も名物」となりては、又天下に濶歩するに足れり。されど妄に嘲るを止めよ、人の一尺を見て、己の一寸を見ざるは、人の常情なり。嘲る者賢にして、嘲らるゝ者愚なるか。妄に壯語するを止めよ、自慢高慢は馬鹿の行きどまり、畢竟五十歩を以て百歩を笑ふのみ。故に西班牙の諺に曰く、「痴愚もし疼痛の病ならば、家々その叫聲を聞かむ」*(If folly were a pain, there would be crying in every house)* 云。

衆愚中、最も厭ふべき術學の愚を嘲りて痛快なるは、羅句語を知らないうちは大馬鹿でない」(A fool, unless he know Latin, is never a great fool) といふ英諺なり。「博士買驢書券三紙、未有驢字」といふは、鋒芒の尖鋭、前者に劣るも、婉曲の諷刺、また喜ぶべし。

是等鋭利なる嘲笑の毒矢は、各種各様の階級に向つて、一切平等に放たれ、貧富、貴賤、賢愚を分たず。「御所内裏の事も陰ではいひ、公家の位倒れ」と嘲り、無能の比喩には、「大名の懷子」「大名の火にくばつたやう」といひ、其の病するや、醫師互に責任を避けて、甲乙相譲り、終に死に至らしむるを憐みて、「大名の病は行斃同前」といひ、「大名は地獄の下積み」と詛ふ。「學者の不身持、醫者の不養生、坊主の不信心、論語よみの論語知らず、布施ない經には袈裟おとす、金持と灰吹は溜まる程きたない、貧乏人の系圖話、今まゐり二十日、こんど鍛冶屋に、明後日紺屋、商人の空誓文、百姓の去年物語、下衆の智慧はあとから、等、士農工商上下八方に鋒を

向け、學者智者を罵ると共に、不學無術をも許さず、「非學者論に負けず」といひ、「下手の道具しらべ」「下手の考休むに似たり」と嘲る。婦女子も又嘲笑の標的たるを免れず。「女三人は姦しい」「女さかしくて牛賣り損ふ」「娘三人は強盜八人」「女房と疊は新しいがよい」「女房は床の間の置物」の如き、女權論者の憤慨する所なれども、女子と小人の養ひ難きは必ずしも東洋獨得の思想とのみ排斥し去る能はず。

Next to nae wife, a gude wife is the best

無妻に次では良妻

He that has lost a wife and sixpence has lost sixpence

女房と十文なくした者は十文の損

All are gude lasses; but where do all the ill wives come frae?

娘は皆よいに、悪い女房はどこから來るだらう

Three women and a goose makes a market Ital.

女三人と鵝鳥一羽あれば市が立つ

A spaniel, a woman, and a walnut tree,

The more they're beaten, the better still they be

犬と女と胡桃の木は打たれる程よくなる

As great a pity to see a woman weep, as to see a goose go barefoot

女の泣くのは、鵝鳥が徒跣であるくを見た程いさしい

The more women look in their glasses, the less they look to their honses

鏡に親しい程、家事に疎くなる

Two daughters and a back door are three errant thieves

娘二人と内所事は泥坊三人

人情の隠微を穿ち、瞿然として襟を正さしむること、親しく聖賢の嚴訓を聞

くが如きものあり。驕慢の氣は人毎にこれ有り、而して自ら知らず、波斯の諺に曰く「自家心中の慢氣を知るは、暗夜黒地の上を走る蟻を見るより難し」(Thou shalt sooner detect an ant moving in the dark night on the black earth, than all the motions of pride in thine heart)と。山中の賊を擒にするは易く、心中の敵を破るは難し。驕矜の心は徳の賊なり、誰かよく之を破る者ぞ。人を責むるは明、己を責むるは昏、暴に易ふるに暴を以てし、驕慢を排するに驕慢を以てし、其の非を知らざるものあり。所謂 There is who despises pride with a greater pride (伊太利諺)之なり。昔ダイオゼニイス泥足を揚げて、ブラトオが客室の華氈を踏み、以て主人が驕矜の心を蹂躪するなりといひしに、ブラトオ聲に應じて、君が驕矜の心もて、と答へたりき。ブラトオまた嘗つてダイオゼニイスに向つて、その鶉衣百結の間より、名譽心の洩るゝを見る、といひしことあり。誇負自滿の氣は錦繡の中にも、襪襪の中にも、等しく包藏せらる。智に誇る者あり、愚に誇

る者あり、富貴に誇る者あり、貧賤に誇る者あり、恭謙に誇り、寡欲に誇る、進むも退くも、又免るゝ能はず。所謂 *As proud go behind as before* 之なり。夜郎自大、無用の自尊心に制せられて、妄に自家の品格を毀損せむことを恐れ、一舉手一投足の勞を敢てせざることあり。次の三例はこの愚を揶揄し得て妙なり。

If I am master, and you are master, who shall drive the asses Arabia.

You a lady, I a lady, who shall drive the hogs a-field? Gallegan.

I stout and you stout, who will carry the dirt out? English.

尖峭銳利なる人生の觀察は、時として噁蹙すべき結論を、吾人に齎することあり。厭ふべく忌むべしといへども、其の事實なるを如何せむ。「直如弦死道邊、曲如鉤反封侯」これも又實情たり。「佛頼んで地獄におつる者、又絶無と云ふべからず。」「富貴他人合、貧賤親戚離」悲しい時は身一つにして、人の憂を分つなし。獨諺に「一人の敵も多きに過ぎ、百人の友も少きに過ぐ」(Ein Feind ist zu viel; und

hundert Freunde sind zu wenig)と、百人の友は汝の幸福ならむを望み。一人の敵は汝に災害を加ふ。一は所動的にして、他は能動的なり、一人の敵猶然り、況んや「男子門を出づれば七人の敵あり」といへるをや。波斯の諺に教へて曰く、人自ら知るより多きもの四つ、罪惡、借金、年と敵(Of four things every man has more than he knows: of sins, of debts, of years, and of foes)

我が「兄弟は他人のはじまり」といふも、又厭ふべきものゝ一なり。されど友于の情の、長するに隨ひて漸く薄く、甚しきに至りては、牆に鬩ぐ醜態を演ずること、少からざるを如何せむ。邦諺に「持佛堂と年より親は置所なし」といひ、西班牙の諺に「一父、十子を養うて、十子、一父を養ふ能はず」(One father can support ten children; ten children cannot support one father)といへり。兒女の孝養は父母の慈愛に及ばず。親の思ふ程に、子の思はざる事實を寫して、眞を失はず。父母の子に對する愛は、獻身的にして、我を苦しめ、我を泣かしむる子も猶無きに

勝れりとし、無い子では泣かれずと、泣きの涙ながらもみづから慰む。されど此の愛情もまた時としては自我の犠牲に供せらるゝことあり。「子を棄つる藪はあれど、身を棄つる藪はなし」とは、此の謂なり。古歌に曰く、

身にまさるものなかりけり、みどり子は

やらむかたなくなしけれども

諺の奇警なるものを、巧に應用する時は、辯論文章の光彩を添ふること、恰も珠玉を衣服に點綴するが如きものあり。巢林子の戯曲、也有の俳文の如き、巧に俚諺を経緯して、錦繡の文を成せるのみならず、往々世話を點化して、自家獨得の警句とせるを見る。無數の諺を連綴して小説戯文となせるものに、諺合鏡、普世俗談、世話詞、渡世雀、謠曲の體に擬せるものに、笑謠諺を題詠とせる俳句集に二重染あり。是等是一種の遊戯文字に過ぎざれども、又破顔一笑せしむるに足る。

諺の詩趣、機智については、上文ほど其の要を盡せり。此の二者以外、吾人が最も適切に感ずる諺の價值は、其の怜悯なる常識と、聰明なる處世訓とにあり。諺の教訓規箴する所は、社會のあらゆる方面に互りて、存せざることなきを以て、能く其の訓戒を守りたらむには、世に處し、人に交るに於て、誤なきに庶幾かるべし。

諺の多數は、吾人に口舌の謹むべきを教ふ、「口は禍の門にして、雉子は鳴きたるために打たれ、蛙も口ゆゑに吞まる」君子は事に敏にして言に訥す、能く言ふ者は能く行はず、詞多きは品少し、一言口を出づれば、驕馬も追ひ難し、矢既に弦を離るれば、また如何ともすべからず、「言ひたい事は明日いへ」とは、此の悔なからしめむが爲なり。獨逸の「舌の蹟より足の蹟」(Besser mit dem Fusse gostrauchelt als mit der Zunge) 瑞典の「惡語より善言」(Better silence than ill speech) 波斯の「金默銀語」(Speech is silver, silence is golden) 伊太利の「語る者は、播種し、黙する者は收

穫す」(Who speaks, sows; who keeps silence, reaps) づれも多言の沈黙に如かざるを教ふ。世人往々人と論議するに方り、唇を搖ひ舌を鼓し、大聲疾呼、敵手を屈し得たりとするものあり、有理不在高聲の一語、此の輩の砭針とすべし。

「人の口に戸は立てられぬ」とは、世上の公論掩ふべからざるものあるをいふ。諛墓の文を十丈の豐碑に鐫むも、終に世人の口を滅すべからず、路上行人口似「碑」口碑は石碑よりも有力なり。金石は時あつて亡ぶべきも、事業は長へに死せず。

交際の親むべくして、狎るべからざるを教へて「思ふ中には垣をせよ」といひ、惡友の害を説いては「犬と臥する者は、蚤を得て起つ」(Who lies down with dogs shall rise up with fleas) といひ、人の己を責めずして、他を咎むるを戒めては「堂がゆがんで經が讀めぬ」「不善使、船嫌、溪曲」といひ、英諺の By the street of 'By-and-bye' one arrives at the house of 'Never' は、苟且儉安、決行の勇なき者を戒め、露諺の Measure

thy cloth ten times; thou canst cut it but once は一度決すれば動かすべからざる事件を斷するに方り、細心熟慮の必要なるを教ふ。

「氏より育ち」とは不磨の確言なり。家庭の教育は「男三分女七分婦人の感化殊に多し。然るに慈愛に過ぎて、子を賊ふの例、甚だ少からず。」「祖母育ちは三百文やすい」とは此の謂にして「可愛い子は棒で育てよ」(Spare the rod, and spoil the child) とは、溺愛者を反省せしむるに足る。

「悪い者は生けて見よ」何ぞ其の語の空濶にして淵深なる。釋迦、基督の慈心金口も、之に加ふるなし。「たゞ鳥跡を濁さず」何ぞ其の志の殊勝なる。交絶えて惡聲を出さざるは、君子の願ふ所なり。然かも「跡は野となれ山となれ」といふは寧ろ世の常態にして、能く此の教を奉ずる者、果して幾人かある。諺に曰く「心ほどの世を経る」といかなる世を経べきかは、一に吾人の修養如何にあり。

亞刺比亞の諺にこれあり「吾生涯の一日は、吾歴史の一葉なり」(Every day in

thy life is a leaf in thy history) の、噫その一葉を如何なる記事を以て満たさむとするか。フランクリンは、誠實、正義等、十三徳の表を作り、小心翼翼として違はざるを期し、犯すある毎に黒點を付し、日々其の結果を鑑みて、克己抑制、心を研ぎ、行を謹み、終に其の惡徳を排除して、完人たるを得たりき。「君子贏得傲君子、小人枉了傲小人」君子たるも小人たるも、一に操守の堅否如何にあり。吾人の薄志弱行なる、朝には夕あらむことを思ひ、今日勤めずして明日を頼み、日を經月を涉り、昏々として一生を終る。白頭、自家の歴史を續きて、一葉又一葉、何の得る所もなきに、慚恨懊惱するも又晚からずや。

諺の教ふる所は廣狹深淺區々にして、「花七日」「一時三里」は人の道、千軒あれば共暮し、雪のはては涅槃等の如き、單純皮相なる經驗的智識を發表するものあると共に、その秀拔なるものに至つては、深く事物の神髓を穿ち、應用の範圍廣大無邊にして、適く所として可ならざるなく、いづれの方面にも、其の光彩を發

射し得べし。例へば極めて普通なる「雨降つて地かたまる」といふ諺について見よ。これが説明たるべき例證は、個人の生活にも、一國の歴史にも充溢せり。元寇の國難は對外思想の臍を固め、維新の大業は攘夷討幕の豪雨の後に成りにき。廉頗、藺相如は初め功を争うて、仇敵の如くなりしも、一朝猜疑の雲霧るゝや、刎頸の交をなすに至れり。此の類枚舉に堪へず。又彼の *Extremes meet* について見よ。老人は再び小兒となり、寒の極は熱と等しく人を燒き、喜の極は悲と同じく涙を出し、歡樂極りて哀情多く、至りて貴きものは、至りて賤しきものと共に價を量るべからず、諂諛者は誹謗者にして、遊蕩兒は又鄙吝漢たり。此の如き例を引かば、大小共に殆ど際限なかるべし。運用の妙は一心に在り、應用の巧妙にして適切なる時は其の光輝を發すること愈々大なり。

第六章 諺と道德

諺は廣く一般民庶の間に行はるゝ一種の格言にして、之を準則として善惡理否を判じ、進退動止を決する等、其の勢力著大にして、世人の行爲を指導し、情意を左右すること多し。「鷹は死すとも穂をつまず」武士は食はねど高楊枝」の如き武士道の精神を發揮し、國民の廉潔を養成したる功頗る大なり。衣食のために、動もすれば道心を失ひ、卑劣の情を發するに際し、此の諺に鑑みて自ら耻ぢ、過なきを得たる類、蓋し少からざるべし。而して諺の教ふる所は、利害得失を計較し、自己を中心とし、危險を避け失敗に陥らざるやうに、警戒を與ふるもの多くして、善に向つて直前邁往の意氣を鼓舞する類は、割合に少く、禍福の常なく、希望の實現し難く、人智の不完全にして、世事の意料外なること多きを説きて、人の注意を促す類、多數を占むるに似たり。さればボオンの諸國俚諺

集を検するも、Better(寧爲)を以て始まるもの百三十、Every(各自)を以てするもの百六十、Do no(勿)を以てするもの六十四、これ其の傾向を卜するに足れり。此の如く人世の暗黒面を指示するより、自ら厭世的冷評的の調を帶ぶるものあるは又已むを得ざる勢なり。

諺の數その幾百萬なるを知らず、神聖なるもの、俗惡なるもの、高尚なるもの、鄙野なるもの、神佛の聲あり、惡魔の叫あり。是等を精細に比量して、道德的價値を論定せむは、頗る困難の事業なるも、民間の道德は、諺の教訓に基くこと多きより考ふるに、その多數は正當にして、眞實たるを認めざるを得ず。又吾人が日常耳に親しき諺について考ふるも、道德上不都合と目すべきは、旅の耻はかきずて、毒くはば皿まで」の類、四五種の外に出でざるを見む。

諺本來の意義は、善良にして非難すべからざるに、往々世人に曲解せられて、惡德の辯護に供せらるゝことあり。『若い時は二度なし』といふを楯として、自

己の遊惰放逸を容認するが如き之なり。少壯再び來らず、時に及んで努力すべきを戒めたる諺は、却つて青年の懶惰を是認許容するの具となり、人事を盡して、徐ろに天命を待つべきを教へし「果報は寢て待つ」の語は、屢なまけ者が晝寢宵寢の口實となる。As he brewed, so he must drink(醸しゝ者は飲まざるべからず)又は As he has sown, so must he reap(播きし者は刈らざるべからず)を以て、己の失策不注意より、災厄を招きし者は救はざるが正當なり、と解釋して他人の不幸を顧みざる者あり、これ大に誤れり。人は善惡の行によりて、其の應報を受くべきを説けるまでにて、其の不幸を傍觀せよとはいはざる也。Charity begins at home(慈悲は家内から)も又利己主義の口實となり、他人の不幸に對する同情賑給を拒絶する遁辭となれり。されど其の眞意はいふまでもなく、一家に仁なる者にして、始めて一國に仁に、妻子を愛する者にして、又能く博愛衆に及ぶべく、即ち家庭が仁慈同情の中樞たるをいふ也。「一度は數のうちでな

し、(Eimmal, keimmal)の語も、又屢、罪惡を寬恕するの遁辭に用ひらる。

茲にまた道德の品位を毀損するに似たるものあり。「情は人のためならず」といふが如き、慈悲仁愛の美德を以て、應報の我が身に還るべきを豫期し、善の爲に善をなし、正の故に正を行はずして、正直は最上の政略なるを以て之を行へといふ。是等は道德を功利主義の方便に供するの嫌なきにあらず。されど俗諺は倫理學の原則を説くものにあらず、一般世人をして陰德あれば陽報あり、慈悲正直は處世上の最好方便なりとして、之を守り之を行はしむるを得ば足れり、何ぞ必ずしもその功利的道德たるを厭はむや。

利己我慾の意を表する諺も、之を人生の規矩準繩なりと公言せざる以上は、不徳背倫の教なりといふべからず、浮世の人情はかくも淺ましきものなりと、袂出暴露すれば、世を警め人を戒むるの利あり、不徳を教ふるにあらずして、不徳を斥けしむる方便なり。「人の痛いのは三年でも辛抱する」とは、他人の困難

に對する同情薄きを道破せるものにして、露西亞の諺に「他人の肩の荷物は輕い」(The burden is light on the shoulders of another) 佛蘭西の「友達の不幸はいつでも我慢が出来る」(One has always enough strength to bear the misfortunes of one's friends) といへる皆これに同じ。「人はわるかれ我よかれ」隣の貧乏は鴈の味「世上物騒我身息災」にして、我田にのみ水を引き「仕事は多勢、甘い物は一人」といふ得手勝手の人情は、古今東西異なるべくもあらず。

Every one draws the water to his own mill Ital.

Every one rakes the embers to his own cakes Ital.

Men cut broad thongs from other men's leather Latin.

Every one for himself, and God for us all Eng.

Self's the man Dutch.

Better a grape for me, than two figs for thee French.

此の如く厭ふべき諺の多く存在するは事實なり。諺は社會の反影なり、人情の鏡なり、卑怯、不信、利己、鄙吝、種々雜多の不徳が、之に映りいづるは怪むに足らず、世上もし是等不徳の諺を見る能はずんば、人間は悉く大偽善者ならざるべからず。

金錢の萬能を唱へ、廉耻心の薄弱を説いては、「地獄の沙汰も金次第」Every man has his price(人各、價あり)などいひ、貧すれば鈍し、窮すれば濫するを認めて、「袋も空では立たぬ」(It is hard for an empty sack to stand straight)といひ、處世上、己を曲げて人に付き、流に隨うて波を揚ぐるを利なりとして「長きには捲かれよ、太きには呑まれよ」人と屏風はすぐでは立たぬと教へ、金錢には親子も他人にして、己が父にも心を許さず「Count after your father(佛諺)といふ。「立ちよらば大樹の蔭」犬になつても大所の犬になれ、利の在る處は仇敵をも棄てず、かたき家で、口をぬらせ、貰ふものは夏も小袖」を辭せず、悲歎の中にも、かたみわけの良否

を識別し、泣く子の口にも物食ふを止めず。自利自衛の念、飽くまで強く、動もすれば、人の褌で相撲をとり、舅の酒で相婿をもてなすのみならず、他人を危険の地にさへ置かむとすること、穴の蛇は人手で引出せ」(Draw the snake from its hole by another man's hand)の如きあり。「鵠不踏」の木にもかゝるは好いぞの如き、頗る陋劣なる諺なれども、犬の糞で敵を打つといふに至つては、最も卑劣なり、疫病神で敵打つは其の罪愈々深く、死ねがな目くじろは悪魔の聲なり。

以上舉ぐるが如き悪諺なきにあらざれども、是等は米の中の稗と一般比較的少数にして、又實際世人の口頭に上ること稀なり。人の不平憤悶の情に驅らるゝや、天を怨み人を詛ひ、正義公道を蔑視するの悪語を放つこと、往々これなき能はざるも、こは一時激昂の餘にいつるものにして、その常情にあらず。是を以て時として不穩の暴言を放つも、やがて自ら省みて耻づる所あり、知らず識らず、仰損して不正不徳の語に遠ざかり、善良穩健なる諺を用ふるより、悪

諺の世に成立流行すること、おのづから少きなるべし。

金錢の出入用途利弊等は、吾人が日常の生活と密接の關係あるを以て、各國共に此の類の諺に富み、ワンドルは金錢に關する獨諺を採録すること、千六百餘に上れり。概して節儉力行を獎勵して、塵積りて山をなし、雀の巢もくふにたまるの理を教へ、稼ぐに追ひつく貧乏なきを唱説して、湯水の如くに財を使ふ愚を戒むれども、ひたすら蓄財に耽りて、吝嗇に陷る弊を指摘して、金の番人となり、寶のもち腐りとなり、小利大損を招き、「一文吝みの百失ひ」たるを戒む。

又一朝にして金を得むとする者の、不正の手段に用ふるに至り易きを戒めて「一年の内に富まむとする者は、半年の内に刑せらる」(He who will be rich in a year at the half-year they hang him) といひ、財戻りて入るものは戻りて出で、惡錢の身につかざるをいふもの頗る多し。支那の「空裏得來空裏去」獨逸の Wie ge-wonnen, so zerronnen (得たるが如く失ふ) 及び Ungerechter Pfennig verzehnt gerechten

Thaler (不義の一錢は正義の一兩を減す) 西班牙の That which is another's always
yearns for its lord (人の物は主を戀ふ皆之なり。陰徳あれば陽報あり、積善の家
には餘慶ある意を語りては The charitable gives out at the door, and God puts in at
the window (英) 又 Give alms, that thy children may not ask them (丁抹) いひ、慾に頂
なく、足ることを知らずして、終に身を減すに至るべきを諭して、欲の雕股さけ
る、といひ、Covetousness bursts the bag (貪欲は袋を破る) といふ。

「金もち金をつかはす」庫中徒らに菌を生ぜしめ、唾壺と汚穢を爭ふ者のため
に、「一服の清涼劑たるべきは、『タルマッド』の「施與は富人の鹽」(Alms are the salt
of riches) といへる一語なり。空しく蓄積して世用をなさず、財を腐らせ、併せ
て身を腐らす者にありて、施與慈善は絶好の防腐劑たらすんばあらず。諺は
かくの如く施與分財を勸告すると共に、其の方法について、周到なる注意を忘
れず、大風に灰を撒き「唐へ投金」するが如き、無謀の慈善濫與を警戒して、與ふる

者受くる者、共に中庸を得べきを教へて曰く、「手から蒔いて、袋から蒔くな」(Sow with the hand, and not with the whole sack. Greek)「明日もやれる程今日やれ」(So give to-day, that thou shalt be able to give to-morrow. Danish)云。

金を積みて北斗を支ふとも、冥途のみやげとならず、財貨も又無常の敵を如何ともする能はざるを説いて、伊太利には「壽衣にかくしなし」(Our last robe is made without pockets)露西亞には「黄金も天に飛ぶべき翼なし」(Gold has wings which carry everywhere except to heaven)云はる。

財産・地位・名望等すべて自己の利益となるべきものについて、自ら力めずして、妄に他を羨み、徒らに隣の寶を數へ、牡丹餅の棚より落下するを望み、天の落つるを待つて、雲雀を捕へむとするが如き、卑屈なる情心を鞭撻し、獨立自尊克己、忍耐等の諸徳を鼓吹する男らしき諺少しとせず。「男は裸百貫なり、自ら奮つて、自家の天地を開拓すべし、成敗利鈍は天なり、世は七轉び八起き」なり、男の

心と大黒柱は、太いうへにも太かれ、當つて碎くる覺悟なかるべからず。「樂は苦の種、苦は樂の種」不_レ受_二苦中苦_一難爲_二人上人_一 Win purple and wear purple. —No pains, no gains; —No sweat, no sweet; —No mill, no meal の如き、いづれも異口同音、盛んに罷勉努力の徳を教ふるにあらずや。「稼ぐに追ひつく貧乏なし」蜂蜜蜂蜜と連呼するのみにては、甘味は口中に來らず (It is not with saying, Honey, Honey, that sweetness comes into the mouth. Turk) 「神は自ら助くる者を助く」忘_レけ者の頭には神宿らず、汝の務むべきを務めて、然る後其の結果を天に委ねよ、自ら助けずして、神の助を呼ぶの權利なし。希臘の古諺にいはずや、Call Minerva to aid, but beslin thyself 云々。

「我物食へば竈將軍なり、わが汗に食ひ、わが家に居る、俯仰天地に愧ぢず、誰か得て我を左右するものぞ、Sit in your own place, no man can make you rise」われに口あり、人に囁して吹かしむる勿れ (Who has a mouth, let him not say to another,

Blow)とは自ら事を處するの快を教ふる西班牙の諺なり。

男らしき諺の中には、否運失敗と闘うて沮喪せざる勇氣、逆境に立ちて屈せざる忍耐力を鼓舞し、此の勇氣忍耐には、天人共に永く敵する能はざるを説くもの多し。「蟻の思も天に達すべく、一念の力は岩をも透す」七上り七下り「浮世の波に、飄搖せらるゝも、堅忍時を待てば、甘露の日和終に來りて、海月も骨に逢ふ」世あり「世界は忍耐強き者の爲めに存す」(The world is for him who has patience. It is) 三年凝坐すれば、頑石も又溫まるべき也。人の我を知らざるを憂ふる勿れ、只我が材能智徳の足らざるを憂へよ。「櫻は花にあらはれ、錐は袋を透す」用に立つ石は、永く路傍に棄てられず」(A stone that is fit for the wall, is not left in the way. Persia) 早晚世にいでて、適所を得るや期して待つべき也。

一敗を以て志を挫くべからず、財を失ふも憂ふるに足らず、地位名望を失ふも又可なり、意氣精神を失ふに至りては救ふべからず、(Money lost nothing lost;

courage lost; much lost; honour lost, more lost; soul lost, all lost. Dutch) 帽を失ふも

頭を失はず、指環を失ふも指は存せり」(If I have lost the ring, yet the fingers are still here. Sp.) 物を失ふも我を失はざれ、指環は再び得べし、指は改め作るべからず、帽子なきも頭は頭なり、環なきも指は指なり、瑣々たる外觀何ぞ我を煩さむ。時不可にして一旦下位に居るも、一片耿々の心、猶存するものあらば、再び青雲の上にあるべき也、男子須らく自ら頼んで事を成すべし。然れども鑑基ありといへども時を待つに如かず、人事を悉して、徐ろに天命を待つ度量なかるべからず、果報は寐て待てとは、正に此の意なり。自ら爲すべき所を爲して、多く期待せざる者は、おのづから神寵を得て、天賚を得べし、泰西の古諺にこれあり、The net of the sleeping takes (睡者の網に魚たまる)と。

吾人は既に道德上の諺について、多くをいへり。今特に青年諸子のために、有益なるものを掲げて、此の章を結ばむ。少壯努力せず、老大徒らに悲傷する

は、古今の通情なり。『兎角浮世は色と酒、飲めや謠へや一寸さきは闇』といふ類の惡語を楯とし、若い時は二度なし、時に及んで行樂すべしと、身勝手の言草に、あたらし青春の佳期を浮世の罪惡に徒消し、健康を損ひ氣力を消するものは、暮年の寒風酸雨に悔恨するも、はた何の益かある。『無いが意見の總じまひ』にして、『後悔さきに立たざる』也。一年の計は元日にあり、一生の計は少年の時にあり、(Morgensund' hat Gold in Mund) 浮世の快樂に耽る者、宜しく穀を搗いて米を鬼に投じ、糠を神に捧ぐる勿れ、(When you grind your corn give not the flour to the devil, and the bran to God)といへる伊太利の諺を牢記すべし。吾人が意思の薄弱なる屢、昨非を悔いて、昨非を重ね、同一の過に陥ることあり、今日は昨日の弟子なり、(To-day is the scholar of yesterday) 能く昨日の師訓を守りて、早く過を改め、長く忘れざるべき也。自己の過失に鑑みて、自己を砥礪するの效多きは、猶金剛石を磨くに、金剛石の粉末を川ふるが如きなり。

更に俚諺より教訓を得むとする者のために、一言の注意を加へむ。諺は薰
蕕相混じ品質區々なれども、要するに、事の一面を觀て、之を誇大に評説するの
傾向あり、故に其の指示する所、半面の眞理に過ぎざる場合多し。「好きこそ物
の上手」といへど、又下手の横好きあるを忘るべからず。「麒麟も老いては驚馬
に劣る」と事實なれど、腐つても鯛といふも、亦一面の眞理なり。諺の特色は、
或特殊の場合を語りて、一般の場合を想像せしむるにあり、即ち或理想を具體
的に表現するにあり。何人も經驗して熟知せる事件を借りて、或道理を目睹
するが如くに表出するなり。是を以て勢ひ多少の語弊なき能はず、人生の或
一面には痛切なれども、恰くいづれの場合にも適合するを得ず、博くして淺き
よりも、狭くして深きを長所とす。諺が深く人心に浸染して、云爲を左右する
力あるは、これがため也。吾人の世に處するや、日々無數の問題に逢著し、紛糾
錯綜、窮まる所を知らず。是等無數の問題に適用すべき教訓の、一條なる能は

すして、互に矛盾撞著の觀あるは、己むを得ざる勢にて、或は右より、或は左より、表より裏より觀察して、各一面の眞理を説明し、兩々相待つて、公平の判斷を與ふる所以なり。「子を見ること親に如かず」といふにも道理あれど、「親の慾目」といふにも道理あり。「瓦も磨けば光る」といへど、「木鑊子は三年磨いても白くならず」。「早いが勝」といへど、「せいては事を爲損する」憂あり。「親に似ぬは鬼子」といへば、「形は生めど心は生まず」といふ。複雑極りなき人生は、是等の相矛盾せる諺を共に容れて餘あり。甲乙各一面一部の眞理を含み、互に相補ひ相正して、よく世態人情の實相を説破し、健全中庸の思想を養成せしむ。されば俚諺の訓戒を信條とせむとする者は、其の一方の教訓に執著して、一切他を顧みざるの愚に陥るなく、相反せる諺をも參酌して、所謂「大鼓をうてば鐘がはづれる」の陋を演ずる勿れ。又「毒くはば皿まで」濡れぬさきこそ露をも厭へ」の如き、自暴自棄の惡諺を以て、己の罪過を辯護せむとするが如きことなく、能くその佳

良なるものを奉じて、遷善進徳の具となすべし。同一の俚諺も、その解釋應用の如何によりて、毒となり藥となること、猶同一草木の花中より、蜂は蜜を吸ひ、蜘蛛は毒を取り、(Where the bee sucks honey, the spider sucks poison)「牛は水を飲んで乳となし、蛇は水を飲んで毒となす」が如し、戒めざるべけむや。

第七章 諺と宗教

人と人との關係は、その最後に於て、人と神との關係に歸著す。されば前章に於て諺の道德的價值を論じたる主旨は、移して又本章にも適用し得べきなり。宗教に關する諺も、又彼に於けるが如く、薰蕕相交り善惡相混ぜり。吾人凡夫の眼は、時として私欲に掩はれて、宇宙の真相を曲視し誤解し、或は一時の感情に激して眼眩み、天を怨み神を罵り、嬌慢悖戾の惡語を放ちて、自ら快とすることなきにあらず。されど人世の善惡禍福、因果應報の理は、白日、十字街頭

を往くが如く明かならざるも、闇夜深林に宿る鴉を見るが如く、認め難きにあらず。冥々のうち、自ら照鑒のあるあり。之を以て怨嗟不平の聲も、日と共に收まり、偽なるもの、邪なるもの、漸く亡び、眞なるもの、正なるもの、長く存して世の信條となるは、一般の大勢なるを以て、諺の多數は神の世界にして、惡魔の世界にあらず、惡人の跳梁跋扈する闇黒界にあらずして、正人君子の談笑和樂する光明界なり。妖孽にして福を見るは、其の惡未だ熟せざるなり。貞祥にして禍を見るは、其の善未だ熟せざるなり。人を撃てば撃を得、怨を行へば怨を得、小惡を輕んじて、禍なしとする勿れ、小善を輕んじて、福なしとする勿れ、水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つ。善惡充滿して吉凶之に従ふ。たとひ凡夫盛んにして、一時神の崇を免るといへども、早晚天定まつて人に勝つの時あり。積不善の家には餘殃あり、正直の頭には神の宿るべきを説き、人世は只盲目なる機運の翻弄する所にあらずして、神の手に依りて攝理せらるべきを、教へす

んばあらず。

我國の諺は佛教に負ふ所頗る多し。宗教に關するものゝ大多數は、皆佛教に基く。古來神國を以て誇るといへども、神道に由來するものは、寥々として晨星の如し。記紀萬葉に見ゆるものは、片々たる拘忌、迷信の類にして、殆ど云ふに足らず。爾來陰陽道と混じ、本地垂跡の説行はるゝに至り、浮世は神國、世は禁厭（イミヤミ）神と佛とは水波のへだての語あり。「正直の頭に神宿る」の諺は、能く神道の極意を發揮し、世に所謂天照大神の託宣と稱する拙惡の文字に勝ること遠し。「王は十善、神は九善」の語は、我が國體を説きて、天皇の現つ御神にましまして、神徳も又讓る所あるをいふ。これ神を賤むにあらずして、王を尊ぶなり、十善天子の語は佛經に借りるといへども、神を九善とするは、我が島帝國の臣民にして始めて言ひ得べき也。

佛敎は「この世は假の世、命は風前の燈火、泡沫夢幻、夢の浮世」といふが如き、幾

多の無常觀を教へ、儒教は「天道人を殺さず、生身に餌食、命あれば食あり、天不生無祿之人、地不生無名草」、千疊萬疊只一疊、千石萬石一杯の飯、大厦千間、夜臥八尺、良田萬頃、日食二升。羅綺千箱、不過一暖、食前方丈、不過一飽等、知足安分の樂天觀を與へたり。而して快活なる我が國民の性情は、寧ろ彼に適せずして、是に親しめり。世人動もすれば、我が國民の現世主義にして、宗教に冷淡なるを誦る。されど行爲の善惡は、必ずしも未來の觀念を要せず、來世の應報に腐心せずとて、宗教心に乏しとはいふべからず、安心立命は既成宗教の專有物にあらざるなり。

されど、死生、神祇等の宗教的題目をとれる諺の、泰西諸國に比して、日本支那の貧少なることは、爭ふべからざる事實なり。これ生を先にして死を後にし、鬼神を説くを好まざりし儒教の影響に因るや、論を待たず。「上可陪玉皇大帝、下可陪悲田院乞兒」の如き宗教的佳諺も、有識の士は其の語を陋とせしにや、蘇

東坡が「上與王公並坐、下與乞丐同眠」と改め用ひてより、士人の常言となれり。

「鼻頭三尺有神明」の如き、虔敬の念篤きものなきにあらねど、こは稀有の例にして、多くは「時衰鬼弄人」、「有錢可使鬼」、「有錢買得鬼推磨」の類なり。東洋的達人の

死生觀は、「以利害爲塵垢、以死生爲晝夜」の語、極めて的確に之を説明す。此の如き思想は、老莊の哲學、禪宗の教義と相待つて、我が國上流人士の理想となり、幾多の神州高潔の民を作れり、西郷南洲が「名も金も命もいらぬといふ者ほど恐しきはなし」といへるも、又此の類の人士を指せるに他ならず。

いづくの諺にも見出さるゝものは、天は能く勤むる者に福すといふ思想にして、自ら頼まずして、神を頼むの理なきを説かざるはなし。神の慈悲は廣大無邊なるも、之を求むるの權利なき者には決して與へられざるなり。神は自ら助くる者を助け、(God helps those who help themselves. Eng.) 夙起勤勉の者を助け、(God helps the early riser. Sp.) 意氣剛健なる者を助け、(God helps the strongest.

(Ger., Dutch.) 舟子も力漕せざれば神助なく、(God helps the sailor but he must row.
(Ger.) 鳥獸各、その食を供せらるゝも、集中には落下せしめず、(God gives every bird
its food but does not thrust into its nest. Dan.) 天は無祿の民を生ぜずといへども、
牡丹餅はおのづから棚より落ちて、仰臥者の口中に飛び込まず、神の物を與ふ
るや、必ず其の人の手を以てす、(God reaches us good thing by our own hands. Eng.)
男子妄に神助を呼ぶ勿れ、孤劍奮闘、刀折れ力盡くるに至つて、靜かに天命を待
つべき也。英諺の「和風穩波には神われを守れ、狂風怒濤には我みづから我を
守らん」(God defend me from the still water, and I'll keep myself from the rough) のこ
へるは、血性男子の眞骨頭を發露し、豪快を極む。箸の倒れし程の事に世を果
敢み、神を怨む懦弱漢、須らく此の咒文を三拜九唱すべし。

「飲めや歌へや、一寸さきは闇」地獄の沙汰も金次第、盗人せぬは氏神ばかり」の
如き惡語の時に放たれざることなきにあらねど、結局最後の勝利は勤勉正直

に歸し、公明正大なる賞罰應報の早晚到來すべき信仰を有すること、古今東西其の軌を一にせり。是等の諺は最も尊重すべきものにして、世俗の風化に對する效力極めて顯著なり。例へば獨逸の *Gott ist ein Gläubiger, der keine bösen Schulden macht* (神の借金に不拂なし) の如き、神は現世において、はた未來において、神に歸すべきものを、其の手に收めずんば止まず、因果は時として針の尖を廻り、時として皿の縁を廻り、多少の遲速あるを免れざるも、遲牛も早牛も皆淀に至りて、止らすんばあらず。因果は必ずしも觀面ならざるも、其の來るや的確なり。英諺に曰く *Punishment is lame, but it comes* と、希臘の古諺又曰く *The mill of God grinds late, but grinds to powder* と。天道の推磨は、その廻ること遅々たりと雖も、粉碎し盡さざれば止まざる也。新希臘の *God delays but does not forget* (神は猶豫すれども、忘れたるにあらず) 和蘭の *God does not pay weekly but he pay at the end* (神は一週間毎にはせざれど、終に清算の時あり) 皆其の語を異

にして其の意を一にす。英の God comes with leaden feet, but strikes with iron hands 羅旬の The feet of the deities are shod with wool 共に天網恢々疎にして漏らさず、冥々の中鬼神の窺ふありて、責罰の終に免るべからざるを説く。古今の罪惡史を読む者、誰か此の諺の眞理たるを疑はむや。凡夫盛にして神崇なきも、驕る者終に久しからず、蟻は羽を得て死すること速かなり。(God gives wings to the ant that she may perish the sooner. Sp.)

一見平凡なるが如きものにして、深く之を味ふ時は、至妙の眞理を藏するものあり。例へば「鬼を談すれば鬼來る」(Talk of the devil, and he is sure to appear;—Talk of the devil, and his imps will appear;—Talk of the devil and he'll either send or come;—Dutch, Talk of the devil and you hear his bones rattle;—German, Paint the devil on the wall, and he will shew himself anon)の如き、一個の迷信として、輕々に看過し去るべからず。惡事に對する好奇心は、危險なる誘惑なり。吾人が耳聞

目暗せし罪惡は、往々自己の心中に萌起し來ることなきにあらず、罪惡の見聞を避け、不徳の智識を蓄へざるは、道德上安全の方法なり。

通俗にして教訓を含むものには、次の如きあり、曰く「鬼の來られぬ所へは、其の使者が來る」(Teufel nicht hin mag kommen, da send er seinen Boten hin)云。誘惑の來り侵さざる所なきを説いて、山野に退隱して、罪惡に遠ざかり得べしとするが如き輩の淺妄を破す。心中の敵は地の遠近を問はず、煩惱の絆は常に隨從して離れざるなり。又曰く「鬼の膳羞は半糝糠」(The devil's meal is half bran; or all bran)云。不義の富貴は浮雲の如し、而してそが一時の快樂も、又絶えず苦痛を離るゝ能はず、故に曰く「鬼と共に食ふ者は長箸を要す」(He had need of a long spoon that eats with devil;—Dannish, He needs a long spoon that would eat out of the same dish with the devil)云。世人往々惡魔を籠絡操縱して、己が用に供せむとし、却つて自ら之がために陥れらるゝを知らず、伊太利の諺にこれあり、鬼を

吞めば角をも吞む」(He that has swallowed the devil may swallow his horns;—He who has shipped the devil, must carry him over the water) ㊤。巧詐は拙誠に如かず、正直の頭に神在り、世人宜しく Better God than gold (金よりも神) God arms the harmless の二諺を銘記すべし。

道徳に關する諺の、古今東西相一致するもの鮮少なざると等しく、宗教を異にする國民の、天地神祇に對する所信にして符節を合すが如きもの、又少しとせず。羅甸の古諺なる「民の聲は神の聲」(Vox populi, vox Dei) は「正に「天に口なし、人を以て云はしむ」と相表裏するにあらずや。獨諺の Ein Mann, kein Mann は、人間の獨居孤處すべからずして、家族を作り、社會を作り、國家を作り、協力扶助すべき義務あるを教へたるものにして、即ち世は相持の意に他ならず。英諺の「赤面は徳の色」(Blushing is virtue's color) は、佛典の「慚愧は衆善の衣服」(天雲經) と何ぞ相類するの甚だしき。華嚴經に「牛水を飲めば乳となり、蛇水を飲めば

毒となる」といへるは、卽ち From the same flower the bee extracts honey and the wasp gall (伊太利)にあらずや、孔子は「己所不欲勿施於人」といひ、佛は「己の欲せざる所を他に勧めず」無字法門經」といひ、基督は「すべて人に爲られむと思ふことは、爾また人にもその如く爲よ」(馬太傳第七章)といふ。仁といひ、慈悲といひ、愛といふ、多少の逕庭なき能はずといへども、その大本に於て相一致す。愛の威徳を重んずるは、必ずしも耶蘇教國に限られず。羅馬の諺に Love rules without law;—Love rules his kingdom without a sword;—Love knows nothing of labour;—Love is master of all arts といへり。愛の行く所、法なく、劍なく、蕩々たり坦々たり。佛も亦愛の徳を稱して曰く、仁を履み、慈を行ひ、博く愛して衆を濟はば、十一の譽ありて、福常に身に隨ふ。臥して安く、覺めて安く、惡夢を見ず、天護り、人愛し、毒せず、兵せず、水に喪はず、火に喪はず、所在利を得、死して梵天に昇ると(法句經)。以て之が註脚に供ふべし。

西班牙の神は兩手にて打たず、(God does not smite with both hands)は「我が天道人を殺さず」にして、土耳其の Curses, like chickens, always come home to roost (呪詛は鶏の如く常に埒に歸る)ヤルウバの Fishes always fly back in the face of him that throws them (灰は撒く人の顔にかゝる)英の Harm watch harm catch (人を詛へば身を詛ふ)西班牙の Who sows thorns, let him not walk bare-foot (棘を植うる者は徒跣するを得ず等、いづれも詩篇の「かゝる人は詛ふことを好む、この故に詛おのれに到る」(第百九篇)と同一の信仰にして、我が「人を詛へば穴二つ」佛經の「天を仰いで唾すれば、唾天に至らずして、還りて己に従うて墮ち、風に逆うて塵を揚ぐれば、塵彼に至らずして、還りて己の身を全す」(四十二章經)といふと一致す。馬太傳の「爾兄弟の目にある物屑を視て、おのが目にある梁木を知らず」(第七章)は、所謂「人の一寸は見えて、わが一尺は見えぬ」類にして、「只掃自家門前雪、莫管他人瓦上霜」といへるに等し。其他「誰か荆棘より葡萄をとり、蒺藜より無花果を採

ることをせむ〔馬太傳第七章〕を以て、瓜の蔓に茄子はならぬに比し、屍のある處には鶯集まらむ〔同第二十四章〕を以て、臭いものに蠅たかるに比し、掩はれて露れざるものはなく、隠れて知られざるものはなし〔路加傳第十二章〕を以て、隠れたるより顯るゝはなしに比せば如何。此の類殆ど僕を更ふるも、數ふるに違なからむとす。

我が國の諺が、儒佛二教に胚胎すること多きが如く、泰西諸國のものは、聖書に負ふ所著大なり。英の *The way to heaven is by Weeping-Cross (Der Weg zum Himmel geht durch Kreuzdorn)*、*Every cross hath its inscription* の如き、共に能く福音書的道徳の精神を發揮して、遺憾なきに近し。必ずしも聖書に依據すといふにあらねど、其主意精神に於て相一致するもの又甚だ多し。獨諺に曰く、神の厭惡する所は、又人の厭惡する所なり、〔*Wenn Gott ein Ding verdrusst, so verdrust es auch bald die Menschen*〕²⁾。蓋し浮世の榮辱も亦神の褒貶する所と、終に一致す

べきをいふ也。神意に愜ふ者は榮え、神意に反く者は亡ぶ、神の厭ふ所は、人も亦之を棄てゝ顧みざるに至る。所謂「鹽もし其の味を失はざれば、何を以てか故の味に復さむ。後は用なし、外に棄てられて、人に踐まるゝのみ」(馬太傳第五章)。

基督曰く、神は一匹の雀をも忘れ給はず(路加傳第十三章)と。之と同一の眞理は、カタロニヤの諺 *No leaf moves, but God will it* (天意ならでは一葉も動かさず) 羅馬の *Every little blade of grass declareth the presence of God* (草の片葉カキバにも神の姿) に顯る。基督又曰く「呼ばるゝ者は多しといへども、選ばるゝ者は少し」(馬太傳第一十章)と。希臘の古諺にこれ有り *The thyrsus-bearers are many, but the bacchantis few* 神標を捧持する者は多きも、神酒を有する者は稀なり。こは兩者の間、何等の交渉もなき、偶然の一致にして、奇とするに足れり。

我が諺の儒佛に據る所多きは、既に屢、之をいへり。試みに一部の論語を取り來つてこれを檢せむか。その本來の諺たると、聖賢の創言たるとを問はず、

すべて教育ある社會には普く用ひられて諺と擇ぶ所なきが如し。その極めて普通なるものは、德不孤必有鄰。○三人行必有我師焉。○食不語。○匹夫不可奪志也。○朝聞道夕死可矣。○父母在不遠遊。○女子與小人爲難養。○溫故而知新。○不知爲不知是知也。○見義不爲無勇也。○歲寒然後知松柏之後凋也。○過則勿憚改。○無友不如己者。○割雞焉用牛刀。○殺身以爲仁。○駟不及舌。○過猶不及。○死生有命富貴在天。○四海之內皆兄弟也。

佛教の感化は、其の浸潤薰染する所、一層普遍にして、殆ど意料の外にあり。

泥中の蓮、佛の世に在るや、蓮花の泥中に生じて、更に泥の著せざるが如く、世に在りて世に著せられず。——雜阿含經といひ、身から出た鏽(惡)の心より生じて反て以て心を賊ふは、鐵の垢を生じて、其の形を消敗するが如し。——孝經といひ、父母の恩は山より高く、海より深し、慈父の恩高きこと山王の如く、慈母の恩

深きこと大海の如し。——心地觀經といひ、影の形に従ふ如し、善惡の報は影の形に従ふ如し。——涅槃經といふの類、沿く上下一般に行はれて、經文に依據するを知らず。「鼻を以て口とせよ」といふ諺の如き、單に口をして鼻の沈黙を守らしめよの意と解せらるゝも、又本づく所あり。法句譬喻經に曰く、佛、羅雲に告げたまはく、我又喻を説かむ。昔國王ありき。一の大象ありて、猛黠にして能く戰ふ、其の力勢を計るに、五百の小象に勝れり。其の王、軍を興し、逆國を伐たむと欲す、象に鐵鎧を被らしめ、象士これを御す、雙矛戟を以て、象の兩牙に繋ぎ、また二劍を以て兩耳に繋ぎ、曲刃刀を以て象の四脚に繋ぎ、また鐵槌を以て象の尾に著く、象に九兵を被らしむ。唯、象、鼻を藏して護りて、鬪に用ひず。象士、象の身命を護ることを知るを喜ぶ、所以は何ぞ、象の鼻は軟かにして、箭に中れば即ち死す、是を以て鼻を出して鬪はざるのみ。象鬪殊に久しうして、鼻を出して劍を求む、象士與へず。此の猛象、身命を惜まず、鼻を出して劍を求め、鼻

頭は著けむと欲すといへども、王及び群臣此の大象を惜しみ闘ひ得しめず。佛、羅雲に告げたまはく、人、九惡を犯すも、惟當に口を護ること、此の大象の鼻を護りて、鬨はざるが如くすべし。然る所以は、箭に中りて死せむことを畏るればなり、人も亦是の如し。所以に口を護りて、當に三途地獄の苦痛を畏るべし、十惡盡く犯して、口を護らざる者は、此の大象の身命を喪ふことを計らず、鼻を出して鬨ふが如きの^ミ。群盲象を評するの譬喩も、又涅槃經中に見ゆ。僧侶の道を俗衆に説くや、經文中の比喩格言を俗譯して、俚耳に入り易からしむ。是我が邦諺に、佛教起源のもの殊に多き所以にして、後には用ふる者も聽く者も、共にその經典中のものなるを忘るゝに至れり。ルウテルの如きも、巧に諺を應用して、説教の具となし、聽衆の記憶に資せり。或人、ルウテルの著十六冊を檢せしに、其中三千の俚諺を含みたりきといふ。我が平田篤胤の講本、石田鳩翁の道話等を讀む者も、亦多數の俗諺をその中に發見すべし。すべて俚語

格言の類は、屢之を用ふる時は、往々朴實なる聽衆をして、唯其の語をのみ記憶して、何の用に供せられたるかの大主意を、忘却せしむるの弊なきにあらねど、適處に適用する時は、その感動を深くし記憶を助くるの利頗る大なり。例へば愚俗の迷信を破するに、「正法に奇特なし」の語を以てし、吉凶禍福の循環交替して、妄に絶望すべからざるを教ふるに、「棄つる神あれば拾ふ神ある」を以てし、善事の躬行を督勵するに、「思ひ立つたが吉日」といふを以てするが如き、その簡潔直截、娓娓々數千言に勝るものあるにあらずや。王陽明が「山中の敵を破るは易く、心中の敵を破るは難し」といひ、釋迦が「能く心を伏する者を、最も多力となす」(五苦章句經)といひ、「No man has a worse friend than he brings with him from home」又は *Deliver me from the evil man, from myself* といふ、いづれも「心こそ心迷はす心にして、心の師となるも、心を師とすべからざるの理を説いて、甚深奧妙、寸鐵、人の肺腑を刺して、慄然たらしむるものにあらずや。

諺
の
研
究
終

附

錄

北條氏直時代諺留

俚言集覽を使用する人は、所々に北條氏直時代諺留として引用せるを發見するであらう。私は諺語辭典の編纂に當り、この原本を見たいと思ひ、種々搜索の末やうやく東京大學の圖書館で見つけた。總紙數六枚半紙の寫本で、卷首に淺草文庫と和學講談所との印がある。

先年の大震災でこの書も焼失したらうと思ふから、寫して置いたものをそのまゝ茲に掲げる。多賀常政は幕士の蒐書家で、蜀山人の一語一言にもその書目が見える、再寫した人名の原の字は少しくよみにくい、厚のやうにも見えるので疑を存する。

北條氏直ノ時分ノ諺思合する事ども多キ故ニ書留之

火と下人は身ニそふかたき

二ツ子をなすとも女ニ心ゆるすな

女の言きくべからず

下々を士に取立ぬもの也

明ル室ニハゆくべし暮るゝそらニハ行べからず

夜みち川だちばかりがする

とをきは花のか

したしき中に禮有り

人のなさけは身のあだ人のつらきは身の寶

すく道よりやぶる

したしき中はとをくなる

物いはじ父はながらの橋柱

おごる物久しからず

慾にはいたゞきなし

勝てかぶとの緒をしめよ

かてばまくる

人どちぎらばよく見てかたれ

うちわくづし（内部より事を破ること）

ひいきだをし

三つ子に習てあさき瀬をわたる

正直は一旦ノゑこニあらざれども終に日月のあはれみをかふむる

食はひつじのをとさるのかしらをせよ（午後四時頃に食事せよの意か）

いらんはみれんのさう（違亂は未練の相）

かんにんは万寶にかへがたし

さしあたる身の事ばかり思へたゞしらぬ行末かへらぬむかし
かくす事はせぬがよひ

上なみそ

身のほどをしれ

うはさいへばぬしくる

あくのうらはぜん

鷺はたちてのあとにごさぬ

かきにみゝ有り

今日は人の身の上あすはわが身の上

しらぬ人の行末（知れぬは人の行末の意）

人を思ふは身を思ふ人をにくむは身をにくむ

能ある鷹は爪かくす

慾のくまたか爪をさく

かわゆき子には旅させよ

おやはまぶりの神

一心万寶

万能一心

三尺さつて師の影をふます

寶は身のあだ

物ほしがれば人きらふ

我身つめつて人のいたさをしれ

ぜんあくは友による

氏よりそだち

ちりつもつて山となる

せつない時の神だのみ

慈悲のふち（ふちは扶持なるべし）

身にまさる實なし

人はかげが大事

人はみめよりたゞこゝろ

さいくはりうくしあげをみよ

馬に騎てみよ人にそふてみよ

好事もなさにはしかず

花多ければ實少なし

やくに立ずの門たち

たくらだねこのとなりありき（のら猫の隣歩行にて前條と同意）

かふばりつよふて家たをす（かふばりは支柱、ひいきの引倒しと同じ）

りもこふすれば非の一ぱい

はやかろふわるかるふおそかるふよかるふやすかるふわるかるふたか
かるふよかるふ

豈文おしみの百ぞん

やす物の錢うしない

くせある馬にのり有り

にがひしやくにもとりゑ有(苦瓠にも用ふべき所あり)

いそげばまわる

かゑるのぐわんだて(蛙の立願)

長者の万燈より貧女の一燈

長者のはぎにみそをぬる(あり餘る所に更に物を添ふる喩)

釋迦に心經

聞にくき物世になし者の先祖ばなし

さまくぐりのぶへんばなし（戦陣を逃走する臆病者の武勇談）

町人の武士ばなし

法師のいくさばなし

しらぬ京物がたり

夫あればおやわする

きりんも老ぬればどばにおどる

年よれば犬もあなどる

むかしのつるぎ今のな刀

正宗もやき落ればくぎのあた

ふる札と年寄親は置所がなひ（古札は神佛の御符）

中流に舟を失へば一瓢も千金

長居する鷺引目に逢ふ（引目は暮目の矢をいふ）

ふろと客とはたつたがよひ（客と白鷺は立つたが見事と同意）

用ある時の地藏顔川なき時のゑんま顔

とまり旅人朝旅人

樂するわるかるふ苦をするよかるふ

夜長ければ夢みる

知らぬ神にたゝりなし

朱にまじわれば赤くなる

水清ふして魚すまず

窮鼠反て猫をかむ

能なしの口たゝき

物いわすのはや細工

身しらすの口たゞき

かせぐにびんぼふおひつかず

恩知らずはこじきのさう

おんほうじは出世のさう（恩を報ずる者は榮ゆべし）

うしろぐらければしりもちつく

うしろぐらひは鬼のゑじき

右北條氏直朝臣の比申はやりたる諺の一帖は元本物茂卿先生の父蓬庵主人自筆のよしにて甚々古雅の一冊也今不斗而堀口氏率貞の藏本を見る事を得たりよつて是を乞需てその文を本の儘に寫しぬしかはあれどかの元本古雅の墨痕は予が秃筆に不吐事共也無念なる次第と云へどもさらにせんかたなし

安永二癸巳首夏廿六日

右古諺の記は多賀翁之藏本を以て寫之畢

寛政二年四月廿四日

多賀氏常政誌之

藤原(?)誌

毛吹草と世話盡

江戸時代に最も早く諺を蒐集したものは毛吹草で、之に次いで世話盡がある。毛吹草は貞徳門の俳人松江重頼の選で、その第二卷に世話付古語として類集別に七百五章を收め、世話盡は土佐の僧皆虚の編で、同じく第二卷に曳言之話と題して、いろは別に七百七十三章を載せてある。前者は正保二年、後者は明暦二年の開版で相距ること十年である。かく年代が接近してゐるから八九分は同一の諺でありさうに考へられるが、實際はそれ程でもなく、また同源と思はれる諺にも言ひまはしの差異の見えるは、後者が多少前者に漏れたものをと心懸けた點もあらうが、京都と四國との土地の懸隔に基くものであらう。是等の諺は今日では既に世人に忘却されて全く滅亡に歸したのも多く、また時勢の變遷でその意味の會得しがたきものも無いでは無い。さや

うなものには簡単な解説を添加する事とした。とにかく此の二書によつてほと足利末から元祿頃までに、いかやうな諺が行はれたかを知ることの出来るのはおもしろい。俚諺蒐集の先鞭が貞門の人々によつて著けられたのは、いはゆる俳言即俗語に注目したからである。

毛吹草の方は殆ど假名がきであるから、適宜に漢字を配合し、世話靈の方は漢字交りだから、すべて原本のまゝにしておいた。

毛 吹 草

世話付古語

思ひ内にあれば色外にあらはるゝ（孟子、思有_二於_一内、必形_二於_一外。）
思ふこと寢言にいふ

遠きは花の香か（遠く見ればゆかしく近づけば有難からず）

思ふ中には垣をせよ

墨に近づけば黒し（傳玄太子箴、近朱者赤、近墨者黒。）

朱にまじはれば赤くなる

大海は塵をえらばず（史記李斯傳、太山不レ護二土壤一、故能成二

其大、河海不レ擇二細流一、故能成二其深一。）

名人は人を譏らず（戰國策燕王喜篇、厚者不レ毀レ人以自益二也、仁者不レ危レ人以要レ名也。）
上を學ぶ下

流を汲みて源をしる（摩訶止觀、挹レ流二源一、聞レ香二計レ根。）

慈悲は上よりくだる（荀子、治生ニ乎君子、而亂生ニ乎小人。）

わざはひは下から起る

太きには吞まれよ

長きには卷かれよ

知りて知らざれ

大名は大耳（漢諺、不癡不聾、不作家翁）

都は目はづかし

田舎は口はづかし

神は宜禰がならはし

鰯のかしらも信じから

こぼれざいはひ

けがの高名

子は三界のくびかせ

思ふ人はほだしとなる

負ふ子よりいだく子

せなかに腹をかへぬ

威勢あらそひ

職がたき（素書、同美相如、同業相仇。）

勝ちて兜の緒をしめよ

焼鳥にも綜緒をつけよ（用心は十二分にすべし）

あつ火子に拂ふ（耳談續纂、膚髑之敷、吾先兒後。）

子をすつれども身をすつる藪なし

餓鬼も人数（にんじゅう）

枯木も山のかざり

腐りても鯛

ちぎれても錦

世はもどしのび

親（おや）は泣きより

郷にゐては郷にしたがへ

門に入らば笠をぬげ

今参り廿日

なかうど宵のほど

三寸の見直し（初見の精確ならぬをいふ）

百貫の馬にもたり（たりに馬脚の屈重する病僻にて、駿馬にも疵ありとの意）

つくり大言（たいげん）

馬鹿慇懃

たからは身のさしあはせ

藝は身を助くる

三寶ももてなしから

賣物には花をかざれ

善はいそげ

悪はのべよ

光陰矢のごとし

嫁がしうどになる

ことば多きはしな少なし

云はぬは云ふにまさる

尻もむすばぬ絲

籠にて水を汲む

ぬす人を見て縄をなふ

愚人夏の蟲（自ら求めて死地に陥る）

石をいだきて淵に入る

呑みもきらす嚙みもきらす

歌にばかり歌ふてゐる（心にのみ思ひ望みて實行し得ぬ意）

養由に弓をいふ

佛の前の經をいふ

支證のだし後れ

にからの山に入りながら空しく歸る（正法念經、汝得人身不修道、如入寶山空手歸也）

鬼に金棒

駈け馬に鞭

短氣は損氣

弱馬道をいそぐ

氏よりそだち

人形にも衣裳

たつ鳥あどを濁さぬ

鼠とる猫は爪をかくす

鰯の頭かしらをせんより鰯の尾につけ

石臼きらんより茶臼ききれ

鱧はじも一期ご蝦も一期ご（貴賤賢愚共に同じ一生なりとの意）

長者二代なし

氷をちりばめ

水にゑがくごとし

しんきむしろをさらす（心氣腹痛にて醫家の諺か）

ふくびやうたゝみにあがらす

貧のぬすみ

戀のうた

富婁那の辯舌

舍利弗の智慧

菩薩みがいればうつぶく（菩薩は米をいふ）

人間みがいればあをのく

念力は岩を透す

悪につよければ善にもつよし

竹の子親まさり

鳶も鷹うむ

いちばこうにたつ（解しがたし）

聲なうて人を呼ぶ

都も旅は憂し

地獄もすみか

奥きかんより口をさけ

一をもちて万を知れ

生ゆる山は山口から見ゆる

貴き寺は門から見ゆる

はしに虹梁（はしは箸にて、小六の懸隔甚しき意か）

提燈に釣鐘

女夫はいとこほご似る

鬼のにうべうに鬼神がなる（にうべうは女房）

佛つくりてまなこを入れず

七日の説法も無になす

炮烙千に槌一つ

千日に刈る萱も一時にほろぼす

神佛は水波のへだて

謠ふも舞ふも法の聲

京に田舎あり

田舎に京あり

龍馬もつまづき

猿も木から落つる

たゝぬも矢聲

睡るも奉公(なまけ者の言草)

こゝろざしは木の葉につゝむ(恒言録、千里寄三鷺毛、物輕人意重。)

長者の萬燈貧女の一燈

大海の一滴

九牛が一毛

人のうへ見てわが身を思へ

わが身をつんで人の痛さを知れ

あなたを祝へばこなたの恨み

蠅腹たてば頼よろこぶ(つぐみを捕ふるにけらを餌とするよりいふ)

毒の試み

地獄のうへの一足飛び

碁勢弓力(せいのみちから)

性は道によりてかしこし

泣く子も目をみる

色を見て灰汁(ひく)をさせ(梁色に灰汁を加ふるよりいふ)

寺から里

伯父が甥の草を刈る

居ずば出合へ(人の居らざるを見て出合へノと呼ぶ)

いさかひはてゝの棒乳切木

論語よみの論語しらす

陰陽師身の上しらす

かぎの穴から天をのぞく

大海を手で堰くごとし

水はさかさまに流れず

下として上をはからふ事なかれ

針を棒にとりなす

鋸屑のこ屑もいへばいふ(鋸屑の如き無用の物も無用にあらずとの理窟をつけ得べしとの意)

箕賣笠にてひる

紺搔かき白袴をきる

鬼も十八

夜日遠日笠のうち

落武者薄の穂におづる

黒犬にくはれて灰汁のたれかすにおづる

形はうめごも心はうます

親の心子しらす

われ鍋にとち蓋

牛は牛づれ馬は馬づれ

昔の因果は皿のはたまはる

今の因果は針のさきまはる（應報に古今の遅速あるをいふ）

淵に雨

袴のまちに雑魚たまる（豫期せざる幸運）

杓子定木

杵に弦（杵子定本と同意）

生まれぬさきのむつき定め

山見えぬ坂いふ

一も取らず二も取らず

ばひあふものは中から取る（鵜蚌の争は漁夫の利となる）

手が入れば足も入る

一寸のふれば尋のふる

理の極じたるは非の一倍

思ふ中に公事さするな

故郷忘じがたし

歸るには錦きてゆく

烏鵲につかふごとし

狐馬にのせたるごとし

闇の夜の錦（史記、富貴不レ歸、故郷、如衣、繡夜行、誰知レ之者。）

隣のたからを數ふるがごとし

支證なきてがら

椽のしたの舞

井のうちのかへる大海をしらす

百様は知る共一様を爭ふことなかれ

虎の尾をふむごとし（書經、心之憂危、若_レ踏_ニ虎尾_ニ涉_ハ于春氷_上）

龍の鬚をなづるごとし

虎ふす野べにつれ

鯨よる浦にゆく

馬には乗りてみよ

人には添ふてみよ

犬の尾をくふてまはる(いかにするも成效しがたき喻)

雀百までをどり忘れぬ

鳥のつばさ

車のりやうわ

舟のさきやり

長範があてのみ

かへるは口から吞まるゝ

舌三寸のさへづりに五尺の身をはたす

顔に似ぬ心

鬼神にわうだうなし

花に三春の約あり

廿五の菩薩もそれ／＼の役

なげきの中のよろこび

王將も歩のもの（將柴にたとへていふ）

逢ふはわかれ

たのしびはかなしびのもどろ

強き木はむす折れ

柳は風にしなふ

木に竹をつぐごとし

油に水のまじるごとし

老のさいはひ

命は法のたから

事かな笛ふかん（事あれかし、われ笛吹きて囃したてん）

抜け鞆もたん(喧嘩口論の尻押し)

とても濡れたる袖

毒くはゞ皿ねぶれ

合せものは離れもの

ゆるぐ杭はぬくる

孫は笛ふく(子孫は父祖の才能を受け傳ふ)

狐の子はつらじろ

にんにくむきたるごとし

夜のあけたるごとし

町には事なかれ

こつじきも世界よかれ

一疋くるへば千疋の馬もくるふ

狂人はすれば不狂人もはしる

身からだしたる錯

後悔さきにたゝす

はじめのさゝやきはのちのごよみ（小事より大事となる）

下司の智慧はあとにつく

稽古に神變じんべんあり（何事も熱心に習熟すれば妙境に至る）

すかばこゝろえよ

下手の大づれ

めくら蛇に怖ぢず

いとをしき子に旅させよ

憎きものは生けてみよ

多勢に無勢

雉と鷹

才覺の花ちり

智慧の鑑もくもる

十七八はやぶちから（此年頃精力強盛なるをいふ）

達者おもむきを嫌はず（文選、達人大觀兮、無物不可。）

打てば響く

あたれば碎く

世は七さがり七あがり

身をすてゝこそ浮ぶ瀬もあれ

雀の千こゑ鶴の一こゑ

大は小をかなゆる

ゑの子道しる

もこのめに仲人なし

男の心と川の瀬は一夜にかはる

七の子はなすとも女に心ゆるすな

釋迦に提婆

美女は悪女のかたき(漢語、美女入市、悪女之仇。)

いつも正月

月夜に米のいひ

弓をれ矢つくる

神の綱も佛の綱もきれはつる

立ちよらば大木のかげ

鳥雀枝の深きにあつまる(杜詩、鳥雀聚枝深。)

きのふはけふの昔

けふは人の身のうへあすはわが身のうへ

小智は菩提のさまたげ

生兵法大疵のもどろ

人の事は目にみゆる

わが身の事は人に問へ

三人よれば人中

十人よれば十國のもの

世のとりさたも七十五日

御所内裏の事も陰ではいふ

七重の膝を八重にをる

小股とられてでも勝つがほん（方法はともかく勝ちたるがよし）

舅の酒で相聲もてなす

逃ぐる魚をゑびすに参らする

預り物は半分の主

殿の馬も借れば三日

蟻の塔をくむがごとし

鶴の粟を拾ふごとし

わが物故に骨を折る

布施なき經に袈裟をおとす

猫に乾鮭

雀にまり（猫に小判と同意）

秋なすび嫁にくはすな

嫁姑の中よきはもつけの不思議

つれがな三里まはるむ (Cheerful company shorten the miles—Ger.)

縁につるれは唐たうのものをくふ（縁につるれば唐土の物をくふともいふ、唐土は遠々の訛なりとする説あり）

下司も三食じき上臈も三食

恩の死しにはせねなきけ情の死しにはする

ようないものにほんなし（用ない者に書なしの意なるべし）

下戸とばけものはなし

阿波にふく風は讃岐にもふく

うら違ちがへば七うら違ちがふ（一浦の盛衰は他に及ぶ意か）

夜打よるつつぶて

ぬす人の晝眠もあてがある

長くはつげ

短くは切れ

頬を顔（名異なれども實同じ）

田をゆくも畦ゆくも同じ道

間ふにつらさのまさる

陰陽師と辻風にあはぬが秘密

石に腰かけたるごとし

石のうへにも三年ゐればあたゝまる

紺屋のあさて

御所のおなりはすはくはんじ半時

おとゞいは他人のはじまり

かなしき時は身ひとつ

一里一はね(二本、千里一はね)

一夜検校

姑の場ふさがり(二本、外題學問とあり、風教上の遠慮にて後に代へしものか)

年寄親と持佛堂置所なし（二本、書半學とあり）

人のそらごとはわがそらごと

七度たづねて人うたがへ

下手の長談義

歌物語の歌わすれ

ひろき家は鞘なり

蟹は甲ににせて穴をほる

のり出したる舟

けんにようきれてむねしはらす（意義不明）

二八月に思ふ子船に乗するな（陰曆二月八月は暴風多し）

かくるも引くもをりによる

ありての厭ひ無うての偲び

犬忍のこにもなじめば思ふ

似たものは鳥

瓜を二つに割りたるごとし

果報は寢てまで

天道人を殺さず

しゝの角を蜂のさしたるごとし（普燈錄、蛙面水、鹿角蜂。）

かへるのつらに水かけたるごとし（一本、水かくるごとし）

わらづとに黄金

家は弱かれ主ぬしは強かれ

にくまれ子世にいづる

やせ子にもかゝる

男のひかりは七ひかり

狐虎の威をかる

炒豆のすまじろひ (大豆を炒りてあたゝかなる時酢をかくれば、酢むつかりとてにがみてよく挟まるゝものなりとの話、宇治拾遺に見ゆ)

雁が飛べば石龜もぢだんだ

焼石に水かくるごとし

鹽にて淵をうづむごとし

長者富にあかす

慾にいたゞきなし

寢耳に水のいるごとし

足もどから鳥のたつごとし

いそがばまはれ

早牛も淀遅牛も淀

判官びいき

弱き家に強きかうばり（かうばりは支柱）

門前に市をなす（漢書鄭崇傳、臣門如市、臣心如水。）

長者のかどに非人たえず

じやの道はへびが知る

世のとりきたはにんにいはせよ（にんは人々の意）

老いて二たびちごになる

負ふた子に教へられて淺瀬をわたる

寵愛高じて尼になす

たばふものを蟻がくふ（大切にせし物を損失する喻）

主と病には勝たれず

述懐奉公みをもたず（不平不満をいひながら主人に仕ふるを述懐奉公といふ）

藪に馬齒をいふ（行ひがたき無理なる注文に喻ふ）

横紙さくごとし

網なうて淵な臨みそ（漢書、臨淵而羨魚、不_レ如_二退而結_一網、臨_レ席義_レ智、不_レ如_二退而讀_一書。）

品玉どるにも種がなければならず

しらぬ小歌をうたふ

ひだり扇をつかふ

犬のまへの炊米（犬は炊米を好み食ふ）

ぬす人に鍵あづくる

人はぬす人火は焼亡（焼亡は火事）

ぬす人の取残しはあれど火の取残しはなし

大もつははつりごり

かた屋貸して母屋とらるゝ

人の踊るときは踊れ

順の拳にもはづるな（仲間はずれはせぬがよし）

比丘尼のかぎあつらゆるごとし

山の神におこせ見するごとし（山の神はおこせを好むといふ）

とりつき蟲のごとし

まけ相撲の小股とるごとし

外法ひほうのくだり坂

くさり縄杖につくごとし

あまり寒さに風を入れる

仇は恩にて報する

命は食しごにあり（管子、命屬めいぞく于食、治屬ちぞく于事。）

くすしは人を殺せど薬人を殺さず

瓢箪から駒もいす

櫟^{いば}子より深きこともなし（ちやつは木皿）

絲瓜の皮とも思はず

すつべの皮とも思はず

智恵ない神に智恵つくる

隣きびしくしてたからまうける

穂をひろふてめうにまゐらも（穂を拾うて妙にまゐらすか、日蓮宗にて梵妻を妙といふ）
一本縁者の證據にかへたり

湯をわかつて水になす（一本、同じ穴の狐とせり）

見るに目慾

さけるに煩惱

やとひごにどがなし

兩をきゝて下知をなせ

上戸の額^{いしご}（熱きことの譬）

盆の前（孟蘭盆前にて前條と同意）

おとどひの契約

魚と水（三國志、孤之有孔明、猶魚之有水也。）

ところ習ひ

國郷談（郷談は方言）

一寸さきは闇

三日さき知れば長者

世間ははりもの

月夜に提燈も外聞

夜叉がよめいり

鹿島だち

爪に火をともし

けしを千にわるごとし

人くらひ馬にもあひくち

鬼の目にも涙

敵の助言にもよくばつけ

毒藥變じて藥となる

四百四びやうより貧のくるしみ

年問はんより世を問へ(年齢の多少より處世の良否が問題なり)

ぬかぬ太刀の高名

思案の案の字が百貫する

狼にころもきせたるごとし

綿にて首をしむるごとし

薄氷を踏むごとし(詩經、戰々兢々、如_レ臨_二深淵、如_レ履_二薄氷_一)

川のはたに子を置くごとし

下戸は上戸の被官

弱きものを夫ヤにとる（弱肉強食）

皿に桃もる（おちつかぬ噺）

小舟に荷のすぎたるごとし

唐土の虎は毛を惜しむ

日本の武士は名を惜しむ

知らぬが佛

見ぬが心にくし

あとの祭

佛もなき堂へまゐる

鶺鴒の目鷹の目

天狗のやどり

百日に百はいはもれど一日にはもられず

六十年はくらせど六十日をくらしかぬる

重荷にこづけ

慾のくまたか股さくる

學の前に書來たる

笑ふところへ福來たる

ぬす人たけぐし

ぬす人といへば手さしだす(盗人といはれて反抗すること)

雁は八百矢は三文(得る所多く失ふ所少きをいふ)

黄金刀も乞ふてみよ

くさづくに國かたぶく(賄賂は國を亡す)

麥飯りやうはんにて鯉りを釣る

地が傾きて舞がまはれぬ

座がらに經がよまれぬ

夢にとみ見る（虚生が邯鄲の夢）

わらんべに花もたせるごとし

惡事身にとまる

因果は車の輪のごとし

踏むところがくぼむ

低きところに水たまる

相手のもたする心

茶碗をなげば綿でかゝへよ（柔を以て剛を制せよ）

はじめきらめき奈良刀

やすきものは錢失ひ

妻いとしの子いとし

坊主がにくければ袈裟までにくし

地獄にも知る人

門脇かきわの姥うばにも用あり

旅は道づれ世はなさけ

遠き親子より近き隣（明心寶鑑、遠水難救、近火、遠親不如此近隣）

だますに手なし

ぬす人のひまはあれどまぼりてのひまなし（まぼりては番人）

おい木にも花さく

百になる姥もかうでは果てじ（枯木にも花咲せん希望あり）

肩衣を夜のもの（不自由不足勝なる喻）

かゆきどころへ手の届かざることし

木を木かねをかね

石で手つめたるごとし

馬に乗るまでは牛に乗れ

佛になるも沙彌を経る（物には順序あり）

お乳の人乳のあがりたるごとし

目くらの杖を失ふごとし

網の目に風たまる

あげ舟にものを問へ（意義未詳）

浅みに鯉

やぶに剛がのもの

男は氣でしたもの

心ほどの世をへる

仲人そらごと(漢諺、無レ誠不レ成媒。)

推おしより行い (才智より力行)

佛のまねはすれど長者のまねはならぬ

ある袖はふれどない袖はふられず (韓非子、長袖善舞、多錢善買。)

人間萬事塞翁が馬

災も幸のはしとなる

塵つもりて山となる

いさご重おもじて岩となる

龍鳥雲を戀ふ (諸曲檀風、龍鳥は雲を戀ひ歸雁は友をしのぶ心)

歸雁友をしのぶ

良藥口くちににがし (家語、良藥苦ニ於口、而利ニ於病、忠言逆ニ於耳、而利ニ於行。)

忠言耳にさかふ

天人の五衰

人間の八苦

天にあらば比翼の鳥（長恨歌、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝。）
地にあらば連理の枝

梅檀は二葉よりかうばし

じやは一寸より大かいを知る（大かいは大海か大概か）

笑みのうちの刀（白氏新樂府、笑中有刀潛殺人。）

綿に針をつゝむ心

花は根にかへる

鳥は古巢にかへる

天知る地しるわれ知る人しる

雖は囊を透す（史記、夫賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見。）

よるこびの眉をひらく

けだもの雲に吼ゆる（事文類聚、淮南王安臨仙去、塗藥在鼎中、錐犬舐之、
並得飛昇、故鷄鳴雲中、犬吠天上。）

時にあへば鼠も虎になる（漢書、用之則爲虎、不用爲鼠。）

いちもつの鷹も放さねば捕らず

玉磨かざればひかりなし

瓦も磨けば玉となる

心の師とはなれ（大般涅槃經、願作心師、不師於心。）

心を師とせざれ

泥のうちのはちす（四十二章經、吾爲沙門、居于濁世、當如蓮華、不爲泥所汚。）

市のなかの隠者（文選、小隱隱陵藪、大隱隱朝市。）

好事門をいでず（北夢瑣言、好事不出門、惡事傳千里。）

惡事千里をはしる

花のもとの半日の客

月のまへの一夜の友

やせ馬鞭をおどろかす（鹽鐵論、瘦馬不_レ畏_二鞭箠、弊民不_レ畏_二刑法。）

たゝかふ雀人をおそれず（太平記四、窮鼠却_レ嚙_レ猫、鬪雀不_レ恐_レ人。）

鴨さむうしてみづに入り

鶏さむうして木にのぼる（老學庵筆記、淮南諺曰、鷄寒上_レ樹、鴨寒下_レ水。）

藍よりいでて藍より青し（荀子、青取_二之於藍、而青_レ於藍、冰水爲_レ之、而寒_レ於_レ水。）

氷は水よりいでて水よりさむし

太を活けて小の蟲を殺す

葉を缺いて根を絶つな

親子は一世師は三世

夫婦は二世のちぎり

賢人は二君につかへず（説苑、忠臣不レ事二君、貞女不レ更二夫。）

貞女兩夫にまみえず

虎うそぶけば風噪ぐ（淮南子、虎嘯而谷風至、龍舉而景雲屬。）

龍吟すれば雲興る

一字千金（童子教、一字當千金、二點助他生。）

問ふは一旦の恥問はぬは末代の恥

馬を鹿

鳥を鷺

老いたるを父母（ルイ）

若きを子弟

文殊の智恵

榮特が愚痴

日に三たび身をかへりみよ（論語、吾日三省吾身。）

鷹はかしこけれども鳥にわらはるゝ

ふる川に水たえぬ

積善シキザンの家に餘慶あり（易文言、積善家必有餘慶、積不善之家必有餘殃。）

十分はこぼるゝ

月みてれば缺く（史記蔡澤傳、日中則移、月滿則虧、物盛則衰。）

問ふに落ちぬは語るに落つる

心うちに動きてはことば外にあらはす

人いたりて賢ければ友なし（家語、水至清則無魚、人至察則無徒。）

水いたりて清ければ魚すまず

古きをたづねて新しきを知る（論語、溫故而知新、可爲師矣。）

歌人はゐながら名所を知る

信は莊嚴より起る

佛も金色に御衣をあらたむ

越鳥南枝に巢くふ（文選、胡馬依_ニ北風、越鳥巢_ニ南枝。）

胡馬北風にいばふ

富みては驕る（論語、貧而無_レ諂、富而無_レ驕。）

貧しきは諂ふ

駒に角はゆるまで（史記注、烏頭白馬生_レ角、乃許耳。）

烏のかしらは白くなるまで

紅は園生_{（このふ）}にかくれなし

櫻は花にあらはるゝ

馬の耳に風（東坡詩、説向_ニ市朝公子、何殊_ニ馬耳東風。）

牛のまへに調ふる琴（野客叢書、對レ牛彈レ琴。）

しゝはさださだはしゝねらふ（摩訶薩埵王子山に遊び、餓虎の其子を食はんとするを見て大慈
悲心を起し、身をすてゝ虎の餌食となりし話を誤り傳へしにや）

鹿をおふ獵師は山を見すといふ（淮南子、逐レ獸者、目不レ見レ太山。）
病む目より見る目

子故の闇に迷ふ

部屋住三年は山伏の峯入

川中に立てど人中には立たれず

譽れあらんより譏りなかれ

樂みあらんより愁へなかれ

天子に父母なし（源平盛衰記四、延喜の聖主の天子無レ父母とて
寛平法皇の仰せをそむかせ給ひけるを）

聖人に夢なし（大惠語錄、聖人無レ夢。）

和歌に師匠なし（詠歌大概、和歌に師匠なし、たゞ古歌を以て師とす）

人は一代名は末代

侍と金は朽ちて朽ちせぬ

鷹は死ぬれど穂をつまぬ

美目^{みめ}は果報のもどる

女は氏なうて玉の興にのる

歌人は貴からずして高位に交る

仁者憂へず（論語、智者不惑、仁者不憂、勇者不懼。）

智者は惑はす

勇者は懼れす

落花枝にかへらず（五燈會元、落花難上枝、破鏡不重照。）

破鏡二たび照らさず

綸言汗のごとし（漢書劉向傳、號令如汗、汗出而不反者也。）

善惡は友による

麻につるゝ蓬（荀子、蓬生ニ麻中ニ不レ扶而直。）

水は方圓の器にしたがふ（實語教、水隨ニ方圓器、人依ニ善惡友。）
見るをみまね

習はんより馴れよ

手功より目功

寺のほとりの章は習はぬ經をよむ

鄭家の奴は詩をうたふ（鄭家は後漢の大儒鄭玄をいふ）

勸學院の雀は蒙求を囀る

水鳥陸にまどふ

魚の木にのぼるごとし

砂路ありくごとし

渴にのぞみて俄に井をほる（説苑、猶渴而穿井、臨難而後鑄兵。）

飢にのぞみて苗を植ふることし

日くれて道をいそぐ

いひがち高名

一揆のよりあひ

船頭がおほうて船が山へのぼる

さゝやき八町

人事いはゞ薙しけ

まなこは天を走る

やせ子にはすね

痛いうへの針

ぬす人におひうつ

一寸の蟲に五分の魂

山椒は小粒なれどもからし

あなづり葛かづらに倒れすな

老のくりこと

ゑひてはくだまく

百姓の去年こぞものがたり

落花狼藉

花見て枝をたをる

ちこ殺すごとし

直木なほにまがる枝 (Straight trees have crooked roots.)

公の私

玉に疵

橡ほどの涙

粟つぼほどのできもの

尺八ほどのよだれ

かまど將軍

烏なき里の蝙蝠

わが門かどでほえぬ犬なし

三界に垣なし

六道にほとりなし

女に家なし

壁に耳

垣に目口

岩も物いふ

君は舟臣は水（荷子、君者舟也、庶人者水也、水則載舟、水則覆舟。）

いぼあひもち（鵲蚌相持の訛）

下司ない上臈はならず

たのむ木のもとに雨ふる（一本、雨もる）

飼ひかふ虫に手をくはるゝ

孫かはんよりゑのこかへ

同じ穴の狐（二本、弓もひくかた）

相撲も立つかた

兵庫のものは御免ある

一樹のかげ一河のながれ

一むらさめの雨宿り

袖のふりあはせも他生の縁

君は舟臣は水（荷子、君者舟也、庶人者水也、水則載舟、水則覆舟。）

いぼあひもち（鵲蚌相持の訛）

下司ない上臈はならず

たのむ木のもとに雨ふる（一本、雨もる）

飼ひかふ虫に手をくはるゝ

孫かはんよりゑのこかへ

同じ穴の狐（二本、弓もひくかた）

相撲も立つかた

兵庫のものは御免ある

一樹のかげ一河のながれ

一むらさめの雨宿り

袖のふりあはせも他生の縁

燈臺もどくらし（傳家寶、燈臺照人、不照己。）

遠目ばかりの箒木

秘事はまつげのごとし

すきに赤烏帽子

蓼くふ蟲（白氏、何異食蓼蟲、不知苦是苦。）

めんくの楊貴妃（通俗編、情人眼裏有西施。）

機によりて法を説け

あはぬ蓋あればあふ蓋あり

すつる神あれば引あぐる神あり

胡椒まるのみ

白川よぶね

見ぬ京物がたり

國にぬす人

家にねすみ

僧に法あり

狸ねいり

鼠のそらじに

船頭のそらいそぎ

病なほりて藥師忘る

あつさ忘れて蔭忘る

恩をみて恩をしらぬは鬼畜のごとし

猿猴が月に愛をなし

猫の額なる物を鼠がねらふ

蟪蛄が斧を取て龍車に向ふ（文選、欲_フ以_ニ蟪蛄之斧_一、興_キ隆車之隆_ト。）

ゆだん強敵となる

たらの木にもかゝるはよいぞ

かせぐに追付く貧乏なし

盲龜の浮木（法華經、佛難得値如優曇波羅華、又如一眼之龜值浮木之孔。）

優曇花

煎大豆に花の咲きたるごとし

しうこうが手（謠曲富士太鼓に見ゆ、出所未詳）

はんらうが涙（同前）

包拯が笑（故事瓊林、包拯寡色笑、人比其笑爲黃河清。）

わかき時は親にしたがひ

さかりにして夫にしたがひ

老ては子にしたがふ

人は人はて

雪のはては涅槃

川だちは川にてはつる

いづる日つぼむ花

若木に腰かけな

若木の下で笠をぬげ

まゐらすればたばる（たばるは賜はる、與ふるは取るの義）

信あれば徳あり

まかぬ種ははえす

一人の好士より三人の愚者

膝とも談合

めん鳥につゝかれて時をうたふ

命をまたう持つ龜は蓬萊にあふ

くらげも骨にあふ

待てば甘露の日和あり

小利大損

大事のまへの小事

角をなほして牛を殺す

家賣れば釘の價

昔の劔は今の菜刀

麒麟も老ぬれば驚馬に劣る（戰國策、麒麟之衰也、驚馬先之。）

目くらの垣のぞき

齒なしの骨だくみ

法師の櫛だくみ

思ひをつゝむは罪ふかし
思ふ中のつゝりいさかひ
雨ふりて地かたまる
物ぐるひの物こぼさず
酒に酔ひ本性を忘れず
くさり縄にもとりどころ

世 話 盡

曳言ひきごころ之話のわ

一天四海たへんごうを掌てに治む
一を打うて盤ばんをしる

一字千金に易へがたし

一樹一河も他生の縁

一寸の虫に五分の魂

一寸のびればひろ踊る（一寸のびれば尋のびる）

一寸の舌に五尺の身を損ず

一寸さきはやみ

一文まふけの百うしなひ

一犬虚をほゆれば十犬實を傳ふ（潜夫論、一犬吠形、百犬吠聲、一人傳虚、萬人傳實。）

一時の唯居は三年のまごひ（唯居は徒食の意）

祝ひの中の歎き

慇懃びろう（慇懃ならんとして却て尾籠に陥ること）

軍を見て矢をはぐ（下學集、見_レ軍作_レ矢）

いぬる魚を惠美酒めぐみすに備ふ（にぐる魚を惠美須にまゐらす）

いやノ三盃

いさかひはてゝのちきり木

いがびしやくにも取柄とりえ

急ぐ道はまはれ

石で手つめたるがごとし（進退きはまること）

いりまめに花

息の香かの臭きはぬししらす

いとをしき子には旅をさする

家を賣れば繩のあたひ（釘の價ともいふ）

犬のはにも蚤

命にかふる財寶なし

異國の虎は毛をおしむ

犬も奉輩鷹も奉輩（奉輩は傍輩）

犬骨折て鷹の餌に成る

いわしの頭も信仰から

石をいだひて淵を望む

岩のもの云世のならひ

色を見てあくをさす

いられ柿に實多し（いられ柿は十分發育せざる柿）

今入三年鉄輪の足あらふ

いぐちのうそも心なぐさみ（いぐちは缺唇、うそはうそぶくこと）

論するものは中から取る（ばひあふものは中から）

論語よみの論語はま

六道は目の前

花に三春のやく有り

花を見て枝を折る

花より團子

はすの葉の蛙かえる

鳩こらすとて豆まかぬ

鯛うなぎも一期海老も一期

早舟も淀遅船も淀(早牛も淀遅牛も淀)

判官はんくわんびいき

万事は夢

ばか懲勸

箸に目鼻（瘦せたる人の喩）

番匠屋はんじやうやのわらは（番匠屋は大工）

初はじめきらめきの神鳥帽子かみぼうし（はじめきらめき奈良刀）

蠅若衆に蚊坊主（若衆は蠅に苦しみ坊主は蚊に苦しむ）

馬鹿ひやうばかに兵法なし

走舟はしりふねに塵ひかすな

鼻そげもえくぼ（愛人の目には醜も美なり）

はんどくが愚痴も文珠のちゑ

はしる馬に鞭

にぐる魚をゑびすに頼む

人間万事塞翁が馬

人間の八苦

似ぬ京物がたり（見ぬ京物語の轉訛）

日本の武士は名を惜む

似あはぬ僧の腕だて

にごり酒は髭につく（美酒に酔ひたりと誇るも忽ち其實を露はす）

二度びつくり

錦の袋に糞をつゝむ

法華のじやうごは（情剛）

法師の串あつめ（串は櫛の誤か、然らざれば魚を焼く串の意か）

奉輩ゑみがたき（笑みを含みつゝ競争の心あり）

ほろみその夕だち（法論味噲の雨をあびたる如し）

法ほもん文と圓座えんざはゆふにあがる

譽ほむるはそしるものとひ

北州の千年も限あり

奉公はしがち恩は取がち

佛の目をぬく

煩惱の犬はうてども門かどをさらす

方界ほうかいりんき（法界の誤）

下手の物すき

へのこの銀ぱく（無用の華奢）

瓢箪べうたんで鰻をさゆる

屁ひつて肛^{しり}すべる（すぼめる）

へおひ比丘尼（他人の放屁を身に負ふこと）

灯臺もどくらし

毒藥變じて藥

ところにて似せて繪を書く（人を見て法を説くの類）

泥に炙^{やいさ}（效果なき喻）

泥の中のはちす

鈍智貧福下戸上戸（人間の種々雑多なるをいふ）

鳥なき里の蝙蝠

問ふに落す語るにおつる

鳥鳴きて夜ふかし（伊勢物語いかでかは鳥の鳴くらん人知れず思ふ心はまだ夜深きに）

虎は風に毛を振ふ

殿の犬にはくはれぞん

毒の試み

毒をば皿をねふる(毒をくはばの誤脱か)

どうがめに山椒(どうがめは鼈)

とでう汁に金つば(くひあはせを忌むにや)

問ふは一たんの恥問はぬは末代の恥

年とはんより世をとへ

遠き親類より近き隣

としは物ぐすり(年齢は人を賢しくす)

塵積りて山と成る

地獄のさたも錢がする

長者に二代なし

蜘蛛のあみ

長半があてのみ

ちやうちんにつりがね

智恵なき神にちゑつくる

智者はまどはす勇者は恐れず

地體はすゞき殿

沈丁花はかれてもかんばし

茶碗をば綿で受くる(他の怒罵に對して溫和にあしらふこと)

持佛堂と姑は置所なし

智者のほとりの童は習はぬ經をよむ

地にあらばれんり(連理の枝)

長者の万灯

地獄の馬でつら計人

地獄にも知人

綸言汗のごとし

理も強すれば非の一倍

離別の後のりんき

龍の髭を撫で虎の尾をふむ

龍門原上の土に骨は埋む共名を不埋

利根かへつて愚痴に成る

賊人なびとの晝寢

ぬす人にかぎあづくる

ぬす人と云へば手出す

ぬす人どらへて縄なふ

ぬか船にも船頭(ぬか船は小舟)

留主は火の用心

流人のふせがさ(前さがりに面を見せぬやう被るを伏笠といふ)

女のちゑはあとへまはる

恩の腹はきらねど情なさけの腹はきる

臆病武者のしれかへり

隱密の沙汰は高くいへ

思ない主の目ざら（目ざらは目をきらめかし睨みつくること）

己をわすれて人を恨むる

臆病風が身にしむ

恩は怨で報する

女かしこふて牛賣りそこなふ

女のはる弓は射られず

女に家なし

陰陽師が身の上をしらぬ

夫の心と川の瀬は一夜にかはる

王に成るも生れあひ

渡に船を得る

綿に針をつゝむ

我身をつんで人のいたさをしる

我はして人のぼらけは嫌ふ
(歌を習ふ者晝ぼらけ夕ぼらけなどいひしを、師戒めて制したるに、其後師が朝ぼらけと歌によみたるを、弟子見て之を譏れりといふ)

我寺の佛たつとし

禍も三年をけば福の種

われ鍋にとぢぶた

童と公方人わらへ ぼうはんにはかたれぬ(泣く子と地頭には勝たれぬ)

童いさかひおとなしらす

童のしゞくばる(未詳)

童の小刀猿のへのこ

わにあしの道みち早はやみ

程づとにこがね(黄金は臺に包みても貴し)

笑ふ家に福うた來る

わざはひは下から

若衆の親と床のうしろ(共に見て興さむるもの)

上を學ぶしも

神は敬ふに威をます

神は正直のかうべに宿る

神の正面佛のましり

からすを鷲

神の木にてぬしがある

郷に入りてがうに隨ふ

剛の者に矢がたゝぬ

餓鬼の目に水見えぬ

紙子の水かけあひ（紙子著て川へはひる）

かはゆき子をばうて

かなづちろん

瘡かさもさはらねばうつらぬ

良かほに似ぬ心

屍いみなの恥

瘡も我かさ鍋も我なべ

甘草かんざうまるのみ（胡椒丸吞）

蝸牛かたつむりの角あらそひ

高野六十なち八十

蛙のつらに水かくる

鴨は水に入り鶏は木にあがる

餓鬼の花あそび

かふばり強て家たをす

風の前の灯

勝て甲の緒をしむる

壁に耳

樂屋で聲をからす

干戈を筥に入れ弓を袋に入る

壁のものいふ世

河中に立ちても親の脇下はかふばし

かくさば穴をほれ

影は御門の上(御所内裏の事もかけではないふ)

神はきねがならはし(神はきねがならはし)

神より君(神より君)

形見は思の種(形見は思の種)

蟹は甲に似せて穴をほる

蝙蝠の酢(蝙蝠が酢にむせたやうな顔などいふ)

かへつてなた(未詳)

寒がね(かんがね)つ

かた屋かしておも屋とらるゝ

歌人は居ながら名所をしる

片口を聞きて利(つ)理(り)な付(つ)そ

甲由田中は筆者の誤十點千字は繼母(ついでは)の謀(はかり)
(似よりたる字の書き誤り易く悪意ある者の變更し易きをいふ)

風は吹けども山は動せず

肩衣を夜の物

偕老同穴のかたらひも縁次第

兼ての覺悟

欲の熊鷹またさかるゝ

よろこびの中のなげき

よき中には垣をする

よしのすいから天井をのぞく

よねいち姫の里がへり(未詳)

よめが姑に成るは程もなし

よはき家に強きかうばり

夜目遠目笠の下

夜の錦

よはめの靈氣(頼りめに祟りめ)

よはきものを歩ユにさす

たつとひ寺は門から見ゆる

たくらだの市に立つ

だますに手なし

提婆が悪も観音の慈悲

大地に槌

蟪蛄が斧

蓼食虫(くふじ)もすき

狸のはらつゝみ

財かひは身のさし合せ

寶の山に入て手を空しくする

短氣はみれんのさう

大海かいは塵をえらばず

頼む木かげに雨もる

立ちよらば大木のかげ

鷹は死すれども穂をつまぬ

たゞなり共くふべき餅にあめ(あめは飴)

達摩だまの眼まなこをあくであらふ(明晃々たる嘘)

獵あ有ねこは爪をかくす(鼠とる猫に同じ)

連理の中もきるゝ期

そすればかげさす（噂をすれば影がさす）

抑おさから付づにけりまで（始より終まで）

そりつぶりにわたぼうし（ひつかゝり易き喻）

そんは笛ふく

そんがつたいにうつりてんがう（癩病は子孫に遺傳し、惡戯は朋友に傳染す）

燕算川つよめ（未詳）

杖も孫ほどかゝる

つんぼうのたちぎゝ

角つのはなをつて牛が死んだ（角をなほして牛を殺す）

月夜にちやうちん

月夜に釜

月に村雲花に風

つらに似せてへそまく
(續縁を丸く巻きたるをへそといふ、人の性癖に従ひて事物に異同あること)
つなぎ馬に鞭をうつ

念力岩をとをす

寢耳に水

願ふにぶに(ぶには得分)

ねぶと押して三年中違ふ(たが)
(ねぶとは敵に押させよともいふ)

猫のからざけ

猫の額(ひたい)になまいわし

ねすみ算用

年劫ねがのうさぎ

寢入る小僧に粥かけな

ねた牛にあくたかくる

睡は賢人書を見て來る

書は王の誤か、和漢故事要言に王となし、寢たる間の樂は天子の御果報を身に得たるやうなりとあり

ねすみの犂取（鼠の嫁入）

ねち上戸（理窟上戸）

寢てはく唾つよは身にかゝる（四十二章經、惡人害賢者、猶仰天而唾、唾不汙天、還汙己身。）

子に臥し寅に起くる

年來ねんう狐狼ころうのすみか

鳴神なるかみも桑原に恐る

なき名はよばれぬ（火のなき庭に煙は立たぬの意）

施に積のむしが死ぬる（なもめは草の名、蝮蛇にかまれたる時すりつけて效あり）

なま物じりは堀へはいる（小智は失敗を招く）

長刀のさやひろふ（未詳）

縄はり置くも盗人の爲

なよき嶋にもくよる（未詳）

名乗するは木の丸（朝倉や木の丸殿にわれ居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ）

媒人は宵の内

なれて後はうす鹽

なぶれば兎もくひ付（佛の顔も三度の類）

習あふよりはなれよ

なにも茄子のかうの物

七日通る漆も手にとらねばかぶれぬ

七の子中なす共女に心ゆるさじ

七日語れば尼か法師か

名に付たる疵

難なくして七くせ

何もなしの十八講

なき袖はふられぬ

情は人の爲ならず身にまはる

啼子なぐこも目を見よ

なま兵法大疵のもどひ

ならぬ内は頼み（待つ間が花といふに同じ）

情は實しにをかれず

來年をいへば鬼が笑ふ

老僧のほりには入

牢人いしや

牢人上るり（浪人諸の類）

老後の思出

老少不定の習なづ

落花狼藉

樂髮苦爪うたげくづめ

良藥口にながしらうやく

亂亡の取のこし（盗人の取殘しともいふ）
らんぼう

樂あみが手車うたけ
てぐるま

癆瘵^{らうさい}（らうさいは肺病）

昔の劍今の榮刀

六ヶ敷講にはいらぬがよい

村に事なかれ

虫くひものみえりの便^{たより}（犬の虫食齒も蚤を探るだけの役には立つべし）

馬の耳に風

馬にのりても聞^{（の）}やすからず

無理にゆかすのくせ馬をせむる

むしくひ齒に物のさはる

生れぬさきのむつき

兎兵法うさひひうほう

兎のひるね

うつばりの燕つばめは子故の闇に迷ふ

上見ぬ鷺

うろりの道場参みちやうまいり

うどんの湯（蕎麥の湯は飲まるれど、うどんの湯は飲まれず）

うつ所がくぼむ

牛にひかれて善光寺参

うまき物はよるにくへ（うまき物は宵にくへ腹の立つ事は明日いへともいふ）

牛は鼻はなから鼻はなをさるゝ（鼻へ簾を通すとも）

牛はうしづれ馬は馬づれ

うちまたがうやく（内股膏藥）

牛の子にみそ（牛の子生れたる時、その膚へ味噌をぬりて母牛になめさせる風習あり）

牛の一さん（前後の思慮なく一概にはやりたつこと）

運は天に有

氏なふて玉の興

運の矢が空から落つる（運命は豫知しがたし）

鶉のまねのからす

魚の木にのぼる

詔十八手六十（修業に要する年數、算用十六詔十年手六十ともいふ）

諷ふもまふも法の聲（白氏、狂言綺語佛乘因の意）

歌の返しをせざれば蛇に成

氏よりそだち

憂喜は心に有

井の内の蛙が大海をしらす

居眠も奉公

ゐがよりくり(毬より粟)

井戸のはたのわらんべ

のぼりしらすの下り土産

鋸屑もいへばいはるゝ

のらふにしなす(にくまれ子世にはどかるの類)

糊次手にぼうし作る

蚤の眼に蚊のますげ(ますげはまつげの訛、微小の蟻)

野にふし山を家とする

鬼とざれ言（氣味わるき噺）

鬼にこぶ（鬼に瘤とらるゝ）

鬼の目にも泪

鬼に鉄棒

鬼も十八

鬼の一口

親の目に灰ぬる

嫉の酒もたりをかふ（未詳）

舅は甥の草をかる

舅よめは鬼千にむかふ

奥齒に物のはさまる

大水を手でせく

公おやわりのわたくし

翁おきなまじりして骨ほねなますくふ

負おふ子こに教へられて淺瀬を渡る

祖父おばぢのすね言ことば

大鹿おほしかの蚊をのふだるがごとし

御髭おひげの塵ちりとる

負おふに蹴おこ(未詳)

おごるもの久しからず

おとがいの雲口くもぐちにいらぬ

老おつては子こに随したがふ

老虚言おとこころづきいはず(老人のいふ事に間違はない)

御情の罪科（ありがた迷惑）

思ふ中のいさかひ

思ふ中の垣

老妻のしれわらひ（氣味わるきもの）

おとなは目はづかし下子は口恥し（都は目はづかし田舎は口はづかしに同じ）
男のしやうは閨に糞する

お前すみぬり（未詳）

落武者は薄の穂に畏る

老たるを敬ふは父のごとし

老ての功學（後學か）

お寺すりこぎ

會稽の恥辱

愚人夏のむし飛んで火に入る

車は三寸のくさびを以て千里をかくる

釘のほをかへす(釘のうらをかへすに同じ)

公事と病は長くあつかふべし

くさづくに國かたぶく

臭きものには蓋をせよ

臭しと知りてかぐはばかもの

雲に梯かたはし

海月も骨にあふ

蜘蛛くも手かく繩十文字

蛇くたなは口のさくるをしらず(怒のくまたか股さくるの類)

蛇は人を食て泣く

くはぬ犬をけしかくる

果報は寢てまで

くせものゝそらわらひ

勸學院の雀はもうぎうを囀る

颯は三度

くぼい所に水たまる

沓新しけれども冠にせず（史記儒林傳、冠雖敝必加於首、屢雖新必關於足。）

黒犬にくはれてあくのかすに恐る

養ひ得ては花の父母（朗詠、養得自爲花父母、洗來寧辨藥君臣。）

楊柳の風に吹けるがごとし

山の芋の鰻に成

柳は緑花は紅

山の神におこぜ

焼鳥やきとりにへを

瘦子いせこに過食しよのすぎ

瘦小僧しよせうの齋さいに逢へるがごとし

藪くすし

藪にかうの物

藪に馬蹴うまぐり（横紙やぶりといふ類）

やりおとがい

やり留まりあ

やもめがらす

雇人やまんひとは日かぎり（雇人と北風は日かぎりともいふ）

病しやうに主なし

山柄やまがらの胡桃くるみ回す

山柄やまがらに柿かきふんどし

闇の夜の礫

闇討やみうの捨刀すてがたな

病は身のほうけ

瘦法師しやうほうしの酔好み

約束やくさくへんがへ常のごとし

瘦虱しやうしちを鎚づちではく

燒石やうしに水

藪やぶいたちの耳みみのきれたるごとし

やまがら利根

松は二葉より棟梁の思有

万能一心

盲龜の浮木

末期の一句

末期の水

猛虎籠わごに入いて尾おを振ふて食くを求もとむ

守手まもりての間ひまはあれ共盜ねとみの隙ひまなし

まけ博奕はくちのしきりうち

窓から鑪いろり（藪やぶから棒ぼうと同意）

毛を吹ふて疵きずを求むる

藝は身をたたすくる

賢臣けんじん二君にくんにつかへず

けんじよのたかけ(未詳)

けがの高名

見物ならは笠かさきよ

けいづ侍不包丁(系圖を誇るのみにて實力なし)

けさで肛しつを巾ぬふ

けら腹たてばつぐみよろこぶ

けらつゝきの子は卵たまごよりうなづく(旂檀は二葉より芳しの類)

下子けすと桎園子けいどんこはみつまで(下司の子も三歳までは可愛く桎園子も三個までは食ひ得べし)

げぼうの下り坂

賢人は危きを見ず（君子は危きに近よらずの意）

けふは人の上明日は我身の上

蜚雪の功を積る

喧嘩買

喧嘩に毛がはえた

普天の下卒土の内（詩經、溥天之下、莫不王土、率土之濱、莫不王臣。）

富士は磯（富士山位の山はいふに足らずの義）

蜚蜉の一期

古屋の造作（案外に費用の多きをいふ）

福德の三年め

鮎の念佛

福祿壽の市立

梟のざほにけられたるがごとし(ざほ不明)

ふくとうの馬にけられたるがごとし(ふくれ面の醜き形容)

芙蓉の紅くれなゐ

淵に鹽

佛法に飢渴けがなし

布施なき經に袈裟落す

富貴ふうきの家に災難多し

分々に風はふく(分相應の風が吹くともいふ)

舟盜ふねずびを陸歩りくちで追ふ

冬の雨は三日ふらず

筆は諸藁のうはらり

佛法あれば世法あり

心を師とする事なかれ

孝行も子による

好物にたゝりなし

好事もなきにはしかじ（傳家寶、庭前生瑞草、好事不如無。）

碁案弓勢こあんゆんせい

御扶持の無力ごりき

去年の曆こち

請ひた程飽いた（戀ひた程の誤か）

子は三界のくびかせ

子ゆへの闇にまよふ

小家から火發す

護摩堂の本尊の雨に逢ふがごとし

勾踐の本意

肥えたるが故に貴からず（實語教、山高故不貴、以有樹爲貴、人肥故不貴、以有智爲貴。）

胡椒まるのみ

蒟蒻の市に立つがごとし

こぬかにも根性（二寸の虫にも五分の魂）

古郷へは錦をきる

志は木葉につゝむ

言傳どくびすぼは直にいはぬ

言多くして品すくなし

言に花をさかする

詞に物はいらぬ

心よはふしててなし子をうむ

心の鬼が身をせむる

言は立居たちゐを顯す

好む所の小長刀こながた

古郷忘じがたし

子は第一のたから

小茄子に年のよつたるがごとし

胡蝶の夢の百年め

御免あれ兵庫の者

子を恨み身をかこつ

巧(功)成り名遂げて身を退く(老子、功成名遂身退天之道。)

根性に似せて家をすまふ（蟹は甲に似せて穴をほる）

閻浮の塵

縁につれて唐の物くふ

江の邊につながぬ船

海老食たるむくひ

縁者の證據

えてに帆を引く

えんの舞々（猿樂は庭のもの舞々は椽のものともいふ）

天道人を殺さず

天に仰ぎ地に伏す

天にあらば比翼

天然礫てんねんりつのまぐれあたり

天竺牽人

天に眼まなこ

天下はまはりもち

天の山で尻をあぶる

天狗小僧

天の與ふる寶を取ざれば却かへ而て惡にくみを得る（史記韓信傳、天與弗取、反受其咎。）

天しる地しる我しる三人しる

天人の影向かげかう

天罰てんばつはあたり次第

手飼てがひの犬に手くはるゝ

敵を見て旗をまく

敵のさする高名

寺から里へ

敵の異見も能はつけ

出物腫物所きらはす

弟子七尺去て師の影を踏ます

貞女兩夫にまみえず

手がいれば足もいる

あみだは錢ほどひかる

雨降て地かたまる

温に着飽くまで食ふ

餘さむさに風を入れけり

(犬筑波、あまり寒さに風を入れけり
賤の女があたりの垣を折りたきて)

案に相違

悪事千里

あやまちの高名

明日鹽くはんとて水ものます

あかぬ中のわかれ

あふたる時に笠をぬぐ

あんがうの糟に酔へる(未詳)

足もとより鳥の立ちたる

悪につよきものは善につよひ

熱き火は子にはらふ

あたゝかまんぢう(らまき事の喩)

蟻の堂参り

蛸貝あひびがひのかたおもひ

青菜にしほ

麻の中のよもぎ

浄木あらそひきのぼり登のぼりかがする

雨氣あまけの傘かさ

網の目にも風たまる

朝あしたに道を聞きて夕に死す共可也

あさき川もふかふ渡れ

秋の夜と男の心は夜に七度ななたびかはる

侍はわたり者

竿の先の鈴（口やかましく騒々しき譬）

さすつてほめる（陰險なる喩）

座頭のぐみ（盲に茱萸くはするに同じ）

猿利根

猿の土佐踊

猿の餅かふ

猿頬

猿眼

三人あれば公界くき

三界に垣なし

三人よれば文珠のちる

座頭は牛七疋ほどすねる

猿も木から落る

三ばさのおどがい（未詳）

猿樂のふべん 似あはざる小袖を着を云也（原注）

ざこも魚ひれ（小魚にも鱗はありとの意）

三世のきえん

猿ねぶり

懺悔に罪を亡す

三寸は見なをし（再檢再考の必要をいふ）

さはるに煩惱

細工貧報人下部（細工貧乏人實と同じ）

さすがに我も平家

三途の瀬ぶみ

皿に桃をもる（くづれ易き喻）

座頭の寢入と月夜のあくるは人しらす

京のいもどに隣かへず（遠き親類より近き他人と同意）

金言耳にさかふ

きぼうしにあられ

機によつて法をどく

氣の前に藥なし

鬼神に横道なし

岸の額ひたいに根のなき草

さんかあたまの蠅すべり

木に離れたる猿のごとし

狐つりのおち坊主（白藏主の故事）

氣のつかぬ人にはもらふべし（我より進んで請求せよ）

兄弟は他人のはじまり

清水の舞臺より後飛うしろ飛び

北風と賃取ちんとは日の内（北風の吹くと日傭八足の働くとは日暮を限とす）

急病に惡日あくにちなし（急病に醫を迎ふるに曆日の吉凶を擇ぶ能はず）

君きみたれば臣しんたり

麒麟も老ぬれば驚馬に劣る

君思ふは身思ふ

さりなしよりもりなし（食物の切り方の大小より盛り方の多寡肝要なり）

木の皮ふんどうし（ふんどうしは禪）

狂人はしれば不狂人も走る

槿花一日の榮えは

弓矢の禮儀

雪と墨

湯の山の道づれ（病人のみにてろくな者なし）

指むさしとて切て捨てられず（骨肉親戚の絶縁しがたき驗）

夢に餅食もちくたる

ゆがみ木も山の賑ひ（枯木も山の賑ひに同じ）

ゆるぐくるはぬくる

雪ふりにはみなし子の着物きもの洗ふ

白雨はふだちは馬の背せをわくる

冥途のみちには王なし（死は貴賤貧福に一切平等なり）

名人ひとをそしらす

命は儀に依てかろし（儀は義の誤）

命は食にあり

盲の杖をうしなふ

めおといさかひ

面目をすぼにつゝむ

目のさやをはずす

目に秤

面々の楊貴妃

盲蛇におぢす

盲にぐみくはする（ぐみは茱萸）

南高藪殿隣（南を竹藪に遮らるゝも貴人の家近く住めば利益あり）

水は方圓の器にしたがふ

水はさかさまに流れぬ

水に繪をかく

水入て垢不落（水に入りての意なるべし）

みめは果報のしたち

神子の虚言

三ツ子の横草履

糞虫の家作

耳は渡世

耳にもかへてほしき物

耳は壁をつたふ（壁に耳と同意）

耳を洗へば牛を引ひて歸る（許由巢父の故事）

釋迦に經

慈悲は上から

正直は一段の依怙終には日月の憐み（一段は一旦の誤）

沙彌から長老

主の仰おほせには親の顚ひやう討う（主命の重きを誇張していふ）

主の前とすべり道は早く通る

她じやの道はへびがしる

杓子を定規

眞言しんごんのあて字（眞言宗に普通ならぬ文字を使用すること多し）

親しき中に禮あり

尻のしたのいぼ

しゝの角を蜂のさせる（鹿角の蜂）

しはざれば喧嘩のもとひ（しはざれば惡謔の意）

死出の山の道しるべ

食にあへば友を忘るゝ

二男惣領を得たり

新發意太鼓（狂言にこの題目あり、その趣の事をいふ）

しうどの酒にて相聲もてなす

親は泣より他人は食より

知人鬢顔うつ

舍弟能登守

賤に戀なし

四鳥のわかれ

主の曾子より老の惣領（曾子は庶子の誤）

鍾馗大臣の棚からおちた

鹿を追ふ獵師は山を見ず

貳の花見

芝蘭の友

尻瘡のかゆきと獨輦のかはゆきはやるせない

昔善の家には餘慶あり（積善の誤）

順のこぶし

順の舞

篠をたばねてつく雨

朱にまじはれば赤く成

述懷奉公身のあた（不平不満をもらしながら勤仕するを述懷奉公といふ）

滴^{しじり}が積りて淵に成

下地はすぎ也御意はおもし

下として上をはからふ事なかれ

仁者に敵なし

舌は禍の根

珠數御免

十能七藝

十歳の翁^{おきな}（少年の老成なるをいふ）

殊勝成狂言に笑^{わら}しき嘆義^{たんぎ}（嘆義は談義）

十月狸はねた跡も百する（十月頃の狸の價貴きをいふ）

食後の一睡万病圓（食後の一睡は健康に利多し）

炎摩の廟のうつたへ

鴛鴦の衾

越鳥南枝に巢を懸け胡馬北風にいばふ

淵猴が月に愛をなす

（猿猴の誤なれど、猴が淵にうつる月影を
探らんとするより此字を用ひしものか）

晝そら事

ゑつたのはくらく

天子の火を踏だる

會下僧のからかさ

會者定離のならひ

百様を知て一様を知ずは諍ふ事なかれ

貧は諸道のさまたげ

貧報ひまなし(貧乏の誤)

貧のぬすみ戀の歌

貧僧の重少用かさねず

貧女の一灯

貧者かなひがたし(貧は諸道の妨に同じ)

比丘尼のかぎあつらへ

秘事はまつげ

膝枕に頬杖

人に一くせ

日照の高木履

日の出いしや

日暮と大晦日おほつぎもちはいつも忙しいそがし

比丘尼のはり小袖

孤子ひとりごは國にはどかる

肘味ひじ噲

肘尻

膝頭ひざがしら

蛭に塩

蛭の瘡かさたづね

屏風疊に炭油

非細工の小刀へらし

拾ふ刀にかねきらふな(拾ひ物に不足をいふ權利なし)

人は善惡の友によろ

人のおもはく一言にしる

百貫の馬にもたり

美人の終は猿に成

百歳のわらんべ(老いて智なきをいふ)

人を見る目から血がたる

人喰馬にも相口

木像ものいはす

門前市をなす

もどでなしの唐はしり

もどのもくあみ

物ぐるひ水こぼさず

もがりをさかさま

せいは道によつてかしこし

栴檀は二葉よりかうばし

世界の圖

船頭の多き舟は山へ乗る

疝氣下風奉公道具(疝氣下風は奉公を怠る口實となる)

せわの焼きそへ

千日に刈萱かるかやが一日に亡ぶ

小利大損

禪僧の素麴

背中に胎はらはかへぬ

せきばらひも男の法

せつかいで腹きる（搦木で腹切るに同じ）

錢が一文なき中

小智はぼだひのさまたげ

小虫せうむしをころして大の虫をいかす（小の虫の誤か）

せめ一人に歸きす

千里の馬はあれ共一人の伯樂なし

錢もたすの團子えり

善をばいそげ

世法あれば衆生あり

寸前尺麿（寸前は寸善の誤）

過ぎたるは及ばざるにはしかじ

姿は俗性をあらはす

脇に疵あればかや原を走らぬ

雀は百になれども踊を忘れぬ

すきに赤烏帽子

墨繪に書く白鷺

すいよりぎやう

すめばみやこ

すねものゝにがわらひ

雀の千聲鶴の一聲

すられぬ藪で身をする

すべり道と御經ははやいがよい

すくみ往生

世話詞渡世雀と笑謠

諺語を連接して一篇の文章を組立てたものは近代文學に四五種ある。こゝにはその代表として渡世雀と笑謠とを擧げる。渡世雀は寶曆三年京の窓梅軒可耕といふ者の作で當時流行の談義物の餘風を受けた教訓的文學である。笑謠は何人の作であるか、その時代も不明であるが口車、石原藥罐、婆婆彌次郎の三曲を合綴したもので、その最後の一曲のみを掲げて一斑を知らしめる事とした。謠曲の本文をもぢつた亂曲、颯々箱の類は寶永頃の出版であるが、これはそれより後の作であらうと思はれる。

序

鹿を追ふ獵師は山を見ず、身過に賢き者は春の花の盛もしらず、唯錢なき衆生は度し難しと片いちに覺ても、おのづからおまへ様の持佛様の、人の翫は何の光ぞと思の外、内證にねつそりと山吹色の影移る玉川の水より清き、節季の拂際さつぱりと、袴着て物もふの聲珍らかに、春の朝のしのゝめよりも由斷なく、鳥はがあゝ、雀ちうゝ、予も岡目八目とやら、人の形氣はみえて我形氣をしらず、朝は隣の見世の明吾に耳つぶし、夜着の中に寢もせず起もせず、まじくじとする内に、世の口號喩言を一つ二つ云並ぶる程に、六百餘のたとへ言を、口に任せ出ほうだいに書並べ、世話詞渡世雀と題して櫻木にちりばめ、世の人の笑草とならん事を囁而已。

寶曆三癸
酉初春

作者 窓梅軒 可耕

花洛

世話詞渡世雀 上

世渡るわざも様々に雪と墨との人心

附リ

當ッて碎くる男氣は引にひかれぬ弓手の入墨

讀人しらずの短冊は鏝（しじり）のつまる一腰の身の代（しろ）

算盤を枕とすれば樂（たの）其中に有明の月

附リ

よその謗も虱の皮なたではぐ名代男（なづかいざむこ）

癢所（かゆい）へ手を遣て爪に火をとぼしからぬ身代

地^ぢが傾^{かたむ}て舞^まがまはれぬ孔子^{こうし}の舌鼓^{しつこ}

附^つリ

我身^{われみ}つめつて人の痛^{いた}さをしら川夜舟

何^{なに}をしても取^{とり}メのない風吹^{かぜふ}に灰蒔繪^{はいしきえ}の狀箱

世話詞渡世雀上

世渡るわざも様々に雪と墨との人心

春雨^{ふゆ}降^ふつゞきながき日^ひをくらかねやう／＼けふも入相^{いりさう}を机^きにもたれつく
ぐと移^{うつ}替^かる浮世^{うきよ}の有様^{ようさう}をおもふに、いかさま、むかしより云^いならはせる世話^{せわ}
言葉^{ことば}、たとへ言^いにもるゝ事^{こと}なしと、硯^{えん}ひき寄^よ筆^{ふで}にまかすぞおかし。先人^{せんじん}は何^{なに}の
ためうまれ、何^{なに}の爲^{ため}に死ぬる事^{こと}ぞ、一生^{いっしやう}のはたらきを見れば、犬^{いぬ}の年^{とし}のよるやう

に、壹年／＼わかふはならず、大津馬の追がらしのやうになつて後、死ぬるをおもへば、土佛の水遊びにひとしく、喰呑と色事より外にかはる事なし。されども心不同なるは面のごとしとかや、さま／＼の人心こそ面白けれ。大名の火にくばつたやうに、大やうに生れ付、いか様大名のおとし子かと疑れ、自然と好む武士片氣人は侍、魚は鯛、武士と金は朽てもくちすと面白がり、郷にいつては郷に隨へ、門にいつては笠をぬげ、男は辭義にあまれ、女は忍しやくにあまれと、内外のもの迄に行義つよく、諸事折目高に、假初にもことばとがめ、小尻咎めもしさいらしく、商ひするは嫌ひにて、居合やはらをたしなみ、なま兵法大疵のものととなり、つねに事がな笛と心がけ、喧嘩といへばよろこびて、鬼に金棒得手に帆と、人が壹町とべは三町も飛び、龍の水を得たるがごとく、人もたのまぬ世話をやき、是ぞ隣の糠はたき、我ものくふて主の力もち成べし。判官最良とやらで、弱い相手のかたを持、我がかふして居るからは、鐵の楯同前、相手のもたす

氣じや、仕義しぎによらば打はたせ、死ぬべき所でしなざれば死しに増まる恥多し、事に
よらば身が相手と、婆婆ばばでみた彌治郎とやらで、何國どこの馬の骨やら牛のほねや
ら、しれもせぬ男に命でもやる頼母たのぼ敷くづく脇で聞きさへうたてけれ。人をふん
では夜がねられず、常にはなさぬ一腰も、實は身のさし合せとなつて、小尻こしのつ
まる身代、うす紙をへぐやうに、内には提燈ていとうほごな火が降ふりて、何くふまいと儘に
成誠なりまことにつるぎの刃やいばをわたり、薄氷はくひやうを踏ふごどく、一家いけの方かたへも敷居ふきいたかく、鷹は飢
ても穂をつまぬとはいへども、おのづから前の武士氣はどこへやら、人の頼む
を幸さいに、公事こうじの腰押こしおしねだり事、もがり分別横車横紙破る公事こうじだくみ、とかくくは
ぬがかなしさに、よからぬ事としりながら、蚤蚤とり眼まなこを見ひらいて、さはり三百
何なりと、其日ぐらしも行ゆかぬる、鍋なべをあらふて待まちて居る心のうちは、小豆あずきかす
やうに成生せいせい牛の目もぬくやうにみへければ、人も次第しだいにこはがりて、鬼おにに衣きぬの
たつき鉦しやう、一皮ひとかわ下は闇がりに、鬼をつないで置おやうで、小氣味こきみのわるいと付合つあず、

詮事なさに蜂の巢をつくく、思案して見れば、もとの白地がましじや物、親のほんそ子他人がにくむ親のひかりは七光、惡まれ子世にはびこるそのたとへにも似ず、次第ノに鷹の身ぶるひのやうになつて、正眞の申樂の貧乏、乗馬の乗落しとやらで、風俗はむかしの能衆にて、水晶のけづりくす、乞食に朱碗とわらはれて、世は元しのべ何事も身より出せるさび刀、寢てはく唾身にかゝる、泪ながらのなき寢入、乳房くわへてそだちたる、生れ在所に居もやらず、跡は野となれ山となれ、三界坊のめつた的、丹波越からその先は、行衛もしれぬ人も有。誠に知つた糖商ひとは、能いふた物ぞかし。

そろばんを枕とすれば樂み其内に有明の月

世はさまざまの人心、しはん坊の柿の實と、人によぼるゝ程に生れ付、生爪ははなすとも、一文錢も大切に、こけても土をつかみ、五文が油燈して三文が仕事せ

よ、かせぐに追付貧乏なしと、世の人口も構はずに、殿の馬でもかりや三日、預る物は半分の主主の子養ふもかゝろが爲、君を思ふも身をおもふじやと、念比中の取引にも川中で尾をはぎ、座頭にあつ湯、だますに手なし、逢ふた時に笠をぬげ、相對づくの商ひにぬかるゝは先が馬鹿、目明千人、盲人千人、小勝とつても勝がほん、氣の弱いものは父なし、子孕むとかや。皮を引ば身がいたむ、歌や連歌で世わたりは成がたし、ほんに身過と死病ひにあだな事はなし。屏風と商人は直にはたゝず、朝寢をするは貧乏の相、晝寢をするは病ひの相、朝起こそは富貴の相子にふし、寅に起なして、星をいたゞいてかせぐべし。我はふしやうではたらかず、腰拔の居ばかりひ、立佛が居佛をつかふとやら、膝行の人だのみするやうでは、頭がまはらにや尾がまはらず。船頭のおほい舟は山へものぼり、日暮と大晦日はいつでも鬧しく、犬の手も人の手に仕たいとやら、盗人のひまはあれどまもり手の隙はなく、人は盗人火は焼亡、由斷大敵。かりそめにも能

衆付合せぬやうに、上をみれば程がない、手なれぬ事や仲間事、しらぬ事には損多し、もふける事は犬の蚤、よしなき事にすゝめられ、狂人はしれば不狂人も走る、一疋の馬が狂へば千疋の馬が狂ふ、口三味線に乗られて、常の家業をそでにすな。とかく誠を本とせよ、竿の先に鈴を付、蹴をかたげて手を放し、唾で矢をはぎ、耳取て鼻をかみ、紺屋の明後日いふやうな、間に合ばかりで世わたりのならぬ物、買ふ人あらばあはずとも、うつて悔むは夜が寢よい、たゞ勘略を第一に、むかしより云置し、させほせ傘、人にかすなからかさ、急用には鼻をかけ、明けりや、盆と心得て、いつでもおなじ身代と、うつら／＼と暮しなば、上戸のひたひ、盆前をにはかのやうにおどろいて、日くれて道をいそぐとも、其甲斐さらに有まじき。不斷節季と思ひなば案じるよりは産がやすく、いつの盆より心やすし。いつも九月に常月夜、世帯佛法腹念佛、年をこふより世をとへど、自然と人ももてはやす。我等始末を大せつに夜を日についでかせぎ出し、おもひ置く事な

けれども、心にかゝるは死だとき、物の入のをあんじられ死びかりとて物いれるは、何やらの銀箔椽の下の舞といふ物と、死だ跡まで始末して、ためたる金も得つかはず、筐分とてやりもせず、犬にもやらす棚にも置ず、持乞食じやとそしられて、一生くらす人もまた、無常の風にいやおふの、ならぬうき世のならひぞかし。

地がかたぶいて舞がまはれぬ孔子の舌鼓

爰に又論語よみの論語しらすとて、すこしこしやくな生れ付、死生命あり、富貴天にありといふ事あれば、庭鳥の火にくばつたやうにあたふたせずと、果報はねて待、云度ことは明日いへ、甘物は宵に喰へ、善はいそげ悪はのべ、遅牛も淀はや牛も淀、來年の事をいへば鬼がわらふ、天道人を害さすといふなれば、我等はくはず貧樂をたのしむといふ人もあり。さて又生死は天命なれども、富貴天

にありとて、のら／＼暮すは御月さまとすつぽん、下駄と焼みそ、いすかの背ほ
ご喰違ふて、身代は紙鳶のぼり、終に藁火焚たやうになるは間も有まじ、ほろ味
噌の白雨といふやうになつてから、天道をうらみても、悲しければ身一つ、正眞
のへをこいて尻をすぼめるにひとし。とかく地ごくの沙汰も金がさす、阿彌
陀も錢程ひかる物、無袖はふりがたし、有手よりはこぼるゝ、永いうき世にみじ
かい命、廣い世界に小さい氣をもち、大海を手でせき、火吹竹の穴から天をのぞ
き、竿竹で星をがち、膝をもつて江戸へ行、鶴の粟ひらふやうなことでして、沈香も
たかすへもこかす、穴を掘てはいる様に、一生ぼく／＼と暮すは、此世へ生れた
甲斐はなし。男ははだか百貫、一すききは闇の夜、七ころびに八起、雁は八百矢
は三本、百貫の鷹もこぶしをはなさねば鳥をとらず、懷手して濡手で粟をつか
み、寢鳥さすやうな事で、一夜檢校に成こそ人間の本意なれ。されども米あき
なひ小判の相場は、川ばたに子を置たやうであぶなし、ことに損の行ときあて

なければ、何ぞ元手なしに能事（よきこと）をとおもふ折ふし、るいを以てあつまる欲の熊鷹、またさけても金をほしがるわる達明（たけあき）た口へ餅とやら、金山（がんだん）の願ひをすゝめ、木に餅のなるやうに、うまい事だらけ云聞すれば、下地（したぢ）はすき也御意はよし、火柱にもだき付度折から、譯もしらねど、こせうの丸のみ、さあ金の緒に取付（とりつけ）た、福徳の三年目、天の與（あたふ）るをとらざればかへつて罰（ばち）を蒙る、天にも地にもない事のやうに悦び、高野で女餓鬼に水、此願ひさへ叶ひなば、金銀のつかみ取、金の中から目をむきだすは今の間と、生れぬ先のむつき定め、山も見えぬ事共に、長範が當吞（あてのゐ）して、庭鳥さはぎにくはつくはつとやりかけ、追付（おっつけ）長者になつた上、泥の中の蓮（はちす）鳶が産んだ鷹と、親の名までもあげてみせん。しかし長者になつてから、二代續かねば面白からずと、外の事は馬の耳に風、何をいふても聞かれねば、女房子ども氣の毒がり、此度の御願ひ、むぎ飯で鯉をつり、海老で鯛釣（うなぎ）たやうな事も有もせん、去ながら金山の咄はしらぬ京物語、正眞の猫に小判角申（かぎょうしん）もころば

ぬさきの杖といふ事もあり、まだるい事を堪忍して、斧を針にとぐこゝろで、貧乏隙なしとせいを御出しなされたら、たとへたゞきやめば喰やむといふやうな身代でも、つゝかぬといふ事は有まじと、いろ／＼とめても、いかな／＼空吹く風、劔の様な顔をして、目に角を立、逆馬に成てきて氣の叶ぬ事ばかり、鬼の女房に鬼神といはぬか己もおのれ、瓜のつるに茄子はならず、親に似ぬ子は鬼子じやと、藪に馬蹴、竈將軍、跡先見すの猪の獅子武者とは、此たぐひの形氣なるべし。

世話詞渡世雀 下

生壁をそろ盤で押すにおされぬ縁定

附り

親の目顔をしゝび妻子は三界の首かせ

うみ溜^{ため}た麻^ま苧^をの亂れ口は地獄の上の一足飛^{いっせくとび}

戀と無常をあへまぜに心から染めぬ墨の袖

附リ

立板に水ながした様な高座の辯舌

尻も結ばぬ糸筋は解くにとかれぬ小姓の懷胎

相場商ひの勝負^{かちまけ}は童^{わらべ}に花の一トさかり

附リ

世の盛衰にまき付る家も田地も質の種

人間萬事塞翁が生れ付た一番息子

日月は正直の頭カサネにやどる、福德の三年目

附リ

榮耀があまりや餅の皮むいてきた仕合男

年を問ふより世を歡樂にのぼり詰めた寶の山

世話詞渡世雀下

生壁をそろ盤で押すにおされぬ縁定

花も茗のころこそゆかし、さかりとなれば、はや散方ちがたのおもはるゝ物ぞかし。
娘子どもの縁さだめ、ねらいくらしをする内に、齒はぎれのせぬ親心、あるはいや
なりおもふはならず、月に村雲花に風、かげうらのそら豆も、はちける時ははぢ
ける、高野ひじりに宿かして、娘とられて耻かくと、氣のせくは親の習ひぞや。

仲人口で雪を墨、烏を鷺と云なして、枯木に花も咲く様にいへど、仲人は宵のほど、きはまる縁にかたづかば、氏より育さだちとほめられて、舅姑大切に、身持は石部金吉に石金いしかねくろゝ、第一は、雪ふりの明あけの日は密夫みつこの洗せんだく日と、世のことわざを耳にとめ、慎むべきぞ肝心なり。愛敬あいさやう有てしほらしく、かまはぬ事にさし出な、女さかしうて牛賣られぬ、あぢない物の煮にえぶどり、山の神じやとそしられな。男の心とりぐゝに、暖簾にもたれる様で、釘くわいごたへせぬ人も有、山の崩れて来るやうな大きな事にも驚かず、ゆらりぐゝと暮しつゝ、俄に物を取りそぎ、だらり急なるくせもあり。たとへにいふに違なく、くせなふて七くせ、また、いらくらのだらくらくらと、物云出せばやるせなく、たでするやうにせはしうて、立板に水ながし、流れ川で尻あらひ、蛇へびの目を灰汁あかであらふやうに、さつぱりとするくせもあり。善惡ともに物いはず、尻目にかけてじろぐゝと、眞綿で首をしめるとやら、綿に針つゝむやうなるくせも有。そのくせぐゝを心得て、若氣みじかき人

ならば、綿に茶碗とあしらへよ。女房のかちの取やうで、少し見事な百の錢六文ぬけた男でも、發明らしう見ゆる物、遣ふ下部や下女はした、何がないふを追從に、針ほどの穴から棒ほどの風の來るやうに、世間ばなしにことよせて、傍輩をしる問すがたり、いつものくせとよいほどに、聞た事は聞捨、見た事は見捨にして、さはらぬ神にたゝりなし、ごもくさがせば蚯蚓が出る、奥をきこより口を聞け、問ふに落いでかたるに落る、人の事と小儀はゆひやすく、我上の星は小間いとやら、小家から火を出すといふせわもあり、魚と水との能中も、へだゝるは人の口、蛙は口故蛇に吞れ、人は三寸の舌を以て五尺の身をそこなふ、能中には垣をせい、しらぬ事は人にとへ、どふは一端の耻とはぬは末代の耻辱とかや。とかく夫をうやまへよ、悟氣嫉妬をいひつのり、あられぬ夫婦いさかひは犬も喰ず、人のしらぬ闇がりの耻をあかりで云ちらし、血で血をあらふうたてきよ、あき果たりし女房も、いなした跡は百の錢落したやうにをしいとかや。七人

の子中なすとも女に心ゆるすなどいましめ、かたき親仁達、六十に成ばば様も、
よもやかうでは果まいと、そしりく嫁つかふ、女は相身たがひとて、袖のふり
合も他生の縁と口にはいへど、むかしより嫁姑のよい中は、もつけの内といふ
なれば、嫁にくはすな秋なすび、犬と猿との中々に、孫は格別かはいふて、にくに
くの腹からいどくが出やつたといへども、孫を飼ふよりは犬子飼へとい
ふ事を、今の世までも口すさむ。男女の差別なく、色でなければ夜が明けぬ、雀
百に成ても踊わすれず、若い時は二度はなく、死で花實が咲くものかと、心の手
縄ゆるしなば、明日ともいはすしくじるぞ。心の六義じつとしめ、勝て兜の緒
をしめよ。親、親方の折檻に、瘦我をはりてたてづく、杖の下よりまはる子の、
惡ふてはせぬ勘當ぞ、いとしい子には旅をさせ、塩を踏むのを身の爲と、おもは
すしらず、此上は一寸切るゝも二寸切るゝもおなじ事、毒をくはさ皿ねぶれ、や
けの勘八なんのその、密夫七人せぬ者は男のうちにあらずとは、いつの世より

もいひしぞや、是ぞ男の第一にたしなむ事ぞ。世の世話を誠とおもひ給ひなば、石をいだいて淵に入り、親の身にては正眞の子は三がいの首かせと、末代までの耻さらし、一生勤めし忠孝も、みな湯をわかつて水にする、嗜むべきぞ肝要なり。

戀と無常をあへまぜに心から染めぬ墨の袖

わら屋の雨と佛法は出てきけといふ事もあり。信は莊嚴より起り、尊とい寺は門から見ゆると、参り下向も殊勝げに、此世の樂は苦のもとひ、苦は又樂のはじめにて、人間わづか五十年假のうき世に假の宿、羊のあゆみ隙の駒、一足づゝに消てゆく、電光朝露石の火の生身は死身、なにごともみないつはりの世の中に、死ぬるばかりがまことに、無常の風はときをきらはす折またず、出物はれもの所きらはす、明日をもしらぬ身もちて、石に根つぎの家藏にこめし寶も

何ならず、まよひの種となる事は、たしかにしれた神子の口。合ふもふしぎあはぬもふしぎ、何をいふやら闇がりに鐵砲うつもおなじ事と、かきやぶりなるうまれ付、しれもせぬ地ごく極樂、うそは云がち、高名と惡口ばかりいふ人は、地ごくの上の一足癩、毒の心味、此世より未來のことこそ大事なれど、なげき入たる後生ねがひ、一子出家すれば九族天に生ずといへば、牛にひかれて善光寺参り、みな成佛はあるものと、十七八の薙力赤松うちわつたやうなうまれ付、惡所狂ひの最中の、一人むす子を剃りこぼち、鬼に衣の墨染や、三日坊主といふ事を、しらぬが佛、みぬがはな、親の心子しらすと、坊主仲間の色衣、高野大師のおしある高野六十那智八十、伊勢の淺間は限りなし、俗のむかしの女色より、まさる色なるむらさきの、帽子すがたのかげ日和、算用合て錢たらず、寺から里へもちこぶ金の罰より親のばち、あたり近所の沙汰にさへ、佛の糞を茶たうで丸め、ほんに虫もふみころさぬ、三年もあちら向て居るやうな親父も今はあきれば

て、二王の抹香喰^くたやうに親に十面、さりとてはながれわたりの世の中に、蟻の塔組むやうにして、持堅めたる身代を、未來の爲^{ため}うちこんで、法師にしたる甲斐もなく、佛の箔をこそげるとは、是ぞまことに山の芋で足をつき、飼犬に手を喰るゝ、いか様今までいく人か、坊主の惡所見ながらも、前車のくつがへるを見て後車^{ごしや}の戒と、氣のつかぬが因果ぞや。さはいふ物の世^せ倅^{がれ}めはいまだ年はもゆかぬ奴、第一和尚がきこえぬぞ、悉皆是は云傳ふ佛たのんで地ごくじやと、坊主にくさに袈裟までもにくみうらむぞおろか成。元^{もと}今どきの坊主衆の身持とがむる事なかれ、子どもの時に猿智恵で、三寸眞^ま那^な板^{いた}見ぬくとやら、山椒は小粒でもからし、目から鼻へぬけるやうな、かしこう見ゆる子どもをば、後生の種とて寺へやり、衣はくろき青坊主、又有^う徳^{とく}なる人の子のうまれ立から病身で、青びやうたんをみるやうで、地獄から火を取^とにきましたといふやうな、麻^{あさ}がらに目鼻を付、金火箸のやうな手足して、弱々しい男の子、まだ若けれど病ひ者、おと

がひて蠅追ふやうなわる達か、扱は片輪か、ごふしても云ふん有を金入れて、坊主にするが身の爲と、薯蕷が鰻にも成やうに、皆發心にあらずしてすくめ往生するくはおやまで寺へうちかゝり、餓鬼のものをひんすりや、また珠數の實を我ものと、利欲からする尼法師、こゝろは俗におどらめや。またその中にたまゝも人にしらるゝ名僧は、まれなる物と翫はやし、貧僧のかさね齋、夫に引かへ内證に守りのつよき大黒を祈る印としられける。

相場商ひの勝負はわらべに花の一さかり

惣じて人は万能一心、うちそろふたはまれな物、とかく人にはそふて見よ、馬には乗て見たもよし。百貫の馬にも足あり、能有猫は爪かくす、角のあるものは牙をかき、翅有ものは四足なし、千里を行く名馬はあれど、是を見る伯樂なしとかや。士農工商それゝに、そなはる業をそでにして、利欲に迷ふ世のならひ、

家のおもりと御目鏡に、番頭役は勤めても、依怙最屑するさばきかた、雀鷗よ
こびや螻腹立る、一盃酒に國傾き、家名よごし身をそこなふ。また百姓にうま
れては、田畑山野に身をつかひ、たゞ耕作に身をよせて、勤むる人はよけれども、
利欲にばかり氣をつけて、たゞさる山の時鳥、小利大損をしらすして、あきなひ
事にうち懸り、武家町人の付合に、詔陽魚も魚の交りと、見るを見真似に物ごの
み、至り風俗見習ひて、家内の奢いつとなく、吞むにへらいで吸ふにへる、鼠の塩
を引くやうに、干べりのする身代の、尾を見せまいと氣をもがき、千里一はね一
か六、商ひ事の手もあはず、おもはぬ損に當座がり、一寸遁れの□□も、食の上の
蠅とやら、尻もむすばぬ糸となり、損耻かいてそのゝちは、荒地の年貢はかるや
うに利銀におはれ、さまぐの工面もつきて、家屋敷田地田畑残りなく、家財諸
道具つき出し、七重の膝を八重に折り、佗もやう／＼住家さへ、泪ながらに女房
子も、舅の物で相掣の、世話でやうやく身をくろめ、世にある時はなぐさみの謠

轆も五器の實に、賣残りたる一腰も、さすがとおもふ在所では、鳥ない里の蝙蝠や、目闇へびにおちすとやら、上見ぬわしの高上り、世は元しのべとあきらめて、それで其身もくろみなば、最早のぞみもせぬがよし。燼には火が付よい、奢侈くろが出来たらば元のもくあみ童に花湯をわかつて水にする、あつたら世話も無になると、よ所でくやむも無理ならず。いかさま奢侈者久しからず、職人は職商人はあきなひに、ひじをまつ毛と心得て、外の事に氣をやらす、一心不亂一筋に、卯月八日の花より園子、銘々家業を大切に、下手の太工で切ッてはつぐど、いはれながらも世をわたる、たとひあはずと精出さば、枯木も山のにぎわひ也。世間にまれな細工人、器用く、とほめられて、人が頼めば身錢を入れ、一きは手ぎはを見せたがる。これこそほんの世話にいふ、細工貧乏人、實結構人とはやされて、安房のから名といふ事を、しらぬぞほんの南風、ぬくう見ゆるが不足錢、惣領様と指さされ、貧乏神の氏子となり、守らせ給ふうたてさよ。はやく心を

もちかへて、渡世大事とし給はゞ、幸ひこそは來るべし。

日月は正直の頭にやどる福德の三年目

遠い親子より近い他人といふなれば、近所となりを念比に、參會、遊參、夜咄しも呼ぶ人あらば、かたくなに行ぬも惡し、長居すな、客と白鷺は立ッたが見事な、槌で庭はく亭主ぶり、なくほどしたしい客にても、たてば嬉しい物ぞかし。神や佛を大切に、いのる門には福來る。それも名聞ばかりにて、いま時はやる鳩のかい、現世後生をかすがいに、だますに手なし、どちらでは鋸商ひといふやうに、跡からしれるうそ八百頭かくして尾かくさず、ひやうたんで鯰おさへたやうに、ぬらりくらりと世をわたる、出家山伏神子、觀人をだますにあらねども、皆欲ゆへにだまざるゝ、とかく身すぎと死病に、あだな事はない物なり。かせぐに追付貧乏なし、すいぶん家業にせいを出せ、上こん目出度や藏建て、下こんの立

たる藏もなし。ならばぬ經はよみがたし、初手から長老あらざれば敵の助言も能ばつけ、しらぬ事をしつた顔尻から薬が出るものぞ。酒屋の門に三年立てても、呑ぬ酒にはゑひもせず、今日まであしき人なりとあらたむるに憚る事なかれ、こゝろで心をあらためて、善にもとづくその時は、毒やく變じて藥と成、雨ふつて地かたまる、酒の酔本性わすれずといへば、ぎやつと生れたその日より、誰をしへねど善惡を知るは、佛生同躰の此身の徳とおもふべし。たゞ何よりも世わたりを、大事／＼とおもひ寢の、おもふ事は寢言にいふ、内裏上郎もくはねば立す、用心には繩を張れ、立よらば大木のかげ、旅は道づれ世はなさけ、人はなさけの下にすむ、立身出世した上で、恩ある人をそでにすな、暑さわすれりや陰わする、雪で作つた猿松も、恩はわすれぬ物ぞかし。人のこゝろと秋の空、夜の間にかはる飛鳥川、負た子にをしへられ、淺瀬をわたる我身に人ごといはゞ目代おけ、細工は流々仕上が大事、へたの長談義高座の妨、まことに猿の尻笑

たる藏もなし。ならばぬ經はよみがたし、初手から長老あらざれば敵の助言も能ばつけ、しらぬ事をしつた顔尻から薬が出るものぞ。酒屋の門に三年立てても、呑ぬ酒にはゑひもせず、今日まであしき人なりとあらたむるに憚る事なかれ、こゝろで心をあらためて、善にもとづくその時は、毒やく變じて藥と成、雨ふつて地かたまる、酒の酔本性わすれずといへば、ぎやつと生れたその日より、誰をしへねど善惡を知るは、佛生同躰の此身の徳とおもふべし。たゞ何よりも世わたりを、大事／＼とおもひ寢の、おもふ事は寢言にいふ、内裏上郎もくはねば立す、用心には繩を張れ、立よらば大木のかげ、旅は道づれ世はなさけ、人はなさけの下にすむ、立身出世した上で、恩ある人をそでにすな、暑さわすれりや陰わする、雪で作つた猿松も、恩はわすれぬ物ぞかし。人のこゝろと秋の空、夜の間にかはる飛鳥川、負た子にをしへられ、淺瀬をわたる我身に人ごといはゞ目代おけ、細工は流々仕上が大事、へたの長談義高座の妨、まことに猿の尻笑

ひ成べし。

寶曆三年酉正月吉日

佐洛

書工 岡山友右

京六角通ふや町西へ入丁

書林 岡 權兵衛板

婆娑彌次郎（笑謠）

次第へ教への道も釋迦に經。く。知らぬが佛なるらん。ワキ詞へ是は天竺の横町に知つた粉糠商ひもせず。喰はす貧樂と申す僧にて候。我いまだ住めば都を見ず候程に。百貫に編笠一蓋にて。しびり京へのぼり。又よき序なれば。牛につられて善光寺へ參らばやと存じ候。道行おもひ立つ日を吉日と。く。我古里をでる杭の。打てば響の灘も過ぎ。遠いは花の香をきゝて井の内の蛙大海を。手でせく灘をよそに見て。藪の中にも功の者。座頭の日高に著きにけりく。ワキ詞へ日暮れて道を急ぎ候程に。引手あまたの里に著きて候。めくらの垣を覗いて見れば。烏が鶉のまねを致し。川向ひの喧嘩の候は。蛙のつらに水掛論と見えて候。又たふとい寺は門からと。佛の顔を三度撫で。鳴の看經せんと思ふ折節。寺から里へ是は迷惑。俄に

母衣武者の夕立がいたし候。大木の蔭に立寄り。箕賣笠にせばやと思ひ候。
シテへなふくあれなる御僧。雨ふつて地かたまれども。頼む木蔭に雨ふ
り候程に。此圓座を笠に召され候へ。ワキへ借る時の地藏顔。扱々御身は
いづくの牛の骨ぞ。盗人どらへて名は何と申し候ぞ。シテへ年を問ふより
世を問ひ給ふ。是は金^{カネ}が金をまうけもせず。石の上に三年居て温まりし。
婆婆の彌次郎と申す者にて候。ワキへ扱は貧して鈍もせず。毒にも藥にも
ならぬ人にて候ぞや。然れば藝は身を助くれば。借屋かしておもやなりし。
破鍋^{ヒナ}に綴蓋^{トビフタ}の嫁入委しく語り給へ。シテへそれこそすぎに赤烏帽子。猿の
冠ぬぎ捨てて。借著^{カリギ}せうより洗著^{アラヒギ}の。鬼に衣の衣紋つくろひ。竿の先に鈴
つけて。法樂の一倍かなでけり。上セル扱も其夜になりしかば。月夜に釜をぬ
かれしと。提燈に釣鐘。狐の馬乗さを拂ふ。ワキ詞へ掣引出物は扱いかに。
ワキ詞へ高名せよと抜かぬ太刀。ワキ上へ扱勝手には。シテ上へ杓子定木^{ヨコジキ}のこ

ろまな板。詞命^イは食にありといふに。傾城買ひの糖味噌汁。座頭に熱湯^{アツク}寄せけり。ワキ上へ座敷の躰はいかなるぞ。シテへ爪に火ともし晝の如し。唐人の若衆酌をとり。引渡され者の小唄聲をあげ上詞本性を忘れぬものは酒の酔。く。身を捨てゝこそ浮む瀬で。呑めや諷へや闇の夜に。一寸先は尻くらい。下戸の建てたる藏もなし。クリ地それ論語よみの論語知らず。孔子も時に遇はず。窮鼠却つて。猫をはむ。サシへ一寸の虫にも五分の魂。二間の間にて三間の。槍持槍を使はねば。金持金を使はず。つゞれのきれに。錢つなぐ。クセ壁に馬。乗りおくれじと船頭の。多くて山へ行く船の。竿竹で星かつ。親の光は七光り。子を捨つる藪はあれども身は捨つる。藪こそはあらかねの。つちにて庭をはきちぎる。貧僧の重ね齋^{イハ}。ひちもはづれ弘法も。筆のあやまり猿さへも。落つる木に竹耳とつて。花はみよし野人は武士。武士はくはねど高楊枝。鶯がうんだる。鷹は飢ゑても穂はつまず。

シテ上へ雀は百になるまでも。踊忘れず正月も盆も一所にせはしなき。犬の手も人の手に。取り得ん事は不定なり。こけた所で火打石握拳もはづれぬ。上ロンキ地へよい中に垣をせよ。／＼。蛇の道へびといふ事を猶々語りおはしませ。シテ上へ伊勢や日向の物語。地獄の沙汰も錢次第。燈心で竹の根を。根ほり葉ほりに問ひ給へ。地上へげに／＼袖のふり合も。他生の縁にひかれつゝ。猿のあませし澁柿の木で。鼻くゝるたとへあり。シテ上へそれこそいたか放せなり。上詞いたい上をば叩かれて。戻れば寢よきものぞかし。シテ上へ扱は果報は。寢て待ても。上同縁の下の舞もすぎ。／＼。甘露の日柄かき高に。皿に桃をぞもりにける。まだ見ぬ京の物語。一人もひとり唐へ投金のあての槌。闇の磔や打解けて下手の長談義是までぞ。すぐちがゑくば口を閉ぢ。膝頭にて東路へ。行くへも知らずなりにけり。

朝鮮の諺

朝鮮の諺を蒐録したる『耳談續纂』といふ小冊子あり、四言二句に漢譯して、之に簡短なる解釋と韓字の本文とを添へ、其數すべて二百四十一章、之に附載するに經史中の漢諺百七十八章を以てす、その採録する所固より博しといふべからざるも、楊慎の『古今諺』、貝原好古の『諺草』、井澤蟠龍の『本朝俚諺』等に比して、數においてはさまで逕庭なし、此國にして此事あるは殊勝の至なり。

その語概ね平凡尋常にして、警拔尖銳なるもの多からずと雖も、間々佳諺なきにしもあらず。今まづ我國の諺と外形内容共に同一なるものを示さんに

三歲之習、至于八十

三つ子の魂、百まで

我腹既飽、不察奴飢

主腹よくて人腹知らず

唯筒無藏、是以錦裳

常上著の晴著なし

牛耳誦經何能諦聽

談虎虎至談人人至

有爲其騰我視作鷹

全椒不末吞不知辣

予所畜犬廻噬我孺

竈苟不燃突豈生煙

甘言之家鼓味不嘉

聞則是病不聞是藥

縑纒々々猶然錦縷

巫不自祈薯昧終期

既歿之子胡算其齒

哀彼春雉自鳴以死

牛に經文

噂をすれば影がさす

鳶もゐすまひから鷹と見える

胡椒の丸吞

飼犬に手を嚙まれる

火の無い處に煙は立たぬ

手前味噌は鹹い

聞けば氣の毒見れば目の毒

ちぎれても錦

陰陽師身の上知らず

死んだ子の年を數へる

雉も鳴かずば打たれまい

清跋鼠矢、不辨彼此

味噌も尿も一所

是等は偶然の暗合か、はた何等かの交渉其間に存するか、たやすく断じ難きも、飼犬に手を噛まれる、死んだ子の年を數へる等の如き、その類似の甚しき考察の價值なくんばあらず。異語同意のものに至つては、我が「黒犬に噛まれて釜尻におづる」を嚇于鼈者、尙驚鼎蓋といひ、紺屋の白袴を鍛冶家世、食刀乏些といひ、舅の酒で相婿もてなすを母將社酒以悅吾友といふ類頗る多し。

他人之餌、聊樂歲始

人の餌で相撲とる

不啼之兒、其誰乳之

黄金刀も請うて見よ

遂彼山豕、竝失家彘

虵蜂とらす

膚爛之救、吾先兒後

熱火子に拂ふ

鵲效鵲步、靴裂厥脰

鵲の眞似する鳥は水に溺る

五月炙火、猶惜退坐

貰ふ物は夏も小袖

懸龜之背、草蛸載螫

相被蚯蚓、踐之則盡

山下卜宅、春杵雖樓

既喪其馬、乃葺厥厩

我所珍度、竟歸人尿

豈與狗爭、而往溷園

十人之守、雖敵一寇

莫以狗子、監此麴鼓

夫婦之譬、如刀割水

善攀者落、善泗者溺

一日之狗、不知畏虎

烏狗之浴、不變其黑

鹿の角を蚊が螫す

一寸の蟲にも五分の魂

有る物に事を缺く

葬禮すみての醫者話

たばふ物を蟻がくふ

癩者と棒打ち

守り手の隙はあれど盗人の隙はなし

猫に肴の番

夫婦喧嘩と谷川の濁はすぐにすむ

河童の川流れ

盲蛇におちず

木患子は三年磨いても白くならぬ

狗尾三萩、不成貂皮

鳶鷂三紀、乃獲一雉

蔬之將善、兩葉可辨

蟹子雖織、蟹已知筭

舌下有折、人用自戕

由惜一瓦、梁摧大廈

孩兒之言、宜納耳門

妻毆雖弄、恒受則痛

既乘其馬、又思牽者

乞食の子も三年すれば三つになる

梅檀は二葉より芳し

蛇は寸にして其氣あり

口は禍の門

一文吝みの百失ひ

膝ども談合

佛の顔も三度

おぶへば抱かれう

因果は車の輪、己にいづるものは己に還るを語りて、投石石來、擲餅餅回といひ、せいては事を爲損じ、急歩に善歩なきを教へて、饕々之食、必咽其嚙といひ、樂屋で聲を囁らし、いたづらに椽の下の舞に終る愚を説いて、暗中瞬目、誰知約束

といへるも妙なり、啖梨之美、兼以濯齒は、一舉兩得の意を具體化して人の意表にいで、西瓜外祗不識内美は、叩いても心の知れぬ西瓜かなど畑を同じうす、一汗菜園終疑此狗、これ「常が大事なる所以、活人之嚙、蛛不布網は、我が命あれば食あり」と精出せば氷る間もなし水車とを打して一丸とせるものにして、佳諺たるを失はず、恩怨の永く記憶せられざるを説いて、經夜無怨、歷日無恩といひ、自衛の暫くも已むべからざるを教へて、瞬目不亟、或喪其鼻といへるも、亦頗る雋味あり、盜以後捉、不以前提とは、面貌を以てせず、背後に負ふ所の贓品を以て、論より證據有無をいはせず、拉し去るべきをいふ、駟馬所載、難任蚤背は、莊子の蚊蚋負山といへるより、大小強弱の懸隔著しきと共に、多少形貌の類似ある兩者を對比したる所に、一層比喩の適切なるを覺ゆ、釜底鐺底、煤不膏詆は我が「目屎、鼻屎を晒ふ」漢諺の土偶誦木偶、英諺の The kiln calls the oven, 'Burnt house' と鼎立すべきものなるが、不膏詆と消極的に説明したるが疵なり、窮人之事、翻亦破

鼻は、佛諺の He falls on his back and breaks nose と全然同工にして、邦諺の「轉べば尿の上」より奇麗なり、秘密の洩れ易きを説きて「壁に耳」といふは、最も古く且最も廣く行はるゝ世界的諺の一なるが、此に畫言雀聽、夜言鼠聆とあるは、同一窠臼を脱して一機軸を出せり、我國にも深く秘するを「鼠にも知らさぬ」といふに似通へり。

百家之里、必有悖子

十室の邑必ず忠臣ありと相表裏す。

人飢三日、無計不出

小人ならざるも亦窮すれば濫すべし。

灌頂之水、必流于趾

語淺くして意深し。

我厭其餐、予狗則慳

正に是れ棚にも置かず犬にもくれざるもの。

無贈弟物、有贈盜物

所親を飢ゑしめて、盜賊の腹を肥やす、世間這般の

有財餓鬼多し。

婦老爲姑、靡不效尤

二言めには、わしの若い時は。

農夫餓死、枕厥種子

先視爾耨、乃展厥足

雖臥馬糞、此生可願

享牛無賊、剥栗難藏

發怒蹴石、我足其圻

羹之方沸、固和厥味

羹啜泥餼、噫發騰虬

全癡誇妻、半癡誇兒

既終夜哭、問誰不祿

梨腐予女、栗朽予婦

時の用には鼻をも削ぐ、冥途の土産には何になる。

靴にあはせて足を削る勿れ。

事大主義の鼻摘みなる所以。

法律萬能の當世を嘲るものの如し。

打つ手に好き手なし、要打没好手、厮罵没好口。

事急にして理否を忘る、忠兵衛元來悪い蟲。

西國で百萬石も取つたといふ大盡顔の糠味噌臭

い息。

妻を誇るは尙可なり、妻の家を誇るは如何。

誠に以て御愁傷千萬、時にごなた様が御不幸で。

夏の火は女に焚かせ冬の火は嫁に焚かせとは、表

向の義理立、内々はいづくも同じ親心なるべし。

上圖而歸、心異去時

人情の機微を穿ちて玄妙佳諺なるかな。

興に乗じて評にもあらず解にもあらぬ蛇足を加へて、罪を故人に獲たり、讀者は以上列舉する所によりて、ほと韓諺の如何なる色味を有するかを推知せるなるべし。國民性を代表する程の特色あるものは耳談續纂二百四十諺中に發見する能はず、たと縣宰生活雇工生活の一語は、朝令暮改變轉常なき此國の官吏生活の一端を道破し得たりといはざいはるべきも、是とても此國にのみ限りたる事にもあらず、汎く一般に應用せらるべし。材料として用ひられたる動物中

一日之狗、不知畏虎

索綯爲罟、尙或捕虎

留子之谷、虎亦願復

狗貸虎狼、豈望報償

虎之方睡、莫觸其鼻

談虎虎至、談人人至

の如く、比較的虎の多きは、歐洲の諺に羊に關するもの多きと等しく、さすがに國柄なめりと頷かる、殊に最後の一章は、支那の談鬼鬼至、談人人至の鬼を虎に變へたるものにして、江を踰えて橘の根となる一適例とすべきなり。

諺と俳諧

俳諧を考證の料に供せし者前に京傳の骨董集、種彦の用捨箱、還魂紙料の類あり、後に喜多村節信の嬉遊笑覽あり、これ元より是等の人々が學問嗜好のこゝにありしに因ると雖も、芭蕉の所謂俳諧は平談俗語を厭はざるを以て、民間の風俗野説を窺ふに便宜多く、且引用舉證するにも手輕にて都合よければなるべし。余の俳諧を蒐集するや、亦古俳書を涉獵して獲る所少からず、今日俗間に行はるゝ者にして、既に貞徳時代の書に見ゆるものあり、亦早く亡びて、今は行はれぬもありて、粗、その流行の前後新古を推定すべく、且之に由りて俳諧と俳諺との關係如何より、俳風の變遷、俳諺應用の手段巧拙をも察すべきものあれば、煩を厭はず、採録して世に示さむとす、題して諺と俳諧といふも、充棟の書固より一々讀破し得べきにあらざるを以て、まづ犬筑波鷹筑波毛吹草の三

書を擇びて、古俳諧を代表せしめ、芭蕉以後のものについては、觸目するまゝに探録せり。蓋し俚諺と俳諧との關係、最も密接なるは、蕉風以前主として貞徳派にあり。此に引用せる句に據りて觀るも、貞門の句がいかばかり幼稚にして、無趣味なるかを知るべく、随つて芭蕉が改革の功を偉とせざる者なからむ。尙貞徳時代と芭蕉以後とに於て、俳風の變化、作句の巧拙、趣味の深淺に、大逕庭あるを示さむが爲に、同一の諺を應用せる數例を擧ぐべし。

牛は牛づれ

丑の年丑の元日なりければ

年も日も牛は牛づれの年始かな

失名（毛吹草）

降らば降れ牛は牛づれ秋の暮

素堂

雪のはては涅槃

白雪の佛の果も涅槃かな

失名（毛吹草）

春哭亡師

雪はいざ師走のはての涅槃かな

田 福

子を思ふ闇

闇に迷ふ獵師は鹿の子ゆゑかな
親竹の子を思ふころや五月やみ
竹もまた子ゆゑに暗し木下闇

失 名 (毛吹草)
重 方 (鷹筑波)
也 有

鳥なき里の蝙蝠

蝙蝠が王する里かほとゝぎす
蝙蝠や鳥なき里の飯時分

弘 永 (毛吹草)
一 茶

木に竹をつぐ

木に竹をつげるためしか藪椿
鶯や木に竹ついでゆき戻り

清 政 (鷹筑波)
百 池

末の露本の雫

末の露本の濕氣の早松茸
もとの露末のしづくや老木槿

正直 (毛吹草)
曉臺

夜の錦

水底は夜のにしきか紅葉鮒
實盛が紙衣はよるの錦かな

昌意 (毛吹草)
蕪村

花より團子

花よりも團子とたれか岩つゝじ
花よりも團子で見たや二十日草
團子より勝るといふや萩の花
團子より花といふべし二十日草
ありやうは我も花より團子かな

(犬筑波)
時之 (鷹筑波)
道保 (同)
實繼 (同)
一茶

一河の流一樹の陰も他生の縁

陰にやどり見るや一樹の花の縁

充 繼 (鷹筑波)

たゞ一樹もつや多生のゑんざ柿

靜 壽 (同)

木のかげや蝶と宿るも他生の縁

一 茶

虎は千里の藪にすむ

月に雲千里晴れゆけ寅の時

良 繼 (鷹筑波)

千里飛び毛を振ふ雁やとらまだら

政 盛 (同)

虎の尾も咲くや千里の今年竹

乙 由

猿も木からおつる

猿も木からおつる譬の木の葉哉

定 之 (鷹筑波)

木枯や木から落ちたる猿の尻

曉 臺

背に腹はかへられず

せなかに腹はかへられもせず

降る雪をおひても鳥は餌を拾ひ

安信（鷹筑波）

夕暮は鮎の腹見る川瀬かな

鬼貫

看よ、貞徳派の句は、たゞ辛うじて諺を句中に挿み得たりといふまでにて、何の働もなく、拙き地口たるに過ぎず。之に反し蕉風のは、佳句と目し難きものも、猶多少の機轉あり、興趣あるにあらずや。三書中より拾得せしもの、すべて百六十餘種、其中稍、耳遠く、解し難しと思はるゝものには、間々解釋を附して、順次記述せむとす、蛇足に似たれども、斯道研究者のために少補なきにしもあらざるべし。

因にいふ、犬筑波は山崎宗鑑の著にして、永正十一年（？）に成り、鷹筑波は松永貞徳が、其門人山本西武に命じて編集せしめしものにて、寛永十五年の跋ありて、同十九年刊行、毛吹草は貞門の松江重頼が編する所、寛永十七年の序ありて

開板は正保二年なり。

高野六十那智八十

論語　よ　ま　ず　も　　齡　六　十

經をのみ専らにする高野山

重利（鷹）

八十になる年ははづかし

那智邊にさもこそ戀のはやるらめ

吉忠（同）

高野には六十、那智には八十になる小性ありとの諺なり。犬子集にも六十になれど心は若やぎて、高野も今は戀の最中など、その例多し。

夢に王する

元日未の日なれば

年越のゆめも王たりひつじの日

西武（鷹）

之と同義の諺に「夢に富する」といふあり、源氏行幸の巻及び宇治拾遺にいで

たり、共に邯鄲の故事より起りしと見ゆ。

人間萬事塞翁の馬

萬事よき春や塞翁が午の年

靜壽（鷹）

耳を取つて鼻をかむ

耳とつてかむとやいはん菊の花

西武（同）

寵愛高^{カッ}じて尼になす

仙人や寵愛高じてあま蛙

西武（同）

塞翁の故事は淮南子にいづ、耳をとつて鼻かむは、とつてもつかぬ譬にて、耳とつて鼻をかみ、蒟蒻を積んで石垣につくやうな言分など、古き小説に見ゆ。

寵愛高じて尼の語、毛吹草世話の部にいで、八文字舎の『誰が身の上』にも、寵愛こうじて尼になるとの諺、昔の佛御前に限らずなど、用ひられたるに關せず、巢林子の『賀古教信七墓廻』には、幼き者に強異見、頂禮こうじて尼ヶ崎となし、青

木鷲水の『故事要言』にも、同じく頂禮となし、假初の信心より佛道に入るにたどる由、解釋せり。思ふに頂禮は寵愛より轉訛せしものならむ。時代よりいふも毛吹草最も古く、意味よりみるも寵愛の方勝れり。

花は根に鳥は古巢に歸る

花や根にさらばくの春のくれ

政昭(毛)

花は根にかへる筋目か絲ざらく

定次(同)

雪花も木の根にかへる雪かな

弘永(同)

たち歸る古巢はいづく酉の年

定時(鷹)

和歌にも謠曲にも用ひられ、俳諧にも例句多し、意味も雅に、口調もよければなるべし。千載集に、花は根に鳥は古巢に歸るなり、春のどまりを知る人ぞなき。

寶の山に入つて手を空しうす

折らすんば空し寶の山ざくら
重頼（毛）

瓢箪から駒

瓢箪がいづる月毛の伊駒山
政昭（同）

瓢箪の駒もいづべき春野かな
良傳（同）

せんひきか瓢箪からの駒むかへ
西武（鷹）

親に似ぬ子は鬼子

親に似ぬ聲は鬼子かほとゝぎす
政昭（毛）

足下から鳥

たちくるや足もどからの酉の年
政昭（同）

寶の山は佛經中に多き譬喩にて、瓢箪から駒はもと禪家よりいでし語ならむ。

落花枝に還らず破鏡再び照らさず

落花枝に歸りて咲くや木々の雪

吉満（毛）

半月は再び照らす破鏡かな

政昭（同）

五燈會元十三、落花難上枝、破鏡不重照。

蛭に鹽

風に散るは蛭に鹽竈櫻かな

定主（鷹）

夜目遠目笠の中

夜目遠目かさの中より月の顔

重頼（毛）

いとしき子に旅させよ

いとをしき子も旅させよ秋の雁

重頼（同）

濡手で粟

ぬれ手にて淡雪つかむ蕨かな

重方（鷹）

二八月に思ふ子船に乗すな

めぐりくる二八月こそ程なけれ
舟路の旅はとめむ思ひ子

重頼(毛)

二八月は暴風多ければなり。

いづる日蕾む花

今朝やげにいづる日蕾む花の春

貞盛(同)

信あれば徳あり

信あれば年徳もあり今日の春

重供(同)

笑ふ門に福来る

福德の門口やわらふかざり縄

貞盛(同)

知らぬが佛

踏み見ても雪に知らぬが佛の座

重貞(同)

釋迦に經

嵯峨野にてなく鶯や釋迦に經

失名（毛）

難波の蘆は伊勢の濱荻

濱荻といせあらそひか松の聲

重頼（同）

菟玖波集十四雜連歌、草の名も所によりて變るなりといふ句に、救濟法師、難波の蘆は伊勢の濱荻と附けたるを嚆矢とす。犬筑波の切りたくもあり切りたくもなしの附句、盜人を捕へて見れば我子なり、と共に人口に膾炙して諺となれり。當時此類の秀句流行せしと見え、鷹筑波にも、

腹たちけれど腹たゝぬなり

うはなりを捕へて見れば妹にて

久甫

腹はたてどもをかしかりけり

こはざれを云ふく人のこそぐりて

忠俊

など類似の趣向少からず。『雄長老百首狂歌』の附録に、一笑話あり。曰く、或

寺へ旦那より大なるありの實一つ送りければ、これについて一句すべし、よく附けたる人に、此梨をまるらせむとて、坊主、

切りたくもあり切りたくもなし

硯箱のかけごに餘る筆の軸

大ちご

月かくす花の梢を見るたびに

小ちご

いづれも心をつくしのたまへば、新發意まかりいで、某も一句申さむとて、

梨ひとつ惜む坊主の細首を

といひければ、坊主腹をたて、彼の梨をうちつけければ、やがて取りてにげける。

兵庫の者は御免ある

御免あれ兵庫の月に秋の雲

重頼（毛）

三界に垣なし

三界に垣もありとや夕がすみ

武清（毛）

一寸のびれば尋のびる

すのびば尋のびぬべし絲柳

失名（同）

いはぬはいふに勝る

いはねどもゆふにぞ勝る柳髪

道二（同）

網の目に風

網の目に風もたまるや春がすみ

望一（同）

魚とめて風をば漏らせあふぎ網

長次（鷹）

いはぬは言ふに勝る、網の目に風、共に古き諺なり。古今六帖、心には下ゆく水の沸返り、いはで思ふぞいふにまされる。風雅集、いふよりもいはで思ふは勝るとて、問はぬも問ふに劣りやはせじ。源氏末摘花、いはぬをもいふに勝ると知りながら、おしこめたるは苦しかりけり。同横笛、ことにいで言はぬはい

ふに勝るとは、人に恥ぢたる氣色をぞ見る。古今六帖、人の心をいかゞ頼まむ
といふ句に、人々上の句をつけたる中に、貫之、網の目に吹きくる風はとまると
も。散木集、思はむと頼みしことは、網の目にたまらぬ風の心ちなりけり。又、
吹き迷ふ風しとまらぬ網の目に、いかで涙の浮ぶなるらむ。兼證集、ぬきふと
み風とまるべくあらねども、こを網の目のためしにはひけ。

鬼に金棒

金棒かおのが枝つよき鬼あざみ

正直(毛)

苦は色かはる松の風

重貞(同)

苦は色をかゆるや花に雨と風

花に風

花に風不吉を見るか蝶のゆめ

貞盛(同)

花に風吹かぬは吉野しづかな

道節(鷹)

目から鼻へぬける

めから入つて花へ出るや木々の露

勝俊（毛）

才覺の花散り

よせつぎやよき才覺の花の枝

道二（同）

貧の盜

いけむため折るは花貧の盜かな

失名（同）

忠が不忠になる

さかりには忠が不忠よ花の雨

政公（同）

雲に梯

おのが枝や雲にかけはし花盛

宗除（同）

知りて知らざれ

散る頃は知りて知らざれ木々の花

正章（同）

寝たまが佛

ねたるまを佛といはじ花ざかり

弘永(同)

花も實もあり

花も實もあるやをしへの文詞

重頼(同)

女の智慧は鼻のさき

女房のちゑや末摘むはなのさき

清政(鷹)

主と病には勝てぬ

勝たれぬや主とやまひと花の風

貞盛(毛)

竿の先の鈴

竿のさきの鈴 榮ふるまふ言葉哉

良繼(鷹)

判官びいき

世や花に判官びいき 春の風

失名(毛)

藝は身を助ける

藝は身を氣をたすくるや花盛

政公（毛）

判官びいき、又曾我びいきともいふ。弱者には自ら同情多き所以。錦花翁
隆志の附句、藝は身を助くる程の不仕合といふも、亦諺となるに至れり。

前に譽むる者は後に毀る

前にほまれうしろや毀る山櫻

失名（毛）

都は目はづかし

都人の見る目はづるな伊勢櫻

宗房（同）

面々の楊貴妃

面々の楊貴妃なれや家ざくら

政公（同）

念力岩を通す

また見むの念力とほれ岩つゝじ

重貞（同）

氏よりそだち

氏もよしそだちもよしや藤の棚

宗房（同）

聖人に夢なし

聖人も見るや胡蝶のゆめの舞

政公（同）

果報は寢て待て

寢て待ちし果報か花にとぶ胡蝶

失名（同）

果報まつや子祭の月の白鼠

長以（鷹）

親は泣寄

廣き野も親は泣きよりの雉子哉

一正（毛）

怪我の高名

春なくや怪我の高名ほとゝぎす

静壽（同）

鬼も十八

鬼百合もいま十八か花ざかり

失名(毛)

若ばえはまだ十八か鬼あざみ

重次(鷹)

名人人を譏らず

名人も鳴かずはそれ時鳥

正章(毛)

初なさゝやき後のとよみ

後やとよむ初さゝやく時鳥

重定(同)

天知る地知る

忍ぶなよ天知る地知る時鳥

武清(同)

岩もものいふ

岩さへも物はいふとよ時鳥

失名(同)

大名は大耳

大名も大耳はせじほとゝぎす

重頼(同)

さゝやき八町

さゝやくも八町ひゞけ時鳥

重方 (同)

熱火子に拂ふ

竹も子に拂ふあつ火か飛ぶ螢

定時 (同)

撫子に熱火やはらひ飛ぶ螢

一正 (鷹)

熱火をばげに子にかくる巨燧哉

(大筑波)

此諺佛説に基く。十善戒經に曰く、爾時世尊爲化彼女、以神通力作四夜、又、又、又、各擎火山、從四面至、火在遠時、女自以身及隨身服障蔽此子、火漸々近、舉手覆面、以兒遮火、乃至唯願救我、不惜此子。

一聲二節

一聲に二節もあるやほとゝぎす

正依 (毛)

提灯に釣鐘

提灯かつりがね草にとぶ螢

失名（毛）

片荷輕くてもちやかねけむ

釣鐘を提灯賣にいひつけて

（犬）

燈火消えむとして光をます

消えむこてます燈火か飛ぶ螢

重貞（毛）

龍馬のつまづき

五月雨の晴間や龍のけつまづき

正章（同）

世はもとのび

よは本を忍び竹なる子どもかな

重貞（同）

末の諺は憂しと見し世ぞ今は戀しきといふ歌と同意なり。

急がば廻れ

雲路をばいそがば廻れ夏の月

正直（毛）

瓜二つ

似たものぞ二つにわつた瓜と瓜

弘永（同）

見るを見まね

海士の刈るみるを見まねの子供哉

永治（同）

瓢箪の川ながれ

熱き日や瓢箪しば／＼川ながれ

徳元（同）

鰯の頭も信じから

信じからいと涼しき鰯舟

靜壽（同）

上戸の額盆の前

夏の日は下戸も上戸の額かな

信安（同）

手が入れば足も入る

手が入れば足も入れたき清水かな

正依（同）

草苞に國傾く

草苞に國もかたむく綜かな

未久（毛）

草づとに月も傾く夜露かな

守榮（鷹）

初きらめき奈良刀

朝顔の花のひかりや奈良刀

永治（毛）

草苞は苞苴にて、賄賂の意なり、奈良刀は鈍刀の名高し。

大海を手でせく

大海を手柏でせく霧間かな

正直（毛）

大海を手にて節句の汐干かな

勘十郎（鷹）

女に家なし

三つの家なしとや野邊へ女郎花

正甫（毛）

女かしましい

數多いけむ姦しくとも女郎花

宗 頼 (同)

落武者薄の穂におづ

失 名 (同)

秋風に露や落武者すゝきの穂

壁に耳

壁に耳ありとや鳴かぬきりぐす

望 一 (同)

居すは出合へ

時鳥ゐすは出合へか鵲の聲

宗 房 (同)

慈悲は上から禍は下から

影たのめ慈悲は上より下り月

重 頼 (毛)

禍や下からくもる空の月

定 春 (同)

禍は霜から犯す草木かな

定 之 (鷹)

大は小を兼ね

大は小に叶ふや露に月の影

貞盛(毛)

上を學ぶ下

上を學ぶ下とやいはむ水の月

道二(同)

猿猴の水の月

柄杓にて水の月とる猿手かな
猿猴がうつる月とる水びしやく

永治(同)
元風(應)

人は一代名は末代

くもるなよ名は末代の秋の月

望一(毛)

鹽で淵を埋む

鹽で淵をうづむたぐひか菊の霜

正章(同)

習ふより慣れよ

習はねど慣るれば露に色葉かな

道二(同)

爪に火ともす

爪に火やともす蛙手のむら紅葉

すきに赤烏帽子

すかば赤き烏帽子櫻の紅葉かな

身から出た錆

身から出すさび鮎もよき料理哉

身から出た錆か夕立のにごり水

秋茄子嬢にくはすな

掣ならばくはせむものか秋茄子

さはり三百

おとす葉やさはり三百木々の風

スキ
推より行

弘 永 (同)

昌 意 (同)

意 敬 (同)

西 武 (鷹)

正 直 (毛)

安 明 (同)

中々にするより行や富士の雪

永治（毛）

頬を顔

杜若といふや頬をかほよばな

弘永（同）

「推より行は才智より修行の重んずべきをいひ、頬を顔は名は異にして、實は同じきことに喩ふ。」

針を棒

針を棒にいひやなさまし松の雪

弘永（毛）

籠で水汲む

籠にさへ水を漏らさぬ氷かな

正章（同）

青葉は目の藥

夏山は目のくすりなる新樹かな

貞繼（同）

鬼神に横道なし

花さけば横道もなし鬼あざみ

政昭 (同)

鬼百合は横道もなき色香かな

政昭 (同)

馬の耳に風

馬の耳にあやかれ風の犬ざくら

弘永 (同)

雨ふりて地かたまる

雨ふりて土かためたる氷かな

永治 (同)

鴨寒くして水に入る

鴨寒みたびく水におり湯かな

不案 (同)

水鳥陸に迷ふ

水鳥や陸にまよはむ厚氷

秀重 (同)

鶏寒上樹鴨寒下水はもと支那の諺なり。水鳥陸に迷ふの喩は、早く源氏玉

葛に見えたり。

十歳の翁百歳の童

冬さくやこや十歳の翁草

正友（毛）

炒豆に花

炒豆に花のためしか除夜の雪

伊伯（同）

炒豆のすまじろひ

鬼や人にけふ炒豆のすまじろひ

玉龍（同）

孫は笛吹く

鶯のそんは笛ふく小春かな

政公（同）

京に田舎あり田舎に京あり

田舎にも京あり花の春たちて

霞める山に見ゆるあき人

失名（同）

高野聖に宿かすな

犬と猿

犬と猿の中立なれや酉の年

一葉子（同）

智慧の鏡も曇る

智慧の鏡もくもる運の月夜かな

同（同）

くらげも骨に逢ふ

くらげもや骨にあふ氣か海の月

同（同）

夫木集、仲正、我戀は海の月をぞ待ちわたる、くらげの骨に逢ふ世ありやと、今昔物語、増賀上人、みつわさす八十あまりの老の波、くらげの骨にあひにけるかな。

長居はおそれ

山だちや腰に鞆をさげぬらむ

長居はおそれありとこそきけ

玄康（應）

目の上の瘤

目の上を雨のうつにやこぶ柳

久甫（鷹）

似たものは鳥

著莪の葉が似たものの烏葵かな

重元（同）

伯父が甥の草刈る

おちく道をとほる草かり

彼の岡の甥をや主とたのむらん

重次（同）

おんざの初物

花見ればおんざのはつや遅櫻

同（同）

雀百まで踊忘れず

百になつてもをどりこそすれ

瓢箪の垣穂にとまるむら雀

重次（同）

一夜檢校

夏きてや一夜檢校ころもがへ

幸治(同)

檢校のすゞみにくむや一夜酒

永良(同)

憎まれ子世にいづる

竹垣の世にいでたるや憎まれ子

幸治(同)

腐つても鯛

くさつたれど身は吉野かな櫻鯛

仲宅(同)

正直の頭に神宿る

正直のかうべ禿げてや神無月

吉廣(同)

牛を馬に乗りかへる

牛を馬にぞ乗りかへにける

武家にでて知行給はる御百姓

明順(同)

あはれ
かり給ま

門前の小僧習はぬ經をよむ

山寺に習はぬ經か蟬のこゑ

永良（鷹）

色を見て灰汁^{アツ}をさせ

あくならで色を見てさせ花の枝

元風（同）

毛を吹いて疵

疵やあると毛を吹く風か犬櫻

正直（同）

鬼の目に涙

鬼の目に涙か百合の花のつゆ

道節（同）

氏なくて玉の輿

氏なうて乗る小車や花のつゆ

道保（同）

老いて再び稚兒となる

山の芋老いて二度ぬかごかな

好宣（同）

蒔く種や老いて二たび兒ざくら

正則（同）

雪とすみ

山しろに似ぬ黒谷や雪とすみ

守榮（同）

弓折れ矢盡く

出ぬ時はこれぞ弓折れ矢は月夜

重和（同）

古筆はきりくすになる

古筆や自然に聲のきれくす

當信（同）

逢うた時に笠をぬげ

逢うた時笠をぬげかしもち月夜

正則（同）

屏風と商人はすぐでは立たぬ

すぐでは立たぬ世のなかぞかし

商人の屏風にしのをしつらひて

定之（同）

仲人は宵のうち

酒は只よひの程こそをかしけれ

さらばといひて歸るなかうど

同 (鷹)

夕立は馬の背をわける

汗も流るゝみづも流るゝ

夕立はせめゆく馬の背をわけて

茂 昭 (同)

木に餅がなる

木に餅のなるとやいはむ松の雪

盛 成 (同)

十七八はやぶ力

若竹や十七はちく藪ぢから

重 繼 (同)

桃栗三年柿八年

三年こゝに須磨の浦人

桃と栗数をうへ野の里の春

勝 乘 (同)

紺屋の白袴

薬に降るゆきや紺かき白袴

吉 泰 (同)

麒麟も老いては驚馬に劣る

遅く咲くは驚馬にや劣る麒麟草

政 之 (同)

以上の舉例によりて、貞徳派の俳人が、いかに世話とりに腐心せしかを見るべく、毛吹草に世話之部を設け、青木鷺水が故事要言を編集せしが如きも、一作句者の栞たらしめむとの意なりと察せらる。而して其句の幼稚にして、詩的價值乏しきは言語道斷にして、徒らに諺の意義に拘泥し、その運用に窮したる陋態は、さながら長槍を雪隠に揮はむとするにも似たり。蕉風のものには諺を使用するも、強ち其本義に拘束せられず、不離不即の間に詩趣を發揮して、多少の姿態を成せること、次の例句について見るべし。

名月や熊野松風に米のめし。
冠にもさはらず雛の桃の花

(季下に冠を正さずに據る)

祖父五十周

去る者は疎し。ことしも夏木立
爪かくす。日比忘れて猫の戀
ゆく水に物かく。春の日數かな
名月や下戸の建てたる藏ひかむ
人の親の焼野の雉子うちにける
深山路や櫻は花にあらはるゝ。
煩惱の犬にかまれな鉢たゝき
足元のあかるい花のもどりかな

乙 程
由 己

同 且 五 多 曉 同 同 辰
爾 律 少 臺 閨

つよかれと作らぬ花の庵かな

(家は弱かれ主は強かれに據る)

年玉や利かぬ薬の醫三代

著倒れの京を見に出よ御忌詣

出代のあと濁さじや糠袋

夕立やけふの歩みも未申

夕立や傘を借す世はなさけ

水うみの低きについで行く螢

出る杭をうたうとしたりや柳哉

喰うて寝て牛にならばや桃の花

むつかしき鳩の禮儀や閑古鳥

子をすつる藪さへなくて枯野哉

北枝

太祇

几董

同

同

同

同

蕪村

同

同

同

らふそくの涙氷るや夜の鶴
灌佛やもとより腹はかりの宿
又うそをつき夜に釜の時雨かな
よき蒲團宗祇とめたる嬉しさよ

(「宗祇の蚊帳」といふ古諺に據る)

ゆく秋や尻も結ばぬ絲すゝき

行春や一寸さきは木下やみ。

湯の辭儀の雪になりけり年じまひ

餓鬼のもの蟲の來てとる燈籠哉

いざよひの芋や十日の菊の顔

筆とむる春に仇名や手六十六

(算用十八手六十)

三文もせぬ矢を雁に案山子かな

同

(雁は八百、矢は三文)

近世の俳人にして、巧に諺を用ひしは、俳諧寺一茶なり。一茶は滑稽を好み、俗語を愛す、これその世話どりの句多くして、又その成功著しき所以なり。也。有も亦滑稽に長じ、羈衣の俳文の如き、巧に無數の俚諺を點綴して、人をして應接に違なからしむるものあれども、其句は稍、俗意俗情に走りたる嫌ありて、一茶の酒々落々と言ひ放ちたるに及ばざるや遠し。

ゆきがけの駄賃になくや小田の雁

一茶

寐たあとの尻も結ばすかへる雁

同

月の梅酔の蒟蒻のと今日も過ぎぬ

同

慈悲すれば糞をするなり雀の子

同

木の蔭や蝶と宿るも他生の縁

同

すつぼんも羽ほしげなり歸る雁

一茶

(雁が飛べば石龜もちだんだ)

く。ら。が。り。の。牛。を。曳。出。す。日。永。か。な。
春。風。や。牛。に。ひ。か。れ。て。善。光。寺。
苦。の。婆。婆。や。花。が。開。け。ば。開。く。と。て
木。枯。や。雀。も。口。に。つ。か。は。る。ゝ。

同 同 同 同

兩國橋上

下見ても方圖がないぞ涼み舟

同

(上を見れば方圖がない)

一散に飛んで火に入る霰かな

同

節季候や七尺去つて小節季候

同

(七尺去つて師の影を踏ます)

掃溜へ鶴のおりけり和歌の浦
 死花をはつと咲かせる佛かな
 足もとのあかるいうちや歸る雁
 江戸櫻花も錢だけ光るなり
 時鳥けんもほろろに通るけり
 草の葉や馬鹿丁寧に五月雨
 さぶくど馬鹿念入れて五月雨
 初螢女の髪につながれな
 食はず貧にとて左團扇かな

(食はず貧樂)

涼さや沈香もたかす屁もひらす
 人は武士君小粒でも唐がらし

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

(山椒は小粒でも辛い)

壁。に。耳。藪。も。も。の。を。や。夕。し。ぐ。れ

一茶

(岩もものをいふ)

風。の。子。や。裸。で。に。げ。る。寒。の。灸

同

蟪。蛄。や。五。分。の。魂。こ。れ。見。よ。と

同

村。千。鳥。そ。つ。と。申。せ。ば。は。つ。と。立。つ

同

(そつと申せばがつと申す)

東へ下らむとて中途まで出たるに

掠。鳥。と。人。に。呼。ば。る。ゝ。寒。さ。か。な

同

(信州の掠鳥)

十番諺合

歌合はふりたり、句合もめづらしからず、いでや我より古を倣すといはむも、
鰯の齒ざしりをこなれど、よし見む人は、園栗の背くらべども晒はば晒へかし。

一番

左勝

人の提灯で明りどる

右

人の禪で相撲どる

左右共にをかしけれど、人の禪あまりにむさくろしければ、此相撲は暫く提
灯の足下あかるきを、勝と定め侍る。

二番

左持

鼠とる猫は爪かくす

右

能なし犬の高吠

深き川の静かに流れ、浅き瀬に仇波の立つなど、皆その心は同じけれど、これは猶犬といひ、猫といへるに趣そひぬめり。深く藏して虚しきは、いと殊勝なれど、鼠とる罪の深きには、この猫一つの世にかは佛果を得む。されど妄語の罪は犬にも遁れ難く、よき持にや侍らむ。

三番

左勝

花より園子

右

色氣より食氣

花の下より鼻の下を大事がる功利主義の疎ましきは、左右とも變り侍らねど、右のいひざま餘りにあらはにて、色氣なければ、彼岸團子の甘きに花をもたせて勝どす。

四番

左

猿の尻わらひ

右膝

目屎鼻尿を晒ふ

目屎鼻尿を人化したる、我國にはいさ／＼珍しき例なりかし。莊子が寓言中におくとも、いかでか遜色あらむ。左右の優劣、猿の毛の三すぢばかりにあらず。

五番

左勝

狐の子はつら白

右

蛙の子は蛙

左いと古き諺にて、盛衰記にも見えたるを、今はをさ／＼知る人なくて、蛙子のみ時得顔なるもうたてしや。右の何の巧もなく、言ひ下したるにむかへて、左はつら白と、それたる處に手柄はあるべし。

六番

左勝

猫に小判

右

猫の尻に才糞

猫も杓子も金の世の中に、この諺いつまでか行はるべき、鯉節より小判を好む猫も、いづべき世の末にこそ。作意は右の方稍、立ち勝りたれども、猶簡潔は左にやあらむ。

七番

左勝

面々の楊貴妃

右

すきには痘痕も靨

靨の鈴なりは多きに過ぎて及ばざる咎や、立ちそひ侍らむ。左は情人眼中、出西施といへると異境同工といふべし。楊貴妃と無鹽とのおとりまさは、物定めの博士を待つべくもあらじとや。

八番

左持

死ねがな目くじろ

右

目の中に指突込む

おそろしの世の中、眼球のかけがへも要すべく思はるゝを、死ねがなと詛はれむには、それも詮なかるべし。等閑の勝負づけして判者の目をくじれなど、恨みられむも恐しければ腫物にさはる心地して、そとさし置き侍りぬ。

九番

左勝

勝ちて甲の緒をしめる

右

燒鳥にも綜緒をつけよ

右は只細心の徳を述べたるを、左は勝ちたる上に油斷なき心がまへ、一入ゆ
かしく、かくてこの勝負も自ら定りぬべけれ。

十番

左持

いさかひ過ぎての棒乳切木

右

葬禮すみての醫者ばなし

小兒の陥りたる後に井戸の蓋するといへる諺も、思出でられて、左右とりど
りに興趣多し。左を勝とせば、醫者殿の繰言うるさかるべく、右を勝とせば、棒
乳切木のそば杖やくはむ。兎角は之を以て十番いさかひのはてとし判ぜざ
るを以て判する物也。

世話盡病魔經

如是我聞、人は病の器とかや、抑、病は氣から、氣で氣を病むは愚の至、病は口より、大食短命、話半分腹八合、いかもの食ひの錢吝み、安物買うて鼻落す、馬鹿にはつける藥なけれど、自惚と瘡氣はもつたが病、目病み女に風ひき男、オホンノゝゝと氣取つても、風は百病の本、鬼の霍亂、油斷は大敵、はくらんの藥ははくらん病み、顎で蠅瘡ふるひが湯治場へ行くやうな容體になつては、葬禮すんでの醫者話、生まれた後の早め藥、一に看病二に藥、ガンといへば火事、ゴホンといへば肺病、くつさめといへば尿を食らへで、山の芋を蒲焼にする早手廻しが肝心、勘文、容貌定め命定め、ど定まりし抱瘡麻疹は苦もなく濟むが、脚氣山中、瘡栗津、有馬の湯でも、お醫者さまでも、今以て直らぬものは戀の病、思ひ面瘡、おもはれ抱、抱澤山の才子多病連中、まづは御用心。ヤレ百藥の長で御座る、ヤレ卵の時酒は

藥で御座る、ソレ熱いは暑氣拂、ソレ寒いは霜消し、口は重寶ながら、上戸は毒を知らず、下戸は藥を知らず、好物に崇なしとは申せども、口に甘きは腹に害あり、後腹病んで財布の腹下し、人參飲んで首締る、四百四病より苦しいものは貧の病追はれて稼がぬなまくら者の、仕事幽靈飯辨慶その癖夏瘦寒細り、たま／＼肥ゆれば腫れ病、瘦兒には、すね、痛む上に針。同病相憐む癩カザイの瘡うらみ隣の疝氣を頭痛にやむ神經病、痢氣尿をくふ潔癖病、目の上の痰瘤は鬼がとり、疝氣の蟲は蕎麥をくふ。瘡と虱は隠すに殖え尻瘡のかゆいと一人掣の可愛さは遺瀨なし、蝶を捕ふれば瘡となり、南瓜を盜めば癩となる。ゐざり三百文、啞の一聲、鍛冶は居ながら飯をたき、躰は居ながら尿をする、便利なやうでも足痿起つことを忘れず、盲の垣のぞき、聾の立聞、もつた病は直らぬためし。世上の寶は醫者智者福者、立關と長羽織は仁術の表看板、毒にも藥にもならぬ水藥二階からさす目藥に噎んだものが潰えもせぬ内股膏藥、どちらつかずの診斷に、藥九

層倍の錢取り病に死病、朝腹の丸藥程の利目なし。疥癬七年瘡毒八年頭のできもの十三年、桃栗三年柿八年、柚黃色くなりて醫者の顔青くなる今日此頃、粟粒程なできものに、痛くない腹探らるゝ検査沙汰肝をつぶして狂人走れば不狂人走り、降つて湧いたる鼠狩、疫病神で敵打つとは是なんめり。扱も其後、醫は三世、父は藪子は筍、その又孫は藥人を殺さず藥師人を殺す不重寶、三たび肱を折つて良醫となるとは、折らるゝ者こそよい迷惑。毒藥變じて藥となるは勿怪の幸、良藥は口に苦くとも、主と病には勝たれず、屁一つが藥千服とて、是ばかりでは濟まされじ。何かと申すもあつたら口に風、兎角はいづれも折角御養生、十方佛土中、唯此一乗の法あつて、二もなく三もなし、朝夕此經を讀誦する時は其功德無量にして、一切衆生攝取不捨、息災延命疑なし、云々。

附 錄 終

福岡赤御所ヶ谷四〇
 井雄士山本石樹
 電話(五三)五〇五七番

昭和四年六月十日 發行
 昭和七年九月十日 三版

不許複製
 おとを

諺の研究
 定價 金貳圓參拾錢

著者 藤井乙男

發行者 吉田文治

印刷者 西川太良吉

京都市島丸通下長者町上九
 京都市下京區坊城通五條下

發行所

京都市島丸通
 蛤御門前

更生閣書店

大取次店 東京北隆館 京都大盛社

1507
大(四)人(六)
1985.3.11



多崎克